

英人其信賴すべきを察し、日本と同盟を結ぶ。同盟成りて、日本露と戦ひ、而して當年の干渉國たる獨も佛も傍觀せり。先づ北京に入りし、日本軍は徒らに先陣の虚榮を求めしに非ず、意外の邊に意外の影響ありたりと知れ。我南極探檢隊の成功は必ず著しき影響ありとせず。而も外に對し博覽會と讓らず、内に在りて士心を興奮すること多し、心ある者豈に之を助けざるべけんや。

南極探檢を援けよ 七月十三日 大阪毎日新聞

白瀬中尉をして其志を成さしめよ。

神功、豊公の雄圖はあり、文倉、間宮等の壯舉もあり、山田、濱田等の快男兒もあり。日本の小帝國古來必らずしも吞吐乾坤の漢子なきにあらず、然りと雖も冒險的探檢に近世的方法を以てし、百折不撓、萬難を排して、前人未發の暗黒界を踏破し、精神上、學問上、實益上に多大の功績を樹てたるものに至ては、我これを歐米人に譲らざるを得ざらんとす。然り、故人を起し來るも尙此遺憾なきを得ず、況んやこれを現代に限るに於てをや。

殆ど蒼海の一粟に過ぎざる經東の一孤島、國を以てして、歐米大陸に國を建つる大小十列國を一括したるものに對し、人物の有無と多少とを論ずるは、聊か比倫を缺くの嫌なきにあらずと雖も、由來我の個人として偉大なるものに富まざるものは、我よりも尙小なる英本國と比較したるのみにも既に明白なるべし。

し。政治家として外交家として、學者として、發明家として我と英國と果して、何れか其偉大なるものに富める。吾輩は遺憾ながら、自ら讓歩せざるを得ざるを覺ゆ。探檢家に至りても亦然らざるを得ざるなり。論より證據今の福島中將が、西伯利亞を横斷し歸りたる時熱血を湧して、盛に歡迎したる國民は、爾來今日に至る二十餘年間復如何なる探檢家を送り將た迎へたるか、吾輩今之を舉ぐる能はず、苟かに以て耻辱とし又深恨とせり。

然るにも不拘、歐米列國に於ては幾多の冒險家、幾多の發明家、幾多の探檢家を出して止まず、常に天涯の一角に於ける、無關係の我々外人をして、譏歎せしめ吹聴せしめて止まざらしむ。ヘヤン博士の中亞探檢、ペアリー大佐の北極探檢、シヤツクルトン中尉の南極探檢、ツエベリン伯其他佛、獨、米、英、諸國人の空中飛行、ルーズヴェルト氏の猛獸狩、是等は其事業に差異あり、規模に大小あり、遂行に難易ありと雖も、要するに皆無關係の我々外人をして、多大の同情と興味とを以て、譏歎歡呼覺えず熱血を湧かさしめたる最近の事例にあらざるなし。他人の事業に對して、懇切の同情を寄せ其成功を以て自己の成功の如くに喜び傳ふるは實に人類の美德、誰れか其譏歎吹聴の聲を小にせよといふべき。寧ろ其益々大なるべきを獎勵せんとす。然れども其事業を遂行する者、及び斯かる偉人を有せる國と唯他國人の事業を譏歎吹聴する者のみにて、之と功を傳ふべき、若くは、傳へんと企つる一人もなき國と、其國民の價值其邦家の名

譽を比較し來る時、我國民中冷汗の俄に背に冷きを覺えざるを得る結果して幾許ぞ。故に斯の如き事業に任ぜんとするの好漢ある、相共に努力して其志を助け以て其功を成さしむべきなり。今南極探檢の事業を遂行せんとしつゝある、白瀬中尉の如きは即ち夫れ其人にあらずや。

或はいふ、我帝國其人に乏しと雖も、而も左まで悲觀すべきにあらず、唯元來國家國民共に貧窮にして、斯る見込乏しき事業に對して、資金を投ずる程の餘裕なく、従つて、其人をして其志を遂ぐるに至らしめ能はざるのみと。然り是れ決して、無稽の言にあらず、或は半面の眞理を道破したるものならん。然りと雖も、國家、富豪は勿論、生活の稍豊かなるものが、毎に救濟慈善の爲めに多額の資金を散じて、厭はざるは珍らしからざる事にあらずや。時には不必要なる事業に向つてすら贅澤なる散財をなすにあらずや。否初めより散財の爲めに散財するものすら多くして、其額亦大なるにあらずや。是れ或は其當人よりすれば何れも必要の事なりといはんも、未だ、眞に然りといふべからず、餘資なきにあらざることを以て知るべし。然り、餘資無きにあらず。唯其事に任ずるものが、彼等をして財源を傾けしむるに足る程の平素より名の聞こえたる人物ならざるか、若くは餘資あるものの、見聞の狭き平生其有爲の人物を知らず、又其事業の性質を解せず、爲めに無明の感情徒らに之を否定するに依るのみ、豈惜むべきの極みならずや。今白瀬中尉の南極探檢の計畫成りて其資金の缺乏に憂ひつゝある正に此好例證なり。吾輩の之を以て世上に訴

ふるもの亦唯中尉に對する一片の俠心禁じ難きが爲めのみにあらず、此の如き壯舉を敢てせんとする不撓の勇氣と、不拔の意志とを有せるものゝ出でたる、既に我帝國の名譽にして且其行の國民に與ふる精神的感應たるや、一の大なる教育を施すと同義なるものあるを以てなり。世上或は尙其成敗を疑ふものあらず、成敗の數は神にあらざれば知るべからず、唯周到の注意と、十分の準備とをなし、人間の思慮に於て、遺算なき計畫をなし得たるものを以て、成功すべしと見るの外なきのみ、之を成す如何、資金の豊裕に待たざる可らず、而して彼においては實に難事中の最難事たり、然れども富豪よりする極めて易々たるのみ。一刻千金、一臂萬金は、富豪の常に散じて、常飯事とする所、數人の富豪若し中尉に同情し、生活に餘地ある全國の同胞亦其志を助けば、數萬金を集むる必しも難事にあらざるべし。かのツェペリン伯が飛行機の破壊したる時、獨逸皇室を初め國民の同情よりして、其再造の爲めに義捐せられたる額は、數日にして五十萬百萬を數へたるにあらずや。我の獨逸に及ばざるや遠しとするも、其十分の一だに義捐するものなしとせず寧ろ我の耻辱にあらずや。

殊に我富豪及一般社會が、毎に水火の災に罹りたるものに對して、義捐するのみに勇にして、探檢發明等國家民生の爲めに遂げんとする積極的の事業に向つて、之を助くるに吝なるは、所謂島國的にして、寧ろ亡國のなりといふべし。機會は將に去らんとす、英のスコット大佐は大規模の計畫を以て南極に向ひ、シ

マツクルトン中尉の事業を完成せんとしつゝあるなり、白瀬中尉は、三旬の間に出發するを要す。而して今や其成否は繫て同胞同情の厚薄如何にあり、吾輩實に之を見殺すに忍びず、諸君世上と共に努力せん。

南極の競争探検

七月十七日

報知新聞

白瀬中尉に由りて計畫せられたる南極探検の企圖が如何なる結果に歸すべきか、或意味に於て、我國文明の程度を世界に紹介するものとして、愛國家の注意に價せずんばならず。愛國は獨り敵國外患に對する觀念にあらず、國家の名譽を擁護し、其位置を高むるは如何なる場合に於ても愛國的行動なり。若し愛國の精神は砲煙彈雨の間のみ現れて、人類の幸福を増進すべき文明の事業には、少しも其發現を見ざれば、其愛國や極めて低度のものなりと謂はざるを得ず、南極探検の如きは、成功と否と、直接に利害關係を生ずること甚だ少なしと雖も、其中には獻身的崇高の精神を含み、辛苦と戦ひ艱難を冒すの勇氣を含み、前人未踏の地に入りて、世界に最新の知識を提供する雄大の企圖を含む、一括して之を論ずれば、之を文明の發現といふを妨げざるべく、少なくとも百種探検中の華たるを失はず、是を以て極地の探検は各國民の競ふて之を計畫し、互に先進第一の名譽を博せんと欲する處にして、計畫者は、世々其跡を絶たざるのみならず、一般國民は大なる興味を以て此種の勇士を送迎するなり。今や北極は合衆國の勇者ペヤリー氏に先鞭を付けられ、餘す所は一の南極あるのみなるに、英國の探検家スコット氏は嘗て試みたる經驗と、十

分なる準備とを以て、多大の希望を抱きて既に征途に就きたり。若し我國民にして、此際何等の成す所なくば、吾人同胞の共同の愛宅なる地球の兩端は空しく外人に發見せられて、大和民族は、此雄大高尚なる事業に毫厘の寄與なくして終るも未だ知るべからず。是れ文明の一大國たる位置に顧みて、大に耻づべき事にあらずや。

白瀬中尉が此間に驟起して、奮つて、スコット氏と輪贏を争はんとするは、宜しく國民の感謝すべき所にして、各自應分の力を致して、傍より之を助成するは、勿論國民の取るを喜ぶ義務なるべし。元來此種の計畫は富家に於て擔任するを適當なりとし、三井、三菱以下が國家に奉ずる最良の方法なるは疑なきも、時日の切迫によりて熟議の暇なく、止むを得ずして之を公衆に訴へたりとすれば、今は公衆に於て遲滞なく其義務を取り、白瀬氏の志を成さしむる外にあらず、幸にして一方には後援會成りて、大隈伯爵之が會長として盡力せらるゝあり、又一方には東西の朝日新聞に於て廣く義金を募集するあれば、有志の士は何れなりとも其好む所に義捐せらるべし、白瀬氏が果して南極を探検し得るや否や、スコット氏より先頭に立ち得るや否やに至りては未來の問題なり、何人と雖も之を豫言し得る者なかるべし。然れども氏の極地探検に關して、多年の鍛鍊を有し、適當の知識を備ふるは、之を信じて可なるべく、事業の成功と否とは、主として將來の運命に關し、準備の不完も亦與りて有力の原因たるべし。是に於てか今日公衆の務むべ

き所は、成るべく其準備を完成して、出發に臨みて其の遺憾ならしむるに在り。其程度こそは、則ち國民が斯る事業に感ずる興味の尺度にして、直ちに是れ、我國民文明の程度の反映なれ。吾人は社會が美事に此文明の試験に及第して、大和民族は決して戦争にのみ勇なる者にあらざるを世界に證明せんことを希望し、探検隊に向つては體力の強健を第一條件として、人選する外、別に凡ての科學的知識を網羅し、百般の觀察を有効ならしむるに努力せんことを望む。

世界的の大壯闊白瀬中尉の南極探検 七月十七日 大阪朝日新聞

北極は既に米人ペアリー氏によりて探検せられ、今や世界の冒險家、探検家の視線は齊しく南極の一點に向つて集注し初めたり。南極探検の大壯闊は刻下のところ日英兩國の外米獨二國に於ても、企畫され準備に取掛れり。即ち獨逸のファイルヒッセル中尉は近くウェーデル海の根據地より出發すべしと公言し、米國のペアリー少將亦兩極探検の名譽を双肩に擔はんを欲し紐育市民に對し、南極にも米國旗を樹つべしといひ、英國のスコット大佐は四十萬圓の準備と皇太后より賜はりたるユニオン、シヤツク旗を携へて、既に六月一日を以て倫敦を出發し、八月一日南阿の岬角ケープタウンを通過し、十二月末マツクムルド灣到着の豫定なり。而して我帝國の勇士白瀬中尉の一行は、此既に出發せるスコット大佐より更に三週間早く上陸地に達すべく、即ち來る八月十五日發程、十一月中旬マツクマード灣に着しそれより七十三日間の水上

旅行を敢行し、四十四年一月廿八日いよいよ日章旗を南極に樹立して、記念の饒國を埋め見事世界的の大競争に打ち勝ち、先づ第一の功を奏し、二月一日芽出度極地を發して、歸航の途に就くべき豫定なり。米獨二者の企畫は未だ現實されざれば姑く措き英のスコット氏が彼國朝野の熱心なる後援の下に十分の準備を整へ、既に其途に上れる向ふを張り、準備はスコット氏の十分の一にも足らざる一葉の帆船に乘じ、行程萬里、狂瀾怒濤の間を縫ふて、冰海に突進し、更に五百哩の冰山を踏破り、勇往邁進、零點以下數十度の寒氣と戦ひ缺乏に耐へスコットに先つて極地に足跡を印せんと欲す。我が白瀬中尉一行の企圖や、眞に是れ振古未曾有の壯舉、世界的の大壯闊なり、日本國民たる者豈同情を表せず後援を惜んで可ならんや。

白瀬中尉は謹嚴剛直、思慮周密謹に極地探検の目的の爲め、先づ身體鍛練の要ありとし、攝氏零點下七十度の北方氷雪の裡にエキスマーと同棲し、酒も吞まず、煙草も喫まず、身體に獸脂を塗り、水のみを飲み、體力を練磨したる人、船長以下の乗組員も亦それらに劣らぬ剛者揃ひなり。而して極地測定の爲めには天文地理の學識ある者も乗組む筈となれり。

故に探検の目的遂行に要する乗組員の資性體格の點に於ては些の缺如する所をなし。たゞ探検に要する物資諸器械の準備に於て政府の補助もなく、民間の援助も、未だ一般に一行の事情周知せられざる爲めか、甚だ冷淡にして、此の未曾有の企圖に對する邦人の意氣込が四歐に於けるが如く旺盛ならざるは吾人の遺

憾とする所なり。

政府の補助なくとも、國民の熱誠なる後援ありて、十分の準備を整へ發程せしむるを得ば、たとひ萬々一不慮の災害に遭ふて、生還するを得ざるとするも、第二の白瀬氏は直ちに出で、必ず其志を繼ぐべし。現に中尉の息、白瀬知氏(今回海軍兵學校卒業)は南極探検發表會の當日許可を得て上京し、「縱令我が父にして、萬一目的を達し能はざる時は、不肯遺志を繼いで必ず其初一念を成就せしむべし、安心して出發せられよ」と激勵したりといふ。成敗は素より豫知し難きも、國民の後援だにあらば、日本民族の腕試しを世界の槍舞臺に於て試ましむるを得べきにあらずや。器械の應用は兎に角、日本民族の困苦缺乏に耐ゆる平素の鍛練と政爲の氣性とは斷じて、白色人種に劣ること無しと信ず、唯其設備の比較的簡單なること、學術的要素乏しきの故を以て、之を批難せんとするものあるも、斯の如きは問ふ所にあらず。國民の援助さへ厚ければ、設備は幾千にても出來べく、此の簡單なるものを以て、設備の贅澤なるものに當らんとするが、日本魂にして、且學者の奮つて之に投ずるものなきが如き、未だ日本魂の足らざるものなり。日露の戦役も豈設備完全に、十分勝算ありての、開戦ならんや。斷じて行へば鬼神もこれを避く。吾人は南極の探検の壯圖と、白瀬氏の意氣を愛するものなり。

冀くは大方の士君子、大は世界的競争の爲、小は白瀬氏死地の門出の爲、滿腔の同情を發し、此壯舉を

果し、我が日本民族をして、世界の大競争に勝利を得せしめよ。

南へくの叫びと南極の探検

七月廿日

九州日報

海軍大臣及次官は白瀬中尉の南極探検に賛同を拒絶せりといふ、成功の覺束なきを思ふてなりといふと雖も、覺束無しと思へば十分に注意し、指導し、且つ援助してこそ然るべきに、直ちに賛同を拒絶せりとは何等の無情ぞや、殊に中尉の壯舉が既に世界に發表せられて、スコット大佐の計畫に對し殆ど國際的競争の姿となり居れる今日、日本國民としては既に背水の陣にあらずや。海軍大臣も次官も武士の情を解せざる人にはあるまじ、又日本國民としての負けじ魂を有するの點に於て敢て人後に落つるものにあるまじ成功疑はしとして賛同を拒絶したりとは吾人如何にしても其意を得ざるなり。

元來吾人が、南極探検の壯舉の日本人に依つて計畫せられたるを欣ぶ所以のものは、この舉が世界の文明に貢獻す處多大なるに由るは勿論なりと雖も、別に一つ特殊の理由の存する事を告白せざるを得ざるなり。何ぞや曰く南極の長端に日章旗を樹立し來らんとする白瀬中尉の壯舉は、南へくと叫びつゝある日本國民の爲めに、其目標を樹立する所以なる事是れなり。

今や日露新協約は成り、日韓合邦亦遠からずして發表せられんとす、北方の事茲に定まるものといふべし、今海國民の注目すべきは南方に在るなり。年々増加する人口の處分問題は別とし、單に商業貿易上の

點より見るも、南方には人口三億を有する印度あり、千八百萬人の爪哇あり、二千萬人の安南あり、四百三十一萬人の澳洲あり、又四億の生靈を有する支那の如きも、其人口の最稠密にして且購買力に富めるは、南清一帯の地にあり、其他南米の如き、南阿の如き一々數へ來らば我國の將來發展し得べき領域は實に無限なりといふ可き也。若し夫れ年々増殖して止まざる人口處分問題に想到するに於ては我國如何に韓國を有し、南滿州を有し、又臺灣樺太等の新領土を有すと雖も、前途幾十年幾百年の長計を立てんとするに此南方無限大の地を度外視して可ならんや、然るに現下南方各地との貿易上の有様は如何、又在留日本人の分布状態は如何、吾人が南極探檢の壯舉を賛成するに當りて、別に一つの意味を付け加へんとするは即ち此點にある也。

要するに白瀬中尉にして成功せば、并ば國民の成功なり、國家の成功なり、故に吾人は必ず之を成功せしめずんば止むべからず、もし其成功を疑ふものあらば、進んで其成功を期し得るようによに援助すべきのみ。

南極探檢に就て白瀬中尉に望む

小林房太郎

(七月廿二日時事新報)

白瀬中尉は二句を出でずして南極探檢の途に上らんとす、實に空前の壯舉なり、吾人は衷心より是を賛し、其成功を祈る、極地探檢の事たる。西曆紀元前三百年ピテアスのアリチー諸島の北なるツール諸島の

發見に初まり、當初は新大陸の發見のみを目的とせしも次で、水産物の調査を主とし、三轉して航路の發見に着目し、ジョンフランクリンの北西航路踏査、ノルデンショルドの北東航路の發見となり終に純然たる學術調査を主とするに至り、已に北極は米のビヤリー之に到達し南極は英のシャックルトンにより南緯八十八度廿三分の地點を究め餘す處のもの三十七分、行程凡そ七十哩のみ、今や白瀬中尉はシャックルトンの進路に従ひ、此の未踏の地を踏査せんとす、同行希望者は其門に雲集し、已に望む所の定員を得ると、然るに氣象、天文、地理、生物等に關する知名の人なきは何ぞや。

聞く、其經費の出處に就ては別に計畫なく、止むなくして汎く天下に訴へんとし、是に於て乎、大隈伯以下南極後援會は成立し、東京大阪兩朝日新聞は主として寄附金募集の任に當り已に二萬金を得たりと聞く、されど事業の性質よりしては尙多大の同情者ならざる可らず、其これなきは何ぞや。

從來、海陸探檢に従事せる主任者は多くは學操共に高く必ず學術的の根據を基礎として成功せり、探檢の如きは單に學說の實行に外ならず、見ニコロンアスの亞米利加發見は地球の球形なるを根據とし、之れによりて、東方亞細亞に航せんとし圖らずして亞米利加の發明の偉功を奏し、ナンセンの北極探檢は、西比利亞の北方に於ける海水海氷の、北大西洋に移動すべき證據を有し、探檢船フラム號を極地の海氷に託し、遂に其目的を達せしに非ずや、白瀬中尉の南極に向ふや、必ず自信の證據なかるべからず、單に前

入の進路に投じ、南極にだに突進するのみ望むが如きは、決して文明の探検と謂ふ可らず、予の中尉に望むは、此自信を發表して、世の疑を解かざるべからず、予は中尉が茲爾たる風帆船に乗じて極地向ふと聞き、大に之を危ぶみたりしも、今や堅牢なる汽船を得るの望みあるといへり。此點につきては大に人意を強ふするものあるも、本船は中尉以下を南極陸に上陸せしめたる後如何にして中尉の歸着を待つべきや、一旦ニュージランドに引き返すべきや、若し然らずして氷塊に閉ぢられたる時の用意や如何、又中尉以下の上陸隊の學術的調査の如何なる方法順序によるべきや、路上測圖、經緯度測定、寫眞攝影、スケッチ、氣象觀測等爲すべき任務甚だ大なり、聞く一日六里の行程との事なるが、此の行程に於て、以上の諸研究を成し得べきか、特に後方との連絡等につきては如何なる方法によらんとするか、これ白瀬中尉が重大なる職責上の義務として世に公表せざる可らざる處のものなり、世人白瀬中尉の此事業に對し、多大の同情を寄するもの多きも以上の諸點につき大に疑念を有すと聞く。富豪篤志家の大に金を捐てざる、學者の希望の少なき、共に爰に因するなきか、以上は白瀬中尉に對する予の希望なり。中尉の探檢は己に世界の知る處、吾人は全力を注ぎ之を執行せしめざる可らず、其執行上多大の効果あらしめざる可らず、青年子弟の興奮劑たらしむるに止まる如きは吾人の採らざる所なり、敢て一言す。

南極探檢の成否

七月廿二日

萬報朝

白瀬中尉の南極探檢計畫は其後着々進捗しつつあるが如し、これ先づ中尉の爲めに叫びたる吾人の満足する所なり。

元來中尉の探檢費用は頗る少額なれば、政府の一諾にても、足るべかりしに政府此途に出る能はず、遂に中尉をして、國民に訴へしむるに至りたるは、必ずしも中尉の本懐にあらざるべし、これ中尉の準備が、稍や後れ氣味となりたる次第なるが、既に國民の同情に訴へて、其翼賛を得たる以上は、中尉は國民の中尉にして、其探檢計畫は、國民の探檢計畫なるや明白なり。中尉及中尉の探檢員は其後援が如何なる形によりて便せらるるも深く此點に留意し、苟くも國民の代表者たる本旨に背かざるを要すべし。

初め中尉の探檢費用が僅に四萬餘圓にて足ると發表せられたるに於て、吾人は其準備を十分にすべき事、其他について云ふ所ありしが、近頃中尉の計畫漸く熟するに及びて、今更の如く兎角の批評を爲すものあり、其要旨は、吾人の既に盡せる所を繰返すものたるに過ぎず、學者の説とても特に聞くに値するものあるなし。殊に今は最早探檢の成否を論じて、中尉の前途に名を置くべき時にあらず、中尉をして十分の準備を整へて、勇ましく出發せしめんこと、是れ國民の美德なるべし、然かも中尉の前途には百難あり、國民もまた其成否に關して惑ふと云はば、此の疑惑に光明を投ずるは無用の業ならざるべきも、而も確く能く、此の疑惑を解くものぞ。思ふに恐らくは其人ならん、要するに南極探檢の成否は、糧食運搬、忍

耐の問題なり、天人に勝つか、人天に勝つか、の問題なり、而して此問題を解決するものは、探検隊員其人ならざる可らず、其準備其訓練と其の機会チャンスならざる可らず、然り機会が其探検の成否に關して、殆ど一半の鍵を握ることもまた認めざるべからず。

吾人は今中尉の準備、隊員の訓練に關しては云はざるべし、唯一語彼等の競争者なるスコット大佐の隊員が、英國海員の精髄にして、英國王立地學會頭が、彼等を評して、彼等は成功を確信す、然らずんば、一死を期するのみと評し、隊員と隊長との間には大なる信頼ありと云へるを以てすれば足る。若し夫れ中尉の前途に待てる機会に至りては、機會自らをして語らしむるの外なからん、南極は人も知れるが如く、落漠たる大陸にして、極に近づくに従つて、其位地次第に高まると云はるしも、極其物は必ずしも氷裂若し或は嶄々たる氷山の頂點に位すべしと思はれず。故に新に南極探検より歸來せる佛のシャルコー博士の如きも、スコット大佐にして若し最後の五十哩圏内に入らば、極地に旗を建て得べき望み確實なりと云へり、シャルコー博士は等くスコット大佐の成功を信するも、博士もまた一の運命論者なり、曰く萬事は大佐の成功を信せしむるも、大佐もまた運命の氣中にあることを忘るべからずと、運命とは何ぞや吾人の所謂機會是也。吾人は白瀬中尉の確信を多とし、又其勇氣を稱賛するに吝ならざるも、中尉が其確信を抱くことの餘りに無雜作なるに不安の念なき能はず、何となれば、中尉とても運命の氣中に握らるゝの人

なればなり、中尉にして若し、運命に風せざらんと欲せば、其の能限りに於て好き機會を作り、惡運に當るの用意なかるべからず、シャルコー博士は出發早々惡運に襲はれたるも、能く破壊せる船を以て十數ヶ月の探検を遂げたりき、これ其の用意の完備せるに依るなり、中尉は機會が多く如何にして來るかを解せりや。

吾人をして今左の一挿話を置かしめよ。シャルコー博士は、事業殊に多く探検的の事業が、機會に支配される事を語りて曰く、我が探検隊が新に發見せる、マーザリート灣にあるや、前面に一の冰山ありき、我船を距る五百碼なり、一夜我等二人は其觀測を終へ、余は船房にて書き物を爲しつゝありしが、忽ちしき變々の響に驚き、余は蹴起して、甲板に出れば、これなん彼の氷山の轉覆せるにて、冰山は軋り且破片を飛ばしつゝ我船に向へり、幸にして我船員は素早く船を運らして、其難を免れたるも、冰山は實に我等が、今迄船を繋げる所に至りて全く轉覆せり、當時我等にして若し、臥床の裡に在り、普通の夜の如く、見張を甲板に止めたるに止まらば、此夜こそ我等と我等が船の最後なりしなり、是れ南極探検に於て、機會が如何に人事を支配するかを語りたるものなりと、夫れ然り、機會は種々の形を取りて來る、然らば即ち、機會また認めざるべからずして、彼の豫め探検の成否を云々するが如きは愚者の事のみ。語に曰く、人事を盡して天命を待つと、南極探検の事、唯だ人事を盡して、天命を待つにあるのみ。

南極探検 何ぞ此壯舉を授けざる

七月廿四日

横濱貿易新報

南極探検の舉は、英獨佛露の探検家が争つて、企てつゝある所にして、今や世界に於ける一大競争問題たるの觀あり、此時に方つて、我陸軍中尉白瀬盛氏、亦身を挺して、此世界的競争に加はり以て、大和民族の氣魂を天下に示さんとす。眞に是れ壯氣に是れ快、吾人は斯かる平和的勇士の現代に存するを以て、實に日本の誇りと爲すものなり。(中略)

而して更に此壯舉が如何なる結果を齎すかを察するに其前人未發の地に入り、地理、氣象、潮流、生物の諸學に涉りて最新の知識を世界に提供し得るの榮譽を伴ふべきは勿論、尙ほ探検隊規約に謂へる如く、「列強に率先し、我が國旗を地軸の頂極點に懸し、模範的探検の實を世界に示し併せて、我が大元帥陛下の萬歳を地軸の頂點に三唱」するの時今日世界より單に好戦國民と見られつゝある大和民族の眞價は、一層崇高なる意味に於て、發揚するに至らん、故に吾人は平和的學術的なるに愛國心の發動として大に世界的壯舉を賛成せんとす。(中略)

惟ふに天下必らず吾人と其感を同じふするの士多からん、諸士何ぞ奮てこの壯舉を授けざる、吾人は是等同感の諸士と共に、中尉の爲めに其準備を完からしめ、以つて速かに探検の途に上らしめんことを欲す。是れ實に世界に向つて帝國の國威を宣揚し、且つ又帝國文明の眞價を紹介する絶好の機會たるを知らずや。

南極探検と世論

七月廿五日

東京日々新聞

南極探検は近來の一大快舉なり、計畫其者既に日本人の氣魄を世界に表示するものにして、江湖の同情頗る深厚なるに似たり、同業朝日が白瀬中尉を助けて其準備を完成せしめんとし、朝野の士人亦協賛を惜まざるの事實は、確かに日本國民族の英雄魂を語る者にして、吾人深く之を喜ばすんばあらず、只白日の下尙ほ陰影あり翼聲聲裡動もすれば多少の疑惑を存して、計畫の遂行を危ぶむ者なきにあらず、識者亦或は想ふて言はず、超然傍觀の地位に立ちて、冷眼視する者すら無きにあらず、果して是れ半面の消息なりとせば、其理由を闡明し、蒙を正し、曲を矯むる豈に江湖の爲めならずといふ可けんや。本來此種探検事業は、一國民族の氣力を表象すると同時に、其間に於ける文明の程度を照示する者なり、少くとも科學研究の熱情と造詣とを發展する者なり。白瀬中尉の探検事業にして幸に操定行動を究め旭旗を南極に樹て得たりとするも、其科學的觀察にして、十分の結果無らんには、以て世界に誇るべき高度の價値ありとは謂ふ可らず、寧ろ或は科學の精神を缺けるロマンチックの好奇的事業として、世界の嗤笑を買はんも未だ適かに測り知るべからず、苟くも白瀬中尉の計畫に一片の同情を灑がんもの奚ぞ中尉の計畫をして此等の不用意に終らしむ可けんや。

而かも學者論客の中には、竊かに中尉の計畫を危ぶみ、その成功を疑ふ者あり、船舶、食糧、馬匹、乘

紅員の資格等に就て、幾分の疑念を置くのみならず其上陸地點に對して、異論を挟む者もあり、吾輩は中尉の計畫を全然保し得る程の研究を経ざる故に、傍評家の言或は幾分の眞實を含まざるやを懸念せざる能はず、只之を懸念するが故に、益々朝野の之を幫助して、遠算無からしむるの必要を想ふ。此計畫を冷眼視して、徒らに無關心の立場より、任意の注文を割出すが如きは、決して誠實勇敢なる探検勇士を俟つて道にあらず、若し今回の計畫にして、觀過すべからざるの缺陷ありとせば、之を辨難するに止らず、之を補足するの手段に就て、力を致すこそ善けれ、白瀬氏の計畫は、既に多數人の熱心なる賛助を得て、半ば國民的たらんとす、吾輩は運命の支配以外、其成功を確實ならしめんが爲めに、特に、科學的探検隊として、その目的を貫徹せんが爲めに準備の一點に於て萬々遺算無からんを冀望せざる能はず、斯くして半ば國民的なるものを全く國民的ならしめよ、成否は逆睹し難しとするも、國民に安んじて此探検の發程を祝し得べきなり。

南極探検と其と後援

七月廿一日

信濃新聞

人跡未到の南極々地に探検し、我が日章旗を地軸の頂點に輝さんとす、と、これ實に陸軍輜重兵中尉白瀬氏の企畫せる南極探検の主旨なり。目的なり、吾人は其舉を壯すると共に又其意氣の盛んなるに感ぜずんばあらず。(中略)

隊長たる白瀬中尉の經歷と訓練とは、意を強くするものありといふに躊躇せず、然れども過去の探検より得たる南極の實狀を聞けば、極地探検の至難なるを思はしむるのみならず、又至大の危険を冒さざるべからざるを見る、困難を凌ぐは勇氣を以てすべし、忍耐を以てすべし、危険を冒して進まんには暴虎馮河の點を學ばずして、必ずや避くべきを避けて、終局の目的を達するを期せざるべからず、故に此舉が、勇氣と耐忍との外に、十分なる學術的知識を要するは言を俟たず、更に此の學術的知識を缺かば、假令極地に達し得たりとするも、唯達し得たりといふに過ぎずして、他に何の貢獻する處なきに了らすとせず。此の如くんば遺憾と云はんよりも、目的の大部分を没却するに庶からずや。吾人は隊長白瀬中尉の此點に關する用意を疑はずと雖も、同情の厚き丈、一言せずして已む能はざるのみ。二三學者現に之につきて云々し、準備につきて不安の念を抱くに似たるは、蓋し、探検家の深く留意すべき所なるべく、然らずして、無謀突飛の舉に出づる如きあらば、事に失敗して、世界の嘲笑を招き、大にして我が邦の耻辱とならずとも限らざるなり。費用は四萬圓、これ果して此壯舉に關して、心細き金額ならずや。計畫にては之にて足るべき勘定なり、されど、氷山無人の土地を探検し、或は堅氷の爲めに乗船を鎖さるゝ場合、一二年の越年を餘儀なくせらるゝ虞ありといふに於て、吾人も亦、此の少額を以てその準備を完くし得べきかに危殆の念なき能はず、此等危険の念あるが故に益々國民の同情を喚起し、其の後援十分にして、探検隊の行動、

其宣言に悖るあらば、國民は之を賞むるの権利あり、然らざればその成敗を如何せんや。
 皇天皇土の神佑により、南極地軸到着の目的を達せんとすの宣言は、吾人實に探檢隊の心血を披瀝せるものたるを信せんと欲す。

水曜漫録 秋曼生

七月廿七日

讀賣新聞

○冒險の成功は豫め期待し得べきものに非らず、若しも豫め期待し得らるゝならば何人にも、之を爲すべく特に冒險者に對して光榮ある名譽を興ふるにも及ばざるべし。○無暗に成功を誇らんとすればこそ唯まで云ひて世間を欺かればならぬ事となる。○されど苟も冒險に出懸くる程のものは其位の覺悟なくては叶ふべからず。金の欲しき人はいふに及ばず、名譽も餘りに欲しては冒險者たるに適せざる者と知るべし。○世間には冒險などいふ事を入らざる骨折の様に考へ陰にて悪口を突くものもあり、併し我等は左様には思はず、何も米を作る人が鋏を投じて南極探檢に赴き算盤を弾く人が膝を拂つて北極遠征の途に就くには及ばず、それよりは甚だ謂れなき事たれども、廣き世間には自から斯ることに適當なる人あり、其人が之を企つるに何の不都合あらん、人様々の世の中なり強いて邪説にならぬ事は人々の隨意に任して可なり。○若しも冒險は直様に利益を興へぬゆゑ之を不川なりと云はゞ、哲學科學など、深遠の學術を研究するものも蓋し同様ならん。○大川に架けたる橋も足の幅だにあれば渡るに差支なしとの結論に至らずや。○眼

先の事のみに汲々として後ちくの事を粗略にするは全く素人の考にて、斯る人とは、共に冒險を語る可らざることなり。○(中略)此頃の人心は何となく沈滞し殊に最も元氣なるべき青年が取わけて眠れる如くに感ぜらるゝは、畢竟世間に事が無き過ぎての結果なるべし、此沈滞の氣風を一洗するに冒險などの事は至極適當なるべしと思はる、輕氣球の試乗なども亦宜ろし。○幸に冒險の企てが成功して學術上其他に利益を興ふる事を得ば此上なけれども、不幸失敗に終るとも、此氣風を一洗する丈の功は決して埋没せず、入らざる事どころか、最も有益なる企てなりと稱すべし。○我等の考へにては冒險は五分の成功を見込むと同時に五分の失敗をも見込み而して進を天に任すの外なしと信じ居れり。○其割合が狂ふて失敗七分成功三分と始めより見込みが附けばそれは無謀の企畫として之を中止するに如かず、左ればとて七分の成功に三分の失敗を取る位の事を爲したりとて、それは普通一般の世渡りにもすることにて、少しも珍とするに足らず。○更に進んで十分の安全を期して然る後始めて手を下すが如きは、是れ純然たる卑怯者のする事にして冒險は聊か世間並以上の詰らぬ事をする人なりと嘲笑せられん。今の世渡を爲す者、又此心懸けなかるべからず、吾人は豈唯南極探檢のみならん哉。

時事放言

七月廿七日

時事新報

(前略)我白瀬中尉の南極探檢は、大變な評判じや、内國よりも寧ろ外國の方に評判が高くなつて來たそ

うじや。

こうなつて来ると個人の内証事じやない、國際的競争の仲間入をした譯じや、若しも下らない失敗を取つては、國の體面にも關する譯じや。

其資金は固より、諸方面より諸種の援助を與へて何とかして成功させたいものじや、が併し肝腎な當人の研究にもまだ足りない所がないとは云へまい。

我學者や實業家に就て研究しても研究の餘地は尙ほ有るようぢや。

こんな探検は、大和魂ばかりで行れるものぢやない。事を急かすに成功を期するの覺悟がなくてはならぬ。

南極探検隊を後援せよ

七月廿四日

名古屋新聞

南極探検の出發は二旬の後に迫れり、(中略)今日より發程の日までを算して餘日正に二十日。(中略)マツクマード海は南極への唯一門戸なり、之を競争起點とすれば、我が探検隊は英のスコット大佐よりも三週目前に此起點に入るべき豫定なれども、我は猶ほ未だ出發豫定の中に在りて、彼は既に出發航行の中に屬す。豫定は實行の瞬間時までは虚容なり。我に斯の如く必勝の豫定ありしと云ふは何人も語り得る所なり、事豫定に屬する間は競争者たるの資格を有せざる也。我探検隊の豫定を實行せしむると否とは我國を

して、南極發見の世界的競争者たらしむると否とに關す。而して吾輩の見る處を遠慮なく云はしむれば、日下の如き國民後援の氣勢を以てしては、探検隊の豫定の如く、實行せしむることの、甚だ氣遣はしきものあるを感せずんばあらず。

大隈伯は探検隊の後援會長として廣く義助金を天下に募りたり、大阪朝日新聞も亦同じく獻金を天下に求めたり、募集を開始してより旬日、大阪朝日の集むる所は貳萬五千金に達したるも、後援會の第一回報告は未だ二萬金に満たざるを報ず、而して期日は遠慮なく日一日として迫り來らんとす、是れ豈心細き次第ならずや。極地への旅行に準備は金を要するに非らず、金を以て必需品に換ふるに在り、金を抱いて寒肌を凌ぐこと能はざる也、金を以て一步を購ひ能はざる也、果して豫定の如く八月十五日を以て發程の日たらしめんには、夫れ相當の準備を爲すべき餘裕を與へざるべからず、然るに今猶ほ義金募集のために東奔西走せしむるに至りては國民も餘りに無情ならずや。謂ふ勿れ、白瀬氏が責を擔せずして、探検金盡を發表せしは無謀なりよ、かくの如きは物夫れ自身が既に無謀の性質を帶ぶるものなり、猶ほ戦争の如し、戦ふの初めは對手者互に必勝を期す、如何なる弱者と雖も必敗を知つて而して戦を始むるものはあらざるなり、我れ必ず勝つべくして始め、彼れ必ず勝つべくして始む、而して戦へば彼我の中、必ず一の敗者なるべからざるのなり、則ち敗者を以て無謀の舉と爲すべきや、況んや、其戦を挑まざるに於ては安そ其勝

と敗とを論ずべけんや、白瀬氏の蹶起は豈に戦を挑まれたると同じからずとせんや。少くとも我國が世界的強國の列に伍せるを自覚せる結果なり、英と曰い米と曰ひ獨と曰ふ、強國の爲めに刺激せられたるが爲めなり、若し我にして、支那の如く朝鮮の如く土耳其の如き國柄ならんには、彼の強國等の爲を見て、只「高嶺の花」及ばぬ戀」と自ら劃りて止まんのみ、其の然らざるは彼等の爲す所我國人又何ぞ爲し能はざるの理あらんやとの自信自覺に基づく、而して此自信自覺が我國人に發露せられたる第一歩なるの時、實に至重の珍寶として尊敬せしむべきある可らざる也。之を挫折するは將來發達すべき此の最重すべき自信自覺の萌芽を蹂躪するなり、揭文聰の畫幅を珍寶として參萬五千金にて購ひたる富家はあり、然れども斯かる國民思想發展の種子を珍寶として培養せんとする富家の少なきは惜むべきの極みならずや。

日清日露の兩大戦は國民後援の力に藉りて、大勝利を博し得たり、將卒如何に勇猛なりとも、之を鼓舞し之を擁護せる國民の後援無からんには曠古の大勝を博し得ざりしならん、今や我が南極探檢隊は身命を獻げて、帝國の名譽の爲めに世界的競争に加入せんとす。國民たるもの戦時に於けるが如く平和の戦争に於いて、十分の後援を致さんこと、これ吾人の熱望して止まざる所なり。吾人は我國民の義務は平時に於ても亦戦時の如かるべきを信じて疑はず。

海軍省と白瀬中尉に呈す

野州鹽原 中谷貞頼

(八月四日 東京日々新聞)

南極探檢の壯舉將に實現せられんとし國民多くは之を賛し或者は狂喜して痛快を呼ぶ日本男子が絶倫の勇を揮て歐人到らんとして幾度か失敗に歸したる氷原の上に旭日の大旗を懸さんとす誰か痛快の舉ならずとせんや、然れども近時軍艦貸與の說あるを聞き聊か吾人の理性の肯ぞざるものあり南極探檢本來の性質と國家の財物に關する法理の上よりして果して軍艦の貸與を乞ひ且つ之を許可するを得べきや如何。

抑も探檢には主として利益を其對照とするものと然らざるもの即ち主として探檢其者を對照とし、利益を眼中に置かざるもの二あり、コロンパスが大西洋を横断して印度に達するの航路を發見し併せてシパンアなる黄金島に到着せんとしたるが如きマゼランが世界一週の航路を探檢せんとしたるが如き主として前者に屬し、英佛海峽を泳ぎ渡りナイヤガラ瀑布上を綱渡りし而して近時の流行たる極地の探檢の如きは恐らくは、後者に屬するものならむ。

極地發見を以て後者に入れたる理由は形式に於て、前者に似たりと雖も事實に於て殆ど何等の利益を取得するを得ざればなり、もとより従たる結果として學術上の發見なきに非らざらんも是等は既に業に多くの學者によりて研究せられ實地見分を左程迄に必要とせざるに至れり、こは先年實行せられたりと稱するヘアリー、クック兩氏が學術界に貢獻したる點大なりしを聞かざるによりて知るべく、且つ今回の探檢を

思ひ立たれたる白瀬中尉は特に是等の學術は習得したりとも見えず又探檢によりて大に學術界に貢獻せんと
 どの希望を有すと見るを得ず又探檢の成功によりて南極を領土とするを得と假定し以て之れが爲めに國家
 は幾何の利益を得べきや是れによりて見るに中尉の舉は明らかに探檢其者の爲に探檢するものにして約言
 すれば個人の探檢心冒險心を満足せしめんとするものにして單純なる私人の私行の外、國家の利益を目的
 とするものに非すと云はざるべからずもとより此種の探檢と雖も各個人の自由の行動なるを以て、公序良
 俗に反せざる限りは之を禁すべきものに非ずして國家は常に之を放任するを常とす而して國家が國家的活
 動として種々なる便宜を計り例へば海事に關しては艦をも供給するは前者即ち國家又は社會の利益を目的
 とするものに限るは理論と沿革との示す處にして誠に然らざるを得ざるなり。

然るに何事ぞ今や此の國家活動と何等交渉なき換質すれば國家の利益に向つて何等の貢獻する所なき一
 私人の冒險心を満足せしめんが爲めに國家の貴重なる財物を海軍省の獨斷を以て貸與せんとするは海軍次
 官は「鑿城使用の許否及び其方法につき善意を以て審議すべし」と説明したり、さすがに賢明なる財部君
 は巧みなる辭令を以て論者の論難を豫め避けたるも府下新聞記者に向つて發表したる意見を綜合するに
 「計畫準備に専門家を首肯せしむるに足るものあらば」之を貸與するやも知れずとの意思なるが如し、果
 して然るか若し然りとせば、吾人は海軍省が帝國海軍の維持及び發達に何等貢獻する所なき一私人の行爲

を助ぐるに貴重なる帝國の財物を以てする權限ありや否やを質問せんとす、貸與と云ふも之れ尋常の貸與
 に非ず此種の探檢の性質上船體の廢滅は豫め覺悟せざる可らず、帝國の財物を處理する海軍省は此の廢滅
 の覺悟を以て貴重なる軍艦を貸與する權限ありや。

云ふ勿れ考朽用に耐えずと。少なくとも海軍省の管轄に關するものは一として國家の財物ならざるなく、
 國家活動生存の爲めにするの外斷じて之を處分するを得ず、しかも根本の法理に於て國家の表現人たる海
 軍省は主として自我の發展を業とする獨立人とは何等交渉なき權限なきなり、若し果して此の權限外の
 行爲を敢て爲さば、海軍大臣は其表現責任を負ひ若し女官之を處理したらんには財部氏は獨立責任を免る
 べし、有志なる財部氏は恐らくは斯の如き不理論なることを爲さざるべし。

最後に勇敢なる白瀬中尉に告げん、中尉が壯舉は吾人の誠に嘆賞措かざる所なりされど中尉が何が故に
 軍艦を借用せんとするの意志を抱かれしか解すべからざる事なり、冒險事業に依頼心は大禁物なり恐らく
 は是れ勇敢なる中尉の意志には非ざるべく、第三者の親切心より起りし事なるべし、されど中尉は此の親
 切心は潔く辭退すべし。

夫れ南極探檢の事至難なりと雖、もとこれ地球上に存在し地球儀に於て明かに其位置を開示す、世界無
 双の日本帝國が國を擧て、之に盡くし、軍艦を派し其他の力を盡さば、極地に到るが如きこと何等驚くに

足らず尋常事のみ、中尉若し、軍艦に乗り國家の助力を得て極地を探検したりとせよ、事實に於て非常に苦心を嘗めたるに拘らず、其功の大半は國家と軍艦とに歸すべし、中尉を後援しつつある同胞は、歐洲人を出し抜きて一泡吹かせんと意氣込めども、歐洲人等が軍艦により國家の助力によりて之を爲さば、誰か之を難しとせざらむ、私人の力より之を遂行すればこそ探検の價值も稱賛の價值もあれど、嘲笑せば、何と答へん、千辛萬苦も其光を失ふこと幾干ぞや、勇敢なる中尉よ潔く軍艦の食典を辭退せよ、海軍省よ、國家の財物を素りに私人に供與するの端を開くことなかれ、而して極地探検の如きことは一つに國民の後援に委せよ是れ一方に於ては國家の財物然り國民の重き負擔によりて成りたる財物を尊重し同時に他方に於て、中尉の探検の功名をも大ならしむる所以なり。

南極探検隊の經費

八月六日

都新聞

南極探検家スコット大佐の乗員來る、其經費は五十萬圓を算し、準備の十分に行届けるを見て、之を白瀬中尉が一部にも足らざる經費を以つて同一の目的を遂げんとするに對照すれば、白瀬中尉の爲めに危愆の念を禁する能はざるなり。

遮莫、邦人由來困苦缺亡に堪ふるの特性あり、加ふるに其生活状態を異にするが故に歐洲人など多くの經費を要せざるは、之を日清事件及び日露戦役に徴して明白なりとす、役川の少額なる事は必ずしも絶望

するに及ばざるべし。

南極探検と海軍省

同上

只吾輩の憂慮に堪へざるは白瀬中尉の一行に適當なる學者を得ざる事と、其用意計畫の周到なるや否やに就て、疑ひあること是れなり、殊に白瀬中尉が資金を得る能はざれば一葉舟にても發航すべしと衆語せりと聞くに於ては、客氣に失する性質ならざるやを思はしめ、愈不安の念に驅られずんばあらざるなり。聞くが如くんば、我海軍省は、其計畫周匝ならずとて、此舉に餘り氣乗りせずと云ふ。眞に其計畫に不備の點ありとせば、海軍省は何故進んで助言を與へ、其缺を補はしめざるや。直接の責任なければとて、之を雲烟過眼視するは不親切に非るか。

白瀬中尉の計畫は不十分と思はれる

八月六日

毎日電報

英國探検隊員の批評

英國スコット大佐の南極探検隊に屬するメーヤアースの兩氏は四日立神丸にて神戸に着せり、メーヤ氏は記者に語つて曰く「目下南極探検の計畫が方方にあるやうですが世人の豫想以上中々の事業です、我スコット大佐も第一回目に馬も犬も共に病氣に罹り、其上食料が缺亡したので成功しなかつた。従つて、今回は食料を集める丈に一ヶ年餘を費しました。第一回にスコット大佐の用ひた船は、氷雪に堪ゆるやう特に

建造したので船腹の如き多く樫木を用ひて厚さが九尺もありました。今回のも丈夫さ加減は同等若しくは夫れ以上と思はれます。云々と次にブリス氏は曰く「日本から白瀬中尉が南極探検に出掛けるといふことは自分等の企てと同様壯麗と感心しました。併し吾々の準備を標準とすれば、白瀬中尉の準備は無論不十分である、第一準備金額に於て非常の差がある、吾々の方は總計四十餘萬圓であるのに、白瀬中尉の方は四萬圓とは些々心細い處がある、白瀬中尉は來月十五日前後に東京灣を出發し首尾よく南極へ達して來年の今頃は日本へ歸る積りですが南極探検は置いてあるものを取りに行くやうな譯には行きませぬ次に白瀬中尉は食糧に於て吾々英人のやうに高價なものに要らないから経費も少なくてよろしいといつて居るが、如何に日本人でも寒氣凜冽なる南極近くに行つては内地に居る時と同様まさか米を糶と食する譯には行きませぬ、米を常食とすると體温が保てない、そこで肉食をするとなると白瀬中尉の豫算は直ぐ狂つて來る、吾々は三年半かつても目的を達しやうといふのに白瀬中尉は一ケ年以内で目的を達する計畫とは兎に角違つたものです。そこで幸に南極に達し新規な珍しいものが横はつて居ても専門家が居なければ南極に達した甲斐がない、私共の一行中には理學博士ワイルソン氏、動物學者バーナー氏、寫眞師、其他地質學者地理學者氣象學者活動寫眞攝影師等英國第一流の専門家網羅して居ります、首尾よく目的を達して歸國したならば是等の専門家研究の結果を發表して學界に貢獻することが多いでしょう、白瀬中尉の一行にも無論専門

家が加はつて行かれるのでしようが若し其専門家がなければ折角の探検も其甲斐がないものです。云々(一)の二人は馬廿九頭大三十二頭を露國にて買入れ新西蘭にてスコット大佐に落合ふ豫定なり)

ブルゴワ、バ (上)(下) 八月十日、八月十一日 東京日々新聞

南極の大探検

等しく地球の兩極なり。而も北極は歐亞、米陸の多く之に近接するに由りてにや、篤志の士接踵して此に赴き、七十度以上は固より論なく、八十度以上亦多く人跡を印し、東はフランス、シヨセフ島より西はリンコルン及びグランド島まで歴々指掌の如くなるに至りたるも、南極は陸土を距ること遠く、加之暴風の時々起るあり、氷塊の海に浮ぶあり。氷山の行を阻ぐるあり。七十度以上既に進み易からず、何ぞ況んや八十度以上をや。是を以てヴィクトリアの邊今尚ほ茫々の裏にあり。

然りと雖も斯極の一方、時に豪傑の見舞ふ處とならざりしに非ず。一七三八年ロジエト、ブーウエトの凍雲を披きし以來、二世紀間幾多の發見なきに非ず、而も之を北極に比較すれば、僅に其の十一にも及ばず、近く一八九八―一九九年獨船ヴァルナヴィヤの航搜となり、一八九八―一九九年の諸戒のホルヒケルグ、インクが英船イザン、クロスを導き、彼のヴィクトリアの冬籠を試み來るに及び、倫敦「ローヤル・ソサエティ」の催促に由りて、終に南極探検會議となれり。

此會に列席したりし名家には、諸戒のナンセン博士に、獨逸のシューマイエー博士あり。其他著名の博士、歐の列國より會し來り、茲に南極探檢の舉は決定せられたり。此結果として、英國にては十二萬五千磅即ち百貳拾五萬圓の探檢費を募りたるに流石に富國の事とて地學協會と倫敦株式取引所即ちストック、エキステンゲンにて其洪費を義捐したり。是に於て一九九一年英國よりは探檢船としてサスカバリー號を出し、スコット氏之を提督せり。而して獨逸よりはゴース號を出し、エリスフオン、ドリガルスキー博士之を提率し、瑞典よりはアンタークチック號を出し、オットー、ノルデンシコルド博士之を指揮し、次ぎて一九〇二年英國よりは更にモーニング號を遣發し、蘇格蘭人も亦スニヤ號を出し、フランス博士之が司令たり。同年は佛國より亦一隻の遠征船を發せんとせり。佛國の此舉ある、アカデミー、デシヤレス、及び地學協會之が保護者となり、討究研鑽の結果、探檢の綱領を作りて、探檢者に授け、目下探檢船建造中なり。其の船は三十九米突餘の風帆船にして、南極に處する一切の裝置及び要具を備へつゝあり。來る十一月までには氷海に到る豫定なりといふ。此舉の發せらるゝや、卅萬法以上を要するを以て、之を社會に求めたるに一人にして既に十五萬法を投ぜし人あり。船名を命じてアルコワ、バ(Pourqui pas)といふ、何故に能はざる歟の意なり。探檢隊の幹部には七名の學者之に當り、シヤルコー博士之を提督す。世人往々南極探檢を以て不可能なりといふ、故に何故に能はざるかを以て船名となす、佛人の意味も亦愛すべき哉。

(以上)

以上の大探檢隊は探檢の綱領を頒ちて分擔を定めたり。英國よりせし者は、ヴィクトリア地方に當り、獨逸よりせし者はアンターヒー、及カム地方に當り、瑞典船は、レイ、フィリツガ地方及セルラー、ウエ海峽、蘇格蘭船はウエツテン海、佛國船は經度の六十五度より、百六十度の間に在る一切の實驗に當り。シヤルコー博士曰く、此舉にして成功せん乎、測海學、物理學、動物學、前世界の物學、氣象學、海洋學等に貢獻するもの如何ぞや。殊に兩極に關し、久しく結びて釋けざる所のユニポラリターとビポラリターの疑問の如き一朝にして決定すべしと。吾人も亦其の眞に然るべきを信ぜんと欲す。抑々一の國民の名譽は、外交の巧妙にも非ざれば武力の強盛にもあらず、多く其衷より知識を出し、多く其室より生民に貢獻するありて、而る後ち始めて眞の大名譽を有すべきのみ。以上の南極大探檢の壯舉に視よ、英、獨、佛、瑞、皆其國家の事業に非ず、孰れも協會若しくは個人の私的發起に外ならず、而して、社會の富人豪家にして巨資を機供し、之を助長する者に乏しからず、彼の社會も燦として美ならずや。顧みて我社會を視れば、必らず學者を欠がず、必らず知識に乏しからず。人あり之を助ければ、佛蹟を雪峰に訪ひ、三苗を三危に探ぐるの勇者なしとせず。而も是れ千百中にして僅かに一二の志を達するありしのみ。其餘の九百九十八九は曠世の志を齎して、空しく芸窓の下に疲死すのみ、嗟呼是れ國家の罪歟。

社會の罪歟。南極大探檢の壯舉を聞きて、感慨自ら禁せず。記して以て國人に問ふ。余の此篇を草むるは、明治三十六年の七月二日に在り、爾來歳を重ねること茲に八年にして、今日僅に白瀬の一小探檢隊、邦人の社會より奮ひつゝ、南極探檢の舉を試行せんと欲するも、之を耐くるものは寥寥、晴天の星數よりも稀なり。余は此身惚れかへれる日本社會の氣度、風尚及品格が八年前より幾何の進歩を來せしやを知らず。ブト(日南學人)

白瀬中尉の爲め一書を寄す 八月十一日 毎日電報

秋田縣 旭 生

(前略)近時墮落せる思想界に向つて、一大興奮彈を投下せる白瀬中尉が南極探檢の壯舉は、乗用船を得るに難く且つ豫定の期日に出發する能はざると噫、余輩は今茲に筆を呵する、先づ中尉が心中の煩悶を滿腔の同情を以て慰せんとするものなり。(中略)世界極地に至る既に壯なり、況んや他者最早發足するありて、我國未曾有の舉を以て、世界の探檢者と競はんとす、何んぞそれ壯絶なる。將に是れ我國榮辱の關する處學國一致、中尉の壯圖を完成せしめざるべからざるなり。然るに出航期日餘す所幾何もなくして頓挫を來せるを報せり、余輩は毎日電報の愛讀者なり、常に毎電紙が懇切な極めたる學者の忠言を載せて、中尉が發航の參考に資せし忠實は、中尉と雖も感謝せらるべし。然れども余輩は、忠言を呈せる學者の謙

度に對して疑なき能はず、一片の忠言能く前企圖を破して、容るゝことを得るや否や、學者の机論果して實行さるゝや否や、況んや中尉が多年極寒と戦ひ、有らゆる艱難を踏むで、必成の自信堅きにありて、必ずしも學者の說を無難作に行ふの難きに於てなや。中尉が常に同情に富める、學者の忠言を參考として、好意を謝するの念切なるものあるは言を俟たざるなり。(中略)若し中尉が舉の成らざるありとせば、それは社會の冷酷の致す處、島國的根性といふても敢て過言に非ざるべし、學者たるもの更らに一歩を同情して、富豪を説き名士を語らひ、中尉が壯舉を完成せしむべき、有らゆる物質を提供して世界に雄飛せしめよ、斯くして、我帝國が白瀬中尉を生めるレコードを造れると共に更に世界探檢界に向ふて新レコードを造れるを誇るに足るべし。

行けよ白瀬中尉足下。足下の出身地たる我秋田八十萬の縣民は、熱血を振ふて、足下の行を壯んにせんとす、今や巨額の金品を募りて、探檢隊に提供せん準備中なり、東北健兒の意氣を遺憾なく發揮せよ、足下若し燈るゝらば、第二の白瀬出で、必ずや成功の花を足下の墓前に手向くるものあらん。

又競争者を加ふ 八月十二日 萬朝報

南極探檢は我が白瀬中尉とスコット大佐の競争なるが如く思はれ、世界の視聽は今や此二者に注がれつゝあるに當り爰に又新競争者こそ現はれたれ。

新競争者は獨逸の參謀本部の一士官にして、ファイルヒテル中尉といふ、初めシヤツクルトン氏が南極探
檢より歸來するや、露、獨、英、米、の諸國は一整に各探檢隊を南極に送るやの報あり、爾來スコット大
佐の計畫のみ最も敏捷に熟し、米はヒヤリヤ中佐の斷念に依つて、其計畫を放棄したるが如し、其他につ
いても具體的の報導を得るに至らざりしが、果然獨逸より其計畫の熟せるを發表せらるゝに會す、斯くし
て南極探檢は恰も三國鼎立の姿を爲せるも亦面白し。

ファイルヒテル中尉が、其南極探檢の計畫あることを獨逸の地學協會に向つて發表したるは既に五月中の
事なりしも、中尉は其行路、及び隊員の部署に關して、久しく決する能はざるものありき。其理由として
は、中尉は其本隊をエツテルー方面より南極に進めんと企て、此行路は毫も他と杆格する所なきも別に一
隊をロツスより本隊と正反對の方面より南極に進ましめんとする事は從來尊重されたる探檢家間の不文律
を犯すものとして多少の非難ありし爲めなり、若しファイルヒテル中尉にして、支隊をロツスより南極に送
らんとせば、其の根據地をエドワード七世洲に借らざるべからず、斯くて、英國探檢家が開ける行路を犯
すこととなるを以て、徳義上氏に於ても敢てする能はざるものあり、ファイルヒテル中尉は近頃倫敦を訪問
し、親しく此件に關してスコット大佐と審議する處あり、スコット大佐は氏が支隊をロツスより送ること
あるも、決して反友情の所爲と見做さざるべしと答へたりと傳ふ。然かもファイルヒテル中尉もまたスコッ

ト大佐の計畫の詳細を聞くに及んで、別に其支隊を派するの必要なきを認め、大佐の宏懐に關して、専ら
本隊のみに力を集注するに至るべしと傳へらる。

以上は最近に於ける英獨探檢隊の關係なり、これらの關係は、如何に彼等探檢家が互に相尊重するかを
語ると共に南極探檢が如何に多く世界の興味を引き、且つ尙ほ如何に多く其發見研究を要する領土あるか
を語るものなり。ファイルヒテル中尉は單に南極發見を目的とせず、寧ろ南極の地理的研究を主とし、兼て、
氣象、磁氣、海洋、生物學等にも及ぶべしと云ふが、其出發期は多分明年四月頃となるべく、目下其探檢
準備中にあり。蓋し、南極の地理的研究には二個の難題あり、近くスコット大佐及シヤツクルトン氏に依
て或地點迄究められたる南極非クトリア洲の山嶽は、グラハムランドまで南極大陸を横斷し、斯くしてエ
ツテル海は元と南極大陸に於ける一大灣なりしとするもの其一にして、他はイエテル海は元とロツス海と
着接して南極を二大陸に分れる氷結海峽の一部分なりしと云ふにあり、ファイルヒテル中尉は専ら此難題の
解決に力を注ぎ三年計畫を樹て其成功を期すべしと云ふが、是亦南極探檢の一分業たる價值十分なるもの
なり。

世人は斯の如く、歐米の探檢家が、専ら學術上の研究に力を注ぐを唱へ、我が白瀬中尉の計畫が、スコ
ット大佐若しくは、此ファイルヒテル中尉の如き探檢家の計畫に如かざるやに言ふも吾人を以てすれば、ス

コット大佐はスコット大佐たり、フイネル中尉はフイネル中尉なり、白瀬中尉は白瀬中尉たれば、足るなり。南極探検の事業は多く且廣し、學術上の研究が其分業なるが如く、單に南極の發見を目的とする事も其分業としての價值十分たるべし、況んや白瀬中尉の探検もまた、全く學術の方面を顧みざるにあらざるに於てをや、故に吾人は今茲にフイネル中尉の計畫を説くと雖も、毫も中尉の計畫に關して、私の價值劣れりとは思はず、我は益其競争者且つ分擔者として、速に國旗を南極に樹つるの急要なるを認め單に南極に到達するのみにても學術上の大貢獻を信じて疑はざる也。

探検無期延期

八月廿日

萬朝報

白瀬中尉の南極探検隊は其設備を完全ならしむる爲なりと稱して、其出發を無期に延期せり。今に及むで其出發を延期するに於ては少なくとも今後一年を延期せざるべからず、其設備を完全にするは固より望まじきことなれども、豫期以上に國民の後援を得て最初の準備を整へ得るに及むで、其出發を延期せざるべからざるに至りては、白瀬中尉たるもの多少輕卒の批難を免るゝ能はざるなり。然れども南極探検の事たる固より容易ならず當局者の援助に依り、其設備を十二分に完全ならしめて然る後出發するも、決して其遲きを咎むべからざるなり。

探検隊出發延期

八月廿一日

神戸又新日報

八月十五日出發の豫定なりし白瀬中尉の南極探検隊は其期日を延期したるが中尉は始め一直線に南極に向て突進し競争上の勝利を博せんとするの目的なりしも、其後學術的探検の成績を完ふすべしとの學者側より意見出で之れが爲めには、出發期を延期し而して船舶其他の設備を完成するに如かずとの論盛に起りしを以て、其後後援會は中尉に薦めて終に延期することになり、英國探検隊に先じて南極に到達し氷塊中に日章旗を樹立するの快は即ち快なりと雖も更に之を伴ふに學術上の貢獻を以てし日本國民の名譽を發揚し得ば多少の期日後るゝとも何人も異議なき所なるべし。

我邦冒險政爲の氣象は徳川三代將軍の時代より銷磨し士氣は漸次柔弱となり青年は俸祿に甘んじ遠大の計なく、學者は蠶質となりて、書齋に蟄居し、十年一日同一講義を繰返し、生命を賭してまでも新發見を爲さんとする者の如き殆んど其影を潜むるに至れり、然るに曩に福島中佐の歐亞大陸單騎行あり、今又白瀬中尉が奮然として列國環視の間に南極に突進せんとするは縱令學術上の貢獻なしとするも尙其壯舉に關しては世道人心を益すること大なるべし、米國前大統領ルーズベエルト氏が亞非利加内地に猛獸狩を實行せしは、稍暴舉に近しと雖、世人は一般に之を壯舉とし、氏の盛名は益高まりたり、ル氏を壯舉とせし世人は白瀬中尉に同情するは勿論にして既に其寄附金の如き豫定額を超過し今や國家的大問題たらんとするに至りたるは當然のことと謂ふべし。

然るに怪しむべきは、其準備と用意の不足なるを理由として此舉を冷笑し、阻礙せんとするもの夥なからざること是れなり。中尉は嘗て北極探檢の志望を以て極北の氷野に身體を鍛錬し、經驗を重ねたり、北極探檢は遂に米國のハアリー氏に先鞭を着けられたるを以て、更に南極に其目的を變更せしものなりと聞く、既に其經驗あり、南極探檢に就ても必らずや其研究を積みたるものあるや知るべきのみ、若し中尉の行爲と方法とに不安の點あるか又は學術的探檢上に於て欠如する所あらば宜しく進んで忠告するは學者及び先輩者の任務に非ずや、顧ふに歐米の探檢者は何れも政府及び國民の有力なる後援を有せるに我邦に於て白瀬中尉が探檢せんとするに當りて、政府は之を雲烟過眼視し、又之を懲懲すべき學者の如き動もすれば、之を排斥し去らんとするが如きは、吾輩の解せざる所なり、探檢隊出發の延期は要するに學者の説を容れて準備を完成するにあれば宜しく進んで之を贊助し其目的の貫徹を期せしむべし、此舉は今や如何なる事情ありとも中止すべき場合にあらざれば無責任なる冷評を廢して責任ある助力者たらんことは是れ學者の義務にして又國民の當然盡すべき道なり、吾輩は唯其成功を祈るの外なきのみ。

探檢隊の出發延期

九月六日

都新聞

南極探檢隊は又々出發を延期して十一月十五日となせり吾輩は其延期の事由が必ずしも不可抗力に在らざるを信ずると共に、例の後援會諸君の不行届多きを歎せずんば非ず、延期の第一理由は船舶の用意成ら

ざるに在らんも、其用意の困難は計畫當時既に明らかなりし所に非ずや、而して只宜い加減に出發期を入月十五日と決定して公表せるは一大失態たるを免かれず、此の如き手落ちの爲に眞面目なる白瀬君一行に累を及ぼし、且世人をして、一行に對する信用を薄からしむるが如きは痛嘆に堪へざる所なり。

南極探檢延期

九月六日

萬朝報

白瀬中尉の南極探檢隊は幾度か其出發を延期して今尙確定する能はざるが如し。

發捐金は豫定額以上に達し、白瀬中尉最初の計畫を以てせば今や既にニュージランドの近傍に達すべき時なり、然るに彼の如く世人の同情を受けたるに對し、白瀬中尉自から此の辨解を試むることなく、世人を首肯せしむるに足る理由なくして、空しく其出發を延期しつゝあるは同情者を蔑視するも亦甚だしと謂ふべし。

南極探檢の探檢

九月七日

中外商業新報

白瀬中尉の南極探檢は其後延期となれるが、内幕にはいふんな行きつあり。所謂後援會は其實後援にあらずして、後書たるの觀あり、中尉憤激漸く悶々の情を抑へて初志の貫徹をのみ期し居れりとか、之を事實とせば、南極探檢は南極に赴くに先ち既に人事の探檢を試み居るものとも解せらる、獨り白瀬中尉の事と限らず既に世界に發表せられて後斯る醜風を聞くは無上の恨事なり。

白瀬中尉を戒む 九月八日 毎日電報

白瀬中尉に告ぐ、中尉の計畫の杜撰なる事は、吾輩等の切言し、學者の忠告したる所にあらずや、而も後援會は中尉の志を壯なりとして義金を募りたるにあらずや、同業朝日紙の如き非難の中心に立つて中尉のために五萬何千圓の資金を募集せしにあらずや、中尉の計畫の所謂壯舉なるにもせよ、朝日紙の信望熱誠なくして能く五萬餘金を集め得べしと思ふや、今や各縣水害に苦しみ罹災の民途に泣くも義金の募集思はしからざるものあり、然るに中尉の事一度傳はつて、一舉五萬何千圓を集め得たるものこれを朝日紙の信用といふも過言にあらずや、朝日紙恐らくは深く自己の責任を感じ居るべきに、然るに中尉の婦人信的なる、自己の杜撰を棚に上げて、妄に怨言を放つ、思はざるの甚だしきもの、特に大隈伯に對して非禮の言説をなすが如き、堅忍不死をも辭せざる眞骨頭の漏すべき言ならんや、吾輩は中尉の心事を疑ふと共に中尉の不謹慎を戒めざるべからず。

南極探検録 九月十一日 東京毎日新聞

白瀬氏の南極探検隊は、不思議の蹉躓にて出發の期日を誤りしが、遅くも十一月中旬には、征途に就くべしとの事なり。今となりては數日の遅延を争ふの要なし、十分に準備して、探検の効果を遂ぐるを期せよ。

南極探検計畫 九月十四日 東京日々新聞

探検事業の困難なるは、白瀬氏の計畫せる南極探検が、八月初旬の出發を確定しながら、今に準備の準備たる船の調達さえも出來ざるに徴するも、其一端を推知するを得べく、探検計畫の第一着歩たる探検船の調達に於てすら、斯くも豫定以外の困難に逢着したりとすれば、船の問題のみが恐らく最終の難關に非るべく、探検計畫の前途には、計畫者の豫定せざる幾多困難の潜伏するものあるべきは、シヤツクルトンの經驗によるも略々親ひ知るを得べし、蓋し困難は探検事業の生命なり、困難なるが故に學術上の効果を豫想せらる、探検事業に對しては各國競うて適當の資格を有する探検者を勵して其志を爲さしむるに努めつゝあり、亦現代文明の一特徴たるを疑はず、白瀬氏の南極探検計畫一たび發表せらるゝや、同業「朝日」の努力に依り、豫定の探検費が豫定の期間に於て、社會の有らゆる方面より難なく融金せられたるは、日本國民も亦他の文明國民と同じく、探検事業に對して興味と同情とを有するに至れるを表證せるものにして、吾輩の竊かに愉快を禁ずること能はざる所なりき。唯豫定の出發期に近きて、探検船の調達意の如くならず、爲に事實上無期限に出發を延期せざるべからざるに至れるは、尠からず社會を失望せしめたるの觀ありと雖、今更計畫の杜撰粗漏を憤り計畫者に迫りて詰腹を切らせたりとて、探検事業の成功には何等の利益もあるべからず、杜撰は杜撰とし粗漏は粗漏とし、倍斯く準備の準備に蹉躓したりし南極探検計畫

の善後策を如何にすべきやは、半國民的、半社會的計畫の觀を具へたる南極探檢に關する根本の問題なるべし、白瀬氏一個人の問題としては、當初の豫定として傳へられたる如く、永代橋畔より百餘噸に帆船に供じて、兎も角も南極に向ふも善し、然れども白瀬氏に對して、十分の準備と成算とを希望したりし、社會としては、甚だ心元なき準備の下に探檢隊の一行を送り出さんことは、情に於ても忍びず、理に於ても許さず、是れ南極探檢計畫に對して、同情と興味を有する者の等しく苦心しつゝある所なるべし。出來得べくんば、探檢隊の出發は一刻も、速なるに若かざるは勿論なるも、今日の如く蹉跎を始めたる以上は、吾曹は寧ろ今日までの行懸りを一掃し、改めて完全なる計畫を發表して重ねて社會の協賛を求め、南極探檢をして能然たる全國民的事業たらしめんこと、亦善後策中の最も確實にして又正大なるものたるを思はずんばならず、斯くすれば、探檢隊の出發は或は來年とも爲るべく、時宜によりては來々年ともなるべきも、本來探檢の目的は出發にあらずして到着にあり、假に一年を後れたればとて、探檢の目的を達するに遺算なきを期するは、探檢者に同情を寄する社會の責なり、若し、目的の成否を問はずして、單に出發の迅速のみを曰はば、探檢者は恐らく明日にても小さき帆船に塔じ去るの途あらん、然れども、南極探檢の如き難業は言ひ懸りや行き懸りやのみを以て、輕々に着手すべきにあらず、吾曹は其大成を希望するを以て、探檢計畫に對し、眞個の同情を表する所以なるを信じ、今日となりて必ずしも、計畫の粗漏杜撰を責

めずして、其の徐ろに大成の歩を進めんことを希望せざるを得ず。

牛頭馬頭 九月十七日 二六新報

(前略)南極探檢、發程の難きにあらず、到達の難きにあらず、學術的踏査の難き也、艱船準備尙未だ成らざるを咎むるは抑も末耳、過去二十年極地探檢に志しつゝ、而も其れに關する學問的修養を閑却したるが如き、先づ可惜と雖、是れ將悔ゆるも及ばず、要は現状の下に其最善を盡すに在り、スコット大佐在前、白瀬中尉たる者、不可不奮也。

南極探檢 九月二十日 中央新聞

近頃東西兩半球を通じて、極地探檢を企つるもの寡からず、曰く北極探檢曰く南極探檢と、是等兩極地探檢を企つるものあるは、今に始まれるにあらずして、從來とても冒險家が之を試みて或は其望の半分を達し、或は望外の成功を收め得たるものありて、北極及び其附近に關する知識は大に進歩を加ふるものあり、之に比すれば南極の研究は未だ甚だ進まざる爲めに、近頃に至りて、冒險家最も南極に志すの情あり、我國にて南極探檢企畫者あり、數月來頗る世間の同情を集めたる如くなりしが、何故にや、此頃に及んで殆ど世評を絶ち、偶ま傳ふるものあれば則ち冒險家と應接者との間に紛紜杯といふ、聽も忌はしき沙汰のみなるは甚だ歎すべきなり。

吾々は何故に我國の探検者の企業が頓挫せしや、何故に各種の紛紜叢生するやを知らず、又之を知るを欲せず、只々大體より云はゞ日本人は古來多くの冒険家を出す處にて、徳川幕府以前に於ける航海家が弱舟を以て遠洋を横行し、他人の未だ到らざる處に至りて、其志す所を果したることは、其歴史の上に明白なる所なれば、今日極地探検を企つるものありといふも、吾々は之を怪まざるのみならず、寧ろ其の企畫の益々多かるべきことは期待するものなれども、大凡斯の如き事項を企つるに際して注意すべきは、之を企つるものは其身を名利の外に置き、一意専心其志望を達することを是れ求めて、決して、其心を二三にすべからず、天下多數の同情に頼らんとし、若しくは名譽利益の爲めに其意を動かすが如きことあるべからず、又世間の人々も此の如き事業を爲すものを、己れの道具に使ひ、犠牲と爲すが如きことあるべからず、古來探検者冒険家が失敗を招く原因が、前者にあらずして、後者にあること多きを見て、其の人と其事とを誤るものは、無智又は惡意ある彌次馬なりと知るべし。

但し今日の極地探検の事の如きは、其主とする所は學術上に裨益するにありて、中古時代の冒険探検者流が、貴重品を獲若しくは、領土を取るの目的を以て、未知の海洋に航行するものと、全く其撰を異にするものなることを知らざるべからず、乃ち地球の南極又は北極を通行するといふことは、尋常航海術上の智術に依りて之を善くすべきにあらずして、地質學天文學其他一般の理學の力に依るの外なく、從て、

其通行に依りて得るところの知識及び經驗が天體、氣象、地質、地理、及び物理學上に及ばず利益も亦甚だ大なるものなかるべからず、北方のスピツベルゲンが今日の科學上に多くの資料を興へたる如く、南方の極地極天亦學術の進歩を助くるもの無かるべしや、乃ち吾々の見るところを以てすれば、南極探検の事は、尋常冒険家の専らにすべき事柄にあらずして、寧ろ學術に従事するの要務たると同時に、國民の文藝の上に盡くす所以のものたるを以て、若し必要を感ずるあらば、國家自ら其事に興るべし、海軍省、文部省の如きは、正しく其地位に立てるものたり、又大學其他の學術の要府たるもの、共に其力を致すが當然にて、世間をして、お祭りさわざを爲さしむるに先ちて學者専門家を其調査研究を盡くさしむるが當然なり、猥りに企畫するもの、不可なるや云ふまでもなく、最負の引き倒しを爲す彌次馬の如き、更に不都合千萬なれども、之を咎むるを知りて自ら爲す所以を知らざるも亦吾々は其可なる所以を知らず。

探検の價值

九月廿一日

萬朝報

白瀬中尉の南極探検は端なく、船の問題に至つて、賤まつきしも、今や百方奔走の結果、用船も漸く決定し、茲二三日中には、發表の運びとなるべく、其最後決定期日までには、兎に角出發するならんといふ、出發が素より當然なるも然かも中尉が國民の同情に關して、敢て孤負するなからんと期する一片の誠意の存するあるは認むべきが如し。

(不朝報 9.21)

吾人は中尉の壯舉に關しては、初めより成るべく、好意の解釋を與へ來れるが、其出發が遷延又遷延するに對しては、聊か不快の念なき能はざりき。然るに今や其難關たりし用船も漸く決定したりと報ぜらるるとは云へ、其用船たる、僅に二百噸の帆船にして、到底其所期の用に添ふ能はざる爲め、折角用意したる滿洲馬をも伴ふ能はずとは、聞くだに傷はし、斯くては中尉は馬なく、白働車なく、唯だ楫と犬とを頼りとして、南極深く突進せんとするなり、壯は即ち壯と雖も豈又心細からずとせんや。

元來中尉の探檢計畫は其見積の内輪に過ぎたると、其發表の時期の大に遅れたるとが第一の阻碍となりて、遂に並に至れるものなれば、今更誰を怨みんやうもなく、其調へ得る限りの準備に満足して、其最上を盡すの外なからんか、然も政府の不親切もまた、其阻碍の半分を爲し、或一部の冷評さえありたるを思へば、政府及び我國民の一部は、尙未だ探檢の價値を認めざるものと覺ゆ、探檢は其實益を外にして、其價値果して何處に存するやとは、曾て叫ばれたる所なるが、探檢が最初實益を主として生れ、後漸く科學的研究に移るに至れる事實は少しく探檢史を閲みするもの、直ちに到着する所にして、今や重なる發見の時代は過ぎて、科學的研究の時代始まれりといふも不可なき状態にあり、これ白瀬中尉の南極探檢の如き、専ら此の發見を目的とする探檢すら、尙ほ學術的方面を專閑にする能はざる所以なり、然らば重なる發見は既に無用に屬せるかと云ふに必しも然らず、發見は尙種々なる意味に於て有要なり、例へば、過去に於

ては、シヨンロツスが端なく、其の航海によりて、パツフィン灣に至る水路を發見したるが如き、若しくはバリーの航海が、フリント、リセント灣に至る道を開きたるが如き、發見が尙ほ今日に於て。或る重大なる幸福を吾人に寄與する機會なしとせず、然も其歸着する處、到底發見は知識の進歩に伴ふて、其價値を増大し來るものたるを忘るべからずといふのみ。

世間或は探檢の學術的價値と實益とを全然無交渉なる如く考ふるものあるも、其實兩者の關係は密接なり、今夫南極は、雪と氷との蔽はる所なり、其處には何の研究すべき材料なきが如きも、然も尙例へば其成分を検すべき岩石はあり、其岸石を検するも要何處に存するやとは、次で更らに起る疑問ならんが、今日の最大貴重品たるラザウムの如き、最近の發見に係る新礦物より採取さるゝを思はば、南極の岩石が他日また世界に於ける貴重品たるなきも保すべからざるにあらずや、探檢の學術的研究と實益とは、一見何の交渉なきが如くにして、其實學術的研究の結果は早晚實益となりて現はれずんば已まず、彼の有名なる深海觀測を目的とせるチャンガの遠征の如きも、其多額の費用を要し、何等の經濟的目的を有せざりしに係らず、其結果が却て間接に貿易事業に關し、非常の實益を齎らすに至れるが如き、其一例とすべし。

更に又大體の上より探檢の價値を見んに過去に於ける思想の革命的運動が、多く地理上の大發見に原因せるが如き、即ち過去四世紀間に驚ろくべき科學文明の進歩は、遠くコロムプスの亞米利加發見マセラ

の世界周航に發端せるかを知らば、蓋し思ひ半ばに過ぎん、故に吾人は如何なる意味に於ても探檢の頗る有要なるを信じ白瀬中尉の計畫の如きも、成るべく速に且都合よく運ばしめたく思ふ也。

嗚呼三ヶ月後

九月廿二日

讀賣新聞

田岡嶺雲

海軍次官が、磐城艦拂下も不許可をほめかせる一方に於て、白瀬中尉が依然として、八月十五日出發を演壇上より公衆に揚言しつゝありしを見て窃に白瀬中尉の爲めに其延期の責を負はざるを得ざるに至らんことを危みたりき。何となれば、探檢船は探檢に對して其足脚たるべき者に非ずや、而るに未だ其脚を有せずして、妄に行動の期日を確言し斷言するは早計の謗を免れ得ざる可ければ也。果然我が勇敢なる南極探檢隊は、今猶其船を得る能はざる爲めに、如何にも切迫せるが如く、吹聴せられし期日を更に三ヶ月後に緩べざる可らざるハメに陥れり。吾人は此の頓挫の爲めに折角張り詰めし隊員の勇氣の挫折せざらんことを祈らざるべからず。

米人の南極探檢評

九月廿六日

大阪毎日新聞

さしも仰々敷吹聴せられし、白瀬中尉の南極探檢計畫は「船が無い」といふ辭柄の下に沙汰止みの姿なきが右に就き在留一米人は語らなく、抑も白瀬中尉の壯舉の發表せられし時、我が米人は殊に多大の興味を感じ、利かぬ氣の日本人の計畫とあれば多少其準備に氣遣はるゝ點ありとも、其結果は何れにしても日

本人の意氣を世界に示すに足るべしと信じ余の知人にして紐育ヘラルド新聞の東京通信員ハリソン氏の如きは、健げにも筆を載せて此一行に加はらんと思ひ立ち、此計畫が盛んに、日本各地方の同情を博し大隈伯以下の後援を得て少なからぬ義捐金さえ醜集せられ、遠からず出發の段落と進みたるを見て、紐育のヘラルド本社に向け多大の遠征費を要求し此要求は容れられて、オサ／＼準備に怠りなく、現にヘラルド新聞は英人側の探檢と併せて、東西民族の意氣を比較すべき好個の機會なりと十二分の張込みなりしと聞ききたるに、其後白瀬中尉の計畫は一向に進行の模様見え、甚しきは碎永の用意なき小蒸汽船にて斃るゝまでは南航を繼續し見んなど無謀の窮策を取りてまでも、世間の手前を繕はんとすと傳へられたるよりハリソン氏も、さては南極通信の大任は到底全ふすべくもあらず、あたら無謀なる猪武者の爲に犠牲となるに過ぎざるべしと看取し、折角の計畫も見合せたる由なり、見合せたるは可なれども大隈伯の如き名門の後援を受け、大に天下の同情に訴へ、世界に向て斯かる計畫あるを發表しながら何か都合ありとのみにて有耶無耶の間に之を葬り去らんとするは果して耻を知るといふ日本人の行爲なるべきか、且つや計畫の首唱者は、身軍籍に在りとさへいふに、日本人は勿論、世界の人々の感情を弄びて平然たるは果して何の心ぞ、余は之を貴國人の體面問題として立派に局を結ぶの舉に出でられん事を其當局者に切望して止まざるものなり云々。

南極探検今何如

九月廿六日

二六新聞

米國刊行の諸雜誌中、稍々穩健の名ある *Literary Digest* は我が南極探検家白瀬中尉が八月一日を以て二百噸の帆船に乗り萬衆喝采の中に、東京灣を出發したる事を記載し、且つ大隈伯等の後援演說會の状況などを頗る詳細に叙述し、又白瀬中尉が南極探検に關する大言壯語などを譯載す、我邦に於ては所謂南極探検隊が今何事を爲しつゝあるかを知るに苦しみつゝある時に方り、其の既に海に泛て南極に向ひたることを記したる米國雜誌に接す、天下何ぞ此の如き奇輕の事あらん、一米國雜誌が事實の確定を待たず、之を報道するは、固より輕卒の譏を免るべからず、然れども我南極探検隊といふものが初には八月一日に出發することを誇説し、次で八月十五日に延期したることを想ひ、七月中旬に於ける大隈伯以下所謂諸名士の賛成連助の盛んなりしを想ひ、當時の我邦の新聞雜誌が八月初旬に米國に到着することを想はゞ、米國一雜誌の必ずしも咎むべからざるを諒するに足らん、惟ふに米國雜誌は七月中の我が新聞雜誌に據り、日本探検隊が必ず八月一日に出發するものと信じ、既に確定動かすべからざるものと信じて、之を報じたるなるべし、其記する處は多く實業の日本といふ我邦の一雜誌を摘出せるに徴して之を知るを得べし、我が南極探検隊なるものは、此の如く世界に知られ、既に出發したるものとまで報道せられ、歐米の人の中には、之を以て事實なりと信ずるものも多からん即ち此事は我國民の名譽に關する大問題といふべし、此

事の成敗は實に我國民の信用に關するものといふべし。而して其實は探検を企てたるもの及び之が後援を爲して世間の同情を買ひたる大隈伯以下諸名士の双肩に懸ること言ふまでもなし、然るに彼輩は、今何を爲しつゝあるや、初め八月一日に出發すべしと揚言し事情の爲めに八月十五日に變更したるは猶ほ忍すべし、八月十五日に至り探検後援會長の名を以て延期の事を一二の新聞に廣告したるのみにて、其後何事をも爲さざれば、斷じて之を忍すべからず、當初の聲明、四萬圓の義金を集め得れば八月十五日に出發し英國探検家スコット氏と連速を競ふべしといふに存し、世人も之に同情し、義金の額は忽ちに四萬圓を超えたるに、八月十五日に至り突然延期したること、世間の有志者を欺きたるは罪ありといふべし。況や其後杳として何等の消息なきに於てをや、探検隊の人及び其擁護者たるものは速に出發延期の理由を明にして天下に謝し、更にスコット探検隊と拮抗し得べき計畫を具し、更に出發の時を定めて、之を世間に公にし、義金を捐てたる人に告ぐるを要す、若し否らざれば彼輩は世人を欺き國民の體面を傷くるの大罪人なり。

南極探検は如何

十一月廿一日

やまと新聞

白瀬中尉の南極探検計畫は、軍艦借下げの許可を得るに至らずして一頓挫を來し、彼の學者班の如き軍艦にあらざれば、塔乗せざる決心なるやを傳へ、而して別船として報効丸を買入れたるも、此がため豫算に多少の齟齬を生ぜらしく、且つ船員中にも或る種の紛争あるやに傳へて、人をして前途の成功如何を

危惧せしむるを免れず。

然れども邦人未曾有の南極探検也、意料外の故障頻發すとも、是れ寧ろ初めより意料の中にありし筈なり、天下同情の下に順風に帆を擧ぐるが如きは素より期す可からざる處、吾人は唯だ白瀬中尉が萬難を排して以て邁進せんことを要望す。此の一大決心と大誠意のあらば、頓挫は却て更に多くの同情を喚び起して、成功の基礎たるや疑ふ可らず。

此計畫の萬に一も失敗して、竟に其出發すら不可能と爲るが如きあらば、是我が同胞の汚辱也。事の世界的なる丈其れ丈け吾人は實に世界に顔向けも出來ざるに至らんとす。故に失敗は單に白瀬中尉其人のみの失敗ならざるを思ふて、世人の益此の計畫を幫助し聲援して、以て成功の榮譽を得せしめんことを切望す。

南極探検と其責任

十月廿三日

福岡日々新聞

白瀬中尉の南極探検計畫も再三其出發期を延期したる爲歟、之に對する江湖の同情心及好奇心は痛く冷却して、今日に在りては、國民は爲すも可、已むも亦妨げずといふの境にあるもの、如し。固より白瀬中尉の南極探検が一時我國民の同情と好奇の心を喚起したる所以のものは、英國スコット大佐の探検隊に先立ち、到着第一の名譽を持せんとの吹聴之を助けたるは疑ふ可らずして、既に出發期に就て、再三の變更

を致し、英國探検隊は遠く其遠征に進みたる今日に於ては、國民が此計畫に對して一半のインテレストを失ふも、亦謂れ無きにあらざるなり。然し、白瀬中尉の南極探検の目的をして、眞先に、南極の中點に突進して同所に日本帝國の國旗を樹立せば足れり、之れが爲には、他人の開拓方面を侵入するも可なりといふにあらずして、其探検の事實をして多少世界に貢獻すべき利益と相伴はしめんといふに在りせば、國民の同情の冷却は、必らずしも深く顧みるべきにあらずして、今日は決して遲きに失したりといふべきにあらず。眞正の探検家は、一往不返の熱情を要すると共に、また冷靜沈着の智慮を要す。白瀬中尉が果して探検家としての資質を有するや否やは、實に今後の行動如何に在りといはざるべからず。吾人は復此際、探検後援會なるものに一言なき能はず。彼等は白瀬中尉の該計畫を發表するや、其事の果して成るべきや否やを究めず、時に之に賛成して全國に呼號し、偶々該計畫に關して注意を興へ警戒を加ふる思慮の人あらば卑怯と嘗り意氣地なしと嘲り、其意之を措きて天下爲すべき事なしと云はん計りの狀ありき。而かも次第に調査を積み研究を重ねるに従つて、事の甚だ容易ならざるものあるを發見し、今日に至りて之を止めんとて能はず、之を遂げんとして能はず、進退兩難の境に煩悶しつゝあり。頃日同會の發表する所によれば、來る十一月十五日を以つて探検隊は愈出發の途に就くべしといふも既に再三延期を見たる今日に於ては、國民の之を信するもの甚だ尠きは亦無理ならざること、云ふ可し。然かし事、今日に至りしは該探検

の成否と効果如何に拘らず、該計畫を實施して國民に殉ずる所を果さしむるは、後援會の義務にして、彼等は白瀬中尉よりも國民に對して、一般其責任の重きを知らざるべからず。故に吾人は今回の南極探檢に就ては發頭者たる其人よりも、後援會其者に對して責任の自覺を促がすものなり。

南極探檢の蹉跌

十月廿四、廿五日

門司新報

南極探檢は大事業なり、大事業にして雖事業なり、雖にして大なる事業なるが、故に其計畫は、初に於て最も、周到の準備なかるべからず、白瀬中尉の志は壯なり決心は固より堅かるべしと雖も、準備周到ならざるに於ては、成功途に期し難し、是れ何人も其然るべきを知り、其然るべきを疑はざる處なり。

企畫中途に蹉跌して、出發の期日屢々遷延せられ、此の壯舉を贊して起りたる後援會と義侠の爲めに應諾したりと稱する船舶周旋者との間に訴訟沙汰をも傳ふるに至り其他世の贊同者を松魚にして探檢報告を一手に收めんとせし某新聞社の野心、之に出し抜かれてムカ腹を立て、探檢其ものに對し、有らん限りの妨害を試みんとする某新聞の妬心、襍糞百出して、探檢の前途殆んど悲觀の底に陥らんとす、拙の極端の極(中略)後援會の盡力と苦心並に白瀬中尉の決意、之を諒せざるにあらずと雖も、その第三案の實行は余望の取らざる處なり、斯くの如きは徒らに危地に入て、國人折角の援助を孤柱とし、自ら成功を期せずして、盲進するものたらざる乎、中尉に在ては決する所あり、憾む所無かるべし、然かも日本の名を冒し、

斯かる無謀の舉を敢てせん、とは忍ぶべからず。(中略)南極探檢は一の白瀬中尉をして、其冒險の名を成さしめんが爲めにあらず、南極未知の地を世界に紹介し、絶點に日章旗を樹て、兼て學術界に貢獻する等、之れが目的は實に大なるものあつて存す。北極探檢の至困至難なるを見て南極探檢の少くともそれ以下の困難に由て仕途げらるべきを期すべからず。(中略)

大隈後援會長の書に據れば(中略)同隊出發後に於ても萬一の危険等ある場合中心となりて盡力することなしといふ、後援會に於て已に其責任あり、決心ある以上、「出發後に於て」と謂はず、出發前に在りて、十全の準備を整へ到底避くべからざる危険は別として、豫め危険に打ち勝つ丈けの用意ありたる上、彼の探檢に必須なる學者部班の如き相當の人々を乗船せしむるを要せずや、出發の後危険の起りたる後に於て、之を處せんとするは、常に事に益なきのみならず、衷情より親切なる致方といふを得ず、後援會には名譽と財産に當めるもの少なからず、衷情より探檢隊の爲めに謀るとならば五萬、七萬の金之を醜集すること何ぞ難らん、會長たる大隈伯一人の手に於ても、其ればかりの金を作る亦容易なるべし、然かも三案中の最下劣のものを撰ぶが如き、余輩其熱心の度に疑なき能はず、若し果して後援會に於て今日の場合十分の準備を整ふを得ずといはば、須らく根本に反て探檢を中止し、餘り遠からざるの將來を期し改めて探檢隊を出發せしむるの勝れるに如かず、不完全極る準備を以て不完全極る探檢隊を送らんとするは危険の甚だ

じき也、無益の甚だしき也、而して白瀬中尉が總ての點に於て不完全を極るを知りつゝ強て出發を急ぐが如きは縱令中尉の立場として事情の諒すべきものなきにあらずとするも、畢竟小勇に焦るものたるを免れず、暫く垢を忍んで他日を期し、其大勇を發揮する所ありて可なり、一方に野心家を挫へ一方に妬心家を迎へ、最初よりケチを附けられたるもの、詮じ來れば中尉が功を急ぎて輕卒に事を進めんとしたるの過ならずんばあらず、ケチの附きたるものは強行したりとて前途益々困難に陥るを常とす、一度出發を中止し更らに完全なる準備の下に再舉を企るこそ大なる勇氣あるものゝ取るべき所なれ。中尉は遂に大勇者たる行動の外に逸走せんとするか、後援會は遂に危險危難の間に、憐れむべき彼の探檢船を送らんとする乎。

南極探檢の略歴

- (1) 一千七百七十二年ゼイムスクック氏初めて南極探檢を試み、南緯七十一度十分、西經百六度五十四分に達し大氷壁の海洋に聳立したることを目撃して歸る。
- (2) 一千八百十九年ウイリヤム、スミス氏は二本柱帆船に依り、ケーブホルン

の南方サウスシエトランドを發見す。

- (3) 一千八百廿年ウエツテル氏はサウスカートランドを探尋し、活火山ブリツゲマンを見ろ。

(4) 一千八百廿二年サウスオークラスの發見者なるボウエル氏はブリツチマン活火山を探訪し、該山は二百呎あることを認めたり。

(5) 一千八百廿三年ウエツテル氏は再びブリツチマン活火山を探尋し、四百呎あることを認めたり、次に同氏は南緯七十七度の點に達し、ノック氏より數度進行了たる割合なるが、其近傍何等の陸地なきを知れり。

(6) 一千八百三十一年、ビスコエ氏はブリツク型タラ號に乗じ、エンデルビーランドを發見せり。

(7) 一千八百三十九年バレニー氏はバレニー島を發見し、一萬二千呎の活火山

を認めたり。

(8) 一千八百卅九年、佛蘭西遠征隊デュモンドヴルベール氏はウヰルケースラン島を發見せり。

(9) 一千八百四十一年サーゼームス、クラツク、ロツス氏は有名なるサウスズイクトリヤランドを發見せり、ロツス氏は南極探檢の爲め、南緯六十七度東經百七十四度半に達せり。此時南極洲に達する直徑六百哩の水路を氷海中に發見し、それを通過せり、而して西方に於けるズイクトリヤランド氷雪中にある活火山に於ける磁力の連脈あるを知れり、又ロツス氏は此遠征に於て南極洲沿岸五百哩を巡航して、百八十呎より二百呎なる氷壁の聳立海洋に連るを認めたり。

(10) 一千八百七十四年チャレンゼール氏は、ヰイルケース氏の全く終點なりと想像したる陸地を發見せり。

(11) 一千八百九十三年より四年に亘り、シーエツチラルセン氏は捕鯨船ヤーソン號に乗り、南極の北西部を探檢せり。

(12) 一千八百九十四年白耳義のホルチグレピング氏は第一回の遠征に於て海豹船アンターラチック號に乘じ南極圈を横斷して、サウスビクトリヤランド及びポツセシヨニアイランドに上陸し南緯七十四度十分に達せり、此行同氏はケーブアデラは南極洲の學術探檢に於て最も安全なることを慥かめたり。

(13) 千八百九十七年エムゲルランー氏はヰエルチカ號に乘し、南極洲の沿岸を巡航し、翌八年に至り初めて越年の經驗をなしたり、同氏は七十一度廿四分の點迄達せり。

(14) 一千八百九十八年ボルチクレンピング氏はサウザン、クロス號に乘じ、第二回遠征を試み、學術探檢に於て奏功せり、同氏は千八百九十年無事歸國す、サーニ

ユネス氏は大に援助し其資金を供給せり。

(15) 一千九百一一年七月スコット氏は、英國地學協會及英國學士會院の後援に依りチスカバリー號に乗じ南極探檢の途に上り、十二月下旬新西蘭出發十六日間に於てマフマード灣より上陸し越年冬營し翌年南極突進を試みたるも果さず、一千九百二年英國に歸る、シヤツクルトン氏此一行中にありたり。

(16) 一千九百七年シヤツクルトン氏は英國官民の賛成を得て、南極探檢を試み、ニムルド號に乗じマツクマード灣より上陸し、越年冬營し、八十八度廿三分の地點に達せしも大風雪に逢つて其目的を果さず一千九百九年歸國す。

(17) 一千九百十年六月スコット大佐は再び南極探檢を企てテラノバ號に乗じて出發す。(スコット大佐は今尙冬營して初志の貫徹を期せり、これにて二ケ年の冬營繼續なり。堅忍不拔如斯にして始めて始めて大事成らん。)

(18) 次は我白瀬中尉一行の南極探檢にて、一千九百十年十一月祖國出帆。

(19) アムンドセン博士はフラム號に乗じてスコット大佐に先だちてウエルズ灣に上陸せり。(アムンドセン博士は、其巧妙なる突進法により、遂に南極到達の第一人者とはなりたるなり。)

(20) 蘇格蘭のドクトル、フルース氏は一千九百十一年五月本國出發、南米を経てユーワ洲に上陸し、探檢を爲さんことを發表せり。(一九一一年)

(21) 獨逸のワイルヘル中尉は一千九百十一年四月獨逸を發し、南極洲を横斷する計畫を發表せり。(一九一二年)

(22) 濠洲モーション博士は一千九百十一年十二月濠洲出發、サウスビクトリア洲を細密に調査する目的にて冬營する旨發表せり。(一九百十一年)

將に南極に向はんとするの前日ものして知己に示したる歌作のうち、春樹

(一) みんなみの氷の山に日の丸の

みはたたてずばなとかやむべし。

(二) ゆきのみね氷の山もなにかせん

わが身にもゆるやまとをこゝろ。

此行欲究天地根 豫期奏功第一番。

無父無母無妻子 滿身只有大和魂。

庭家の者著るけ於に前發出舉再

(忠子嗣其はるけ抱者著る中央列前)





ひとこと

幼い時から、繪は大すきな予、されど書く方
 なく、見る方が好きなりしなり。
 スケッチをして見たは、今回が初め、習はぬ經
 の讀めぬ道理、本式に修業した事のなき身の、
 所謂奇用がき、これを梓に上すとは、ちと大膽
 の沙汰ながら、これも南極行に於ける予の努力
 の一片として、本書の中に挿入したる次第なり
 と、ひとこと斯の如し。

春樹浪士

其一 祖國の別れ

さらばなつかしき、兄弟姉妹よ、生きて居たなら再び會はん祖國の埠頭。若しも然

らずば、前人未踏の無垢の淨土に佛とならん。

芝浦のしばしをこゝに

たちわかれゆくえは

いづこしらなみのはて

決死の身にも、哀別離苦の悲壯は伴ふ。見よ補助機

關の煙も祖國の埠頭に向てなびくを。(明治四十二年

十一月廿九日)



其二 暗夜の別れ

空には衆星の影冴えて、萬籟寂として聲絶えたる銀ヶ浦の夜半、我が行を見送りの
後援會の幹事諸氏並に丁未俱樂部員諸君、其他の同情者は爰に最後の握手に、其情緒
を交換してサラバ！と計り、木船を去りぬ。

暫くして送者の艇が岸に着するや、倏忽一

點の短火は漸次盛に燃え出しぬ、この火光

こそ、送者が熱烈なる同情の、その燃ゆる

が如き姿ならずや。(明治四十三年十一月廿

九日)





平火夫、吉野隊員の諸君もまた來集して俗曲に合唱す、全く凡俗の界を化脱の感あるなり。(明治四十三年十二月十日)

其三 月下の尺八

月清し浪路しづけし

ありときく龍の宮居も

かくやとぞおもふ

さもなくしてさへ大の尺八好き、此夜此景に對しては、
などかじつとして居らるべき。

一竿の愛笛いつしか手にあり、甲板上に踞して得意
の曲を奏す、聲のよき土屋運轉士、村松機關士、藤
平火夫、吉野隊員の諸君もまた來集して俗曲に合唱す、全く凡俗の界を化脱の感あ

其四 懐かし鳥影

國を出て、より爰に數旬。どちら向いても水と空の、我等の針路に、一個の鳥影は
現出せり。

「ヤア島だツ」甲の叫びに、飛び出す、乙、丙、丁の
面々、就中涙を流してよろこぶ、アイヌ花守の無邪
氣さ。「オレアスコ貰ふべいか」ア、彼れにも尙この
進取の氣満々たり。男子豈緊禪一番せずして可なら
んや。(明治四十三年十二月十二日)



其五 熱帯名物——驟雨來



氣溫室内華氏百度に垂んとす、煙草の煙をなびかす風だもなき真晝中、俄然かさくもる一天、海水の色も黒ずみしように變る。サツと計り冷たい一陣の風、船員は船長の令下に、各帆を一段のリップ。

と間もなく篠つく計りの大驟雨。忽ち見る赤裸々の壯漢三々五々、船首に、中甲板に、後甲板に、石鹼を全身に塗りつけて、雨浴の開始。各室の軒には水槽を受けて、洗濯水の收容、ア、此間の快味！(明治四十三年十二月十六日)

其六 蓄音機の慰藉

ぬしのはうたによう似た聲と

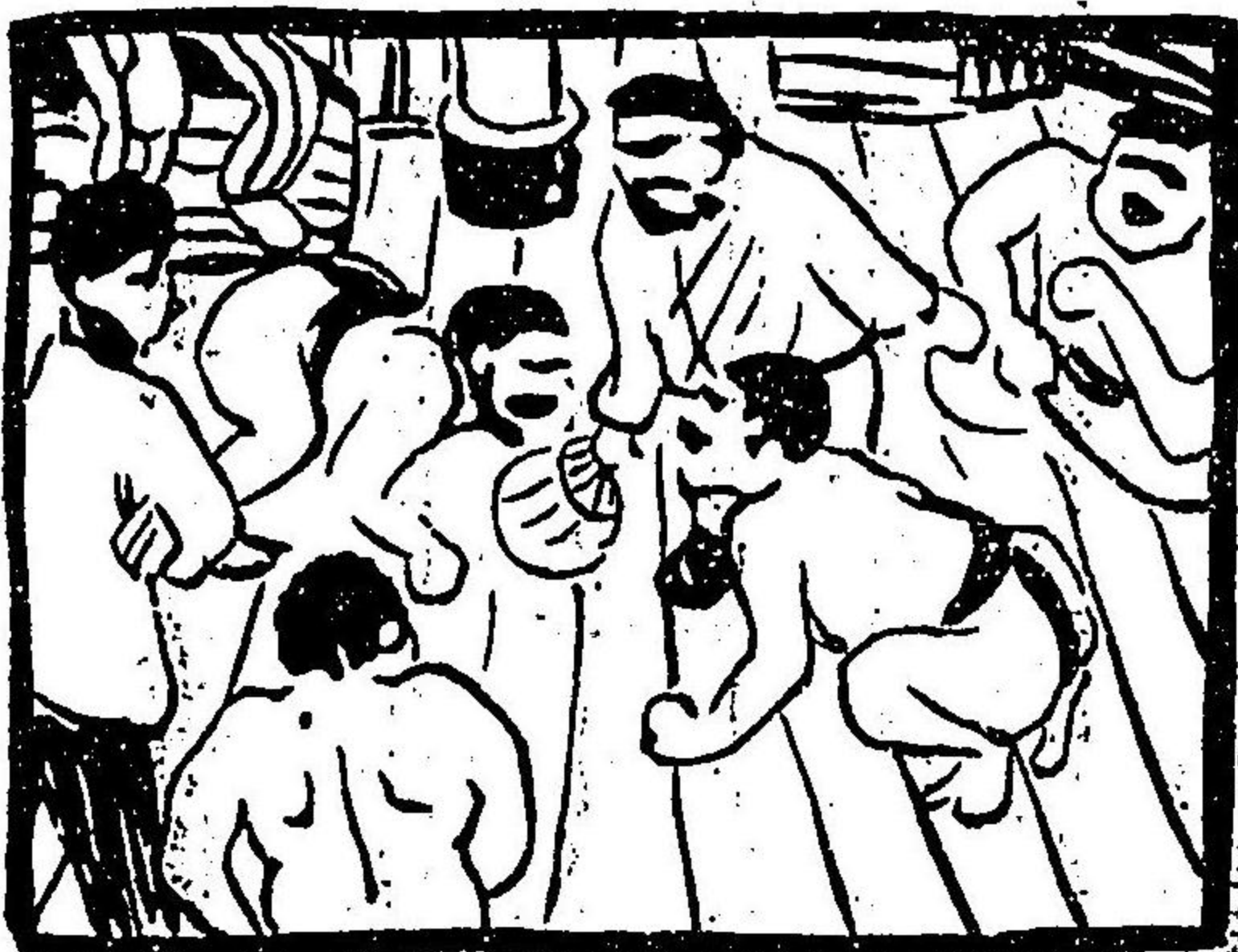
くりかへしきく蓄音機

總計七十餘枚のレコードには、義太夫あり浪花節あり、端唄、長唄、琵琶唄あり、何等樂しみもなき、天涯萬里の孤客には、このレコードに由て、慰藉さるゝことこれより益多からん。

晴れ渡る月夜の甲板には、蓄音機の譜に合せて、尺八の音すゞしく響くなり。(明治四十三年十二月廿二日)



其七 船中角力



「片や片吟島」、「片や極鯨」この片吟君は腹部は眞黒。全身印度人然たる黒色の壯漢を極鯨とは、恰好な名乗り。

開南丸の狭い甲板の上には「残つた〜」と行司君の活動する餘地も少なく、勝負は一方が轉ばずば、濼團扇上らず、「イヤよく見合して〜」。(明治四十四年一月二日)

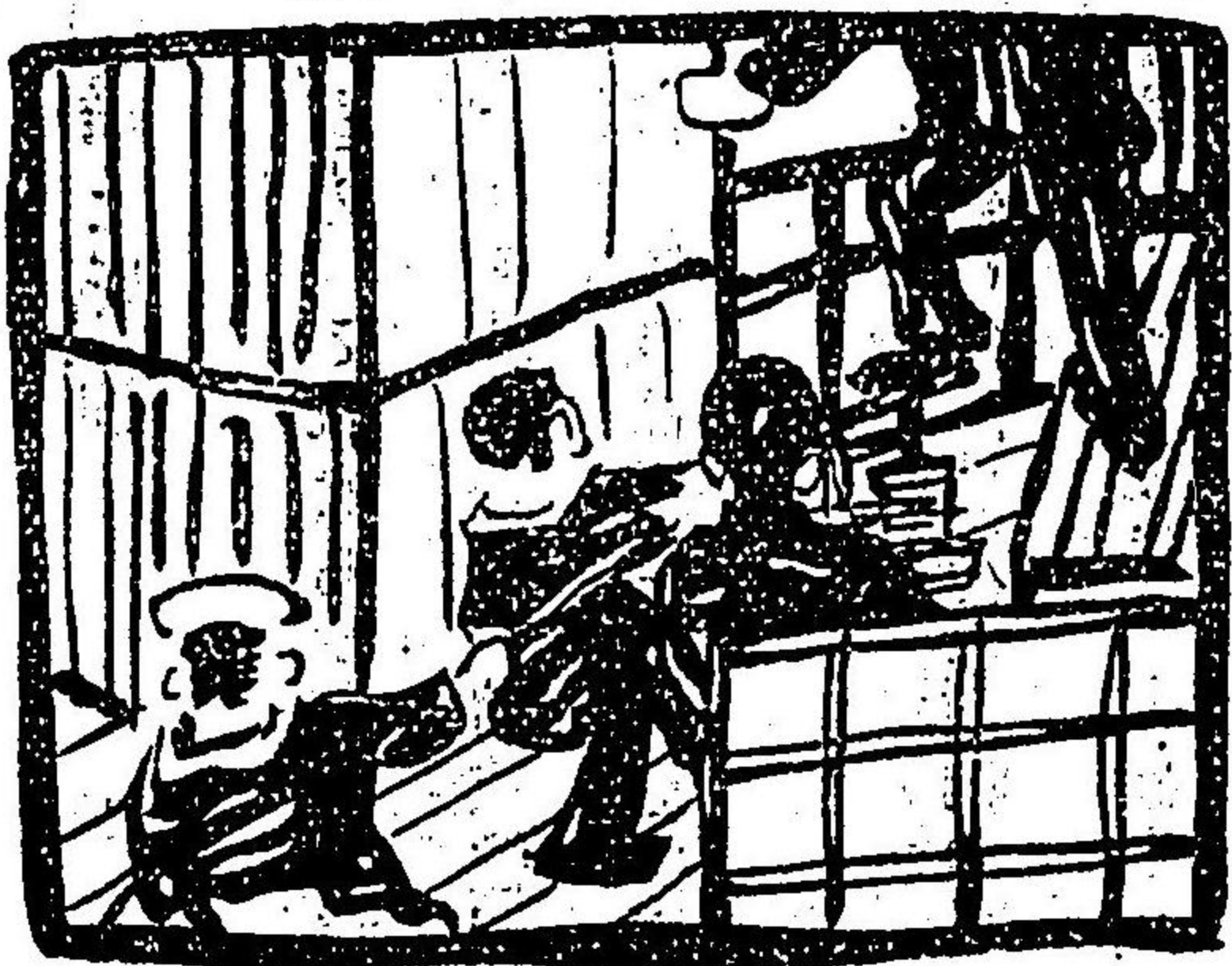
甲板の角力は
ころぶところまで。

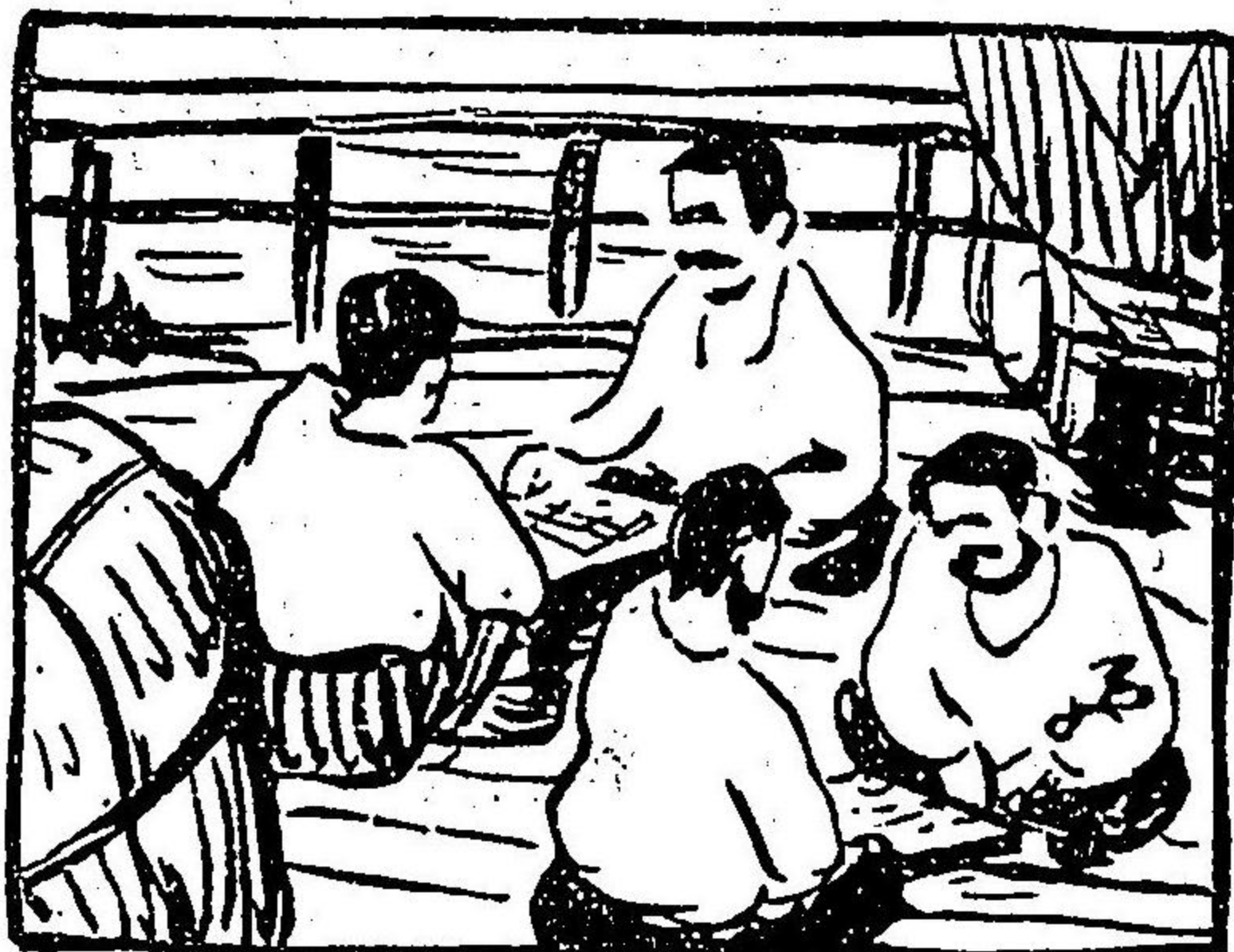
其八 ビリヂボンプ

「エンヤライ〜」「コラ山中はやまなか、日中はヒノナカ、何やら毛の中、お染久松庫の中、コリヤ〜」足拍子、口拍子、音頭取りの妙手は清水機關長。

三十分乃至一時間、船底に浸入したる海水も、いつしか空虚となつて、夕食後の腹すかしには、此上なき好運動なり。(明治四十四年一月十四日)

サアビリジひけ〜
サ、一とひきに
一ツアみのため
サ、國のため





治四十四年一月十六日

其九 圍碁と將棋

風波靜穩、近來になき風ぎ方、これならば碁も將棋も大丈夫と、策連、弱將、持ち出す碁盤、將棋盤、夕食も忘れて争ふ雌雄黑白。此戲は實に無聊を消すには無上の具なり。

碁の大關は村松と乃公、將棋は乍憚乃公横綱の貫目あり、酒井、高川、高取、まづは大關、しかしいづれも鳥なき里の開南丸の蝙蝠なるぞ笑止なる。(明

其十 厨夫部屋

我々は日々如何なるものを食するか、予はこの項に於ては兩個の獻立をお目に掛けむかな。

平穩のひと日



朝

味噌汁、香の物、

麦飯、海苔罐詰、

晝

ハムと玉葱、

福神漬、麦飯、

夕

鯉罐詰、干鰯、

麦飯、奈良漬、

夜食(夜勤の船員丈)

牛乳、堅麩麩、

或はビスケット

時化のある日

焼味噌、福神漬、
麦飯(焼けたりは)

牛肉罐詰、バター
と堅麩麩福神漬

鯉節、鮭罐詰、
梅干

バターと堅麩麩

其十一 なづかしき他の火光

館山灣頭を出で、より數旬初めて火光を認む、姿は暗にわかぬども、慥に他の船の
舷燈なり。



二道の光明を認むてふ句も、此時に於て初めて其真味を解すべし。

ア、なづかしき舷燈よ、今宵は何日もより甲板上が賑しきなり。

甲板夜話も更に一段の興味を添へて、更長くるまで奇談百出。(明治四十四年一月廿二日)

其十二 植林頓の入港

午後一時、新西蘭、植林頓港に入る。
港内投錨地點の附近には、英艦あり佛艦あり其他の大船巨船山の如き雄姿、堂々として横はる。本船は恰も是れ葉大の一小船。而も同じ遠洋航海の仲間入りかと思へば、何となく痛快の感あり。(明治四十四年二月八日)



其十三 異國港頭の歓迎

ヤングウエリントン名譽領事は、一行の幹事を招きて、一大歓迎會を開く。戎装の紳士貴婦人に囲まれて、熱誠籠れる乾杯の歡。



ア、これ世界的事業なればなり。人類的事業なればなり。これに従事する我等は、其責任の頗る大なるを自覺せざる可らざるなり。(明治四十四年二月十日)

其十四 片吟鳥の初捕獲

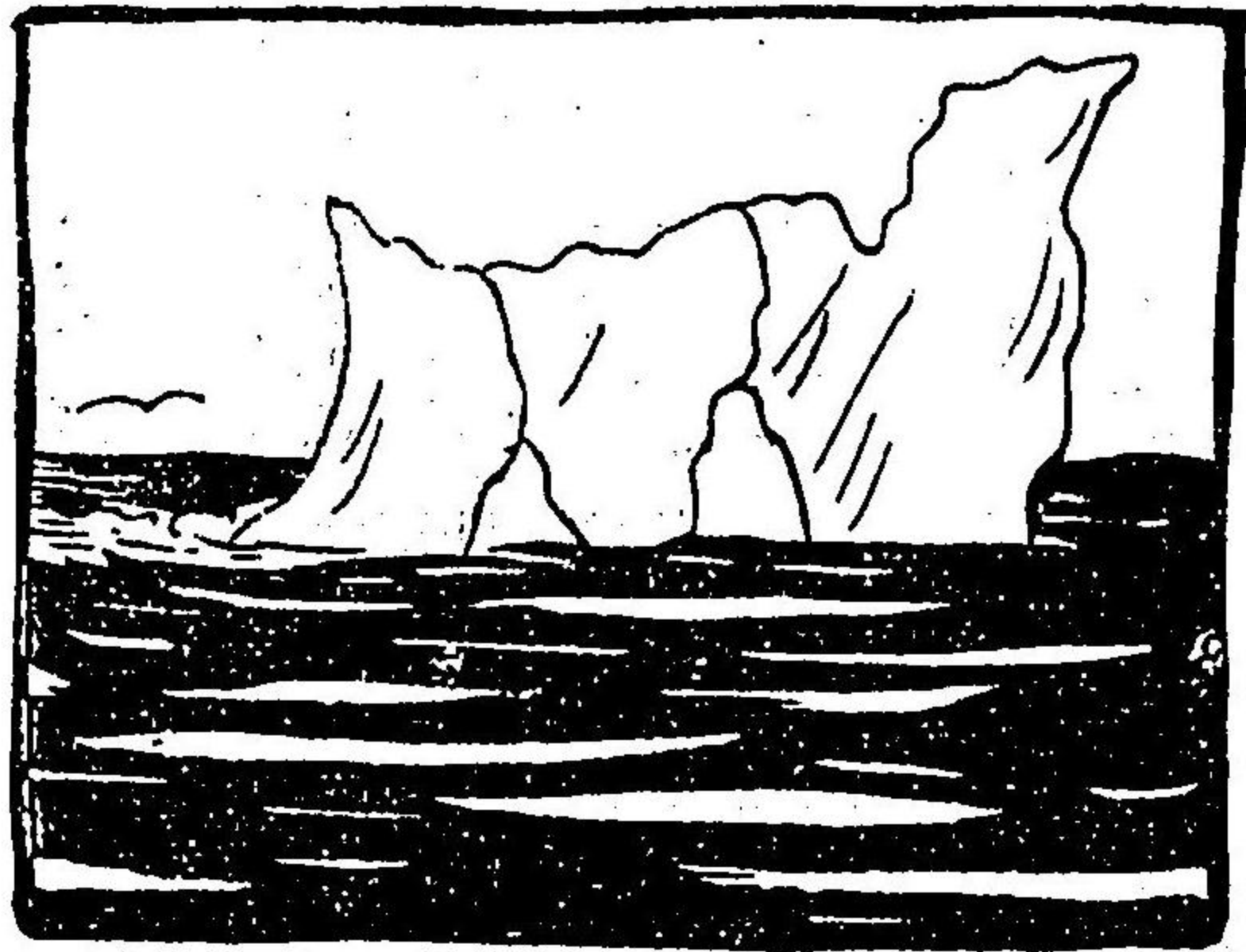
「魚に似て魚に非ず」鳥に似て鳥に非ず」
 「泳ぐ時は魚に似たり」浮ぶ時は鳥に類す」
 奇々怪々の動物よと百方捕獲の策を講じ、遂に小網に入れたるは、アドレイ片吟の若殿なりしなり。我等は親や寫眞によつてこそ片吟の面影を忍びたれ、生きたるに會ふは今日が始め、萬歳くの連發も無理ならぬ沙汰なり。可憐なる哉、



片吟鳥。(明治四十四年二月十七日)

其十五 初見參の冰山

寒威強し冰山來らん、氣温下る氷山に出會せん、數日來の臆測は正しく眼前數溼



の邊に顯出されぬ。奇觀にして美觀、而して壯觀、造化の妙も爰に於て其神味を解せらる。冰山來る、冰山來る。冰山來りて初めて氷海の航海らし。

氷見えて白ゆき

ふりてゆく方は

寒さの色になりまさりつゝ。

(明治四十四年二月廿八日)

其十六 美なる哉サンセツト

夕陽斜映幾冰山、

瓊閣瑤臺指呼間、

針頭正向南磁極、

白帆悠々入仙關。

正に是れ、羽化登仙の神境、是に至ては殆ど形容の詞なきに苦しむ。

天下の詩聖畫伯を拉し來つて、この舞臺の壯觀を嘔ひ、絶景を畫かせたきを。ア、我に其備なし。(明治四十四年三月三日)





其十七 初めて望む南極洲

氷海遙望萬岳連

雲歟非雲白一線

舵樓忽聽歡聲湧

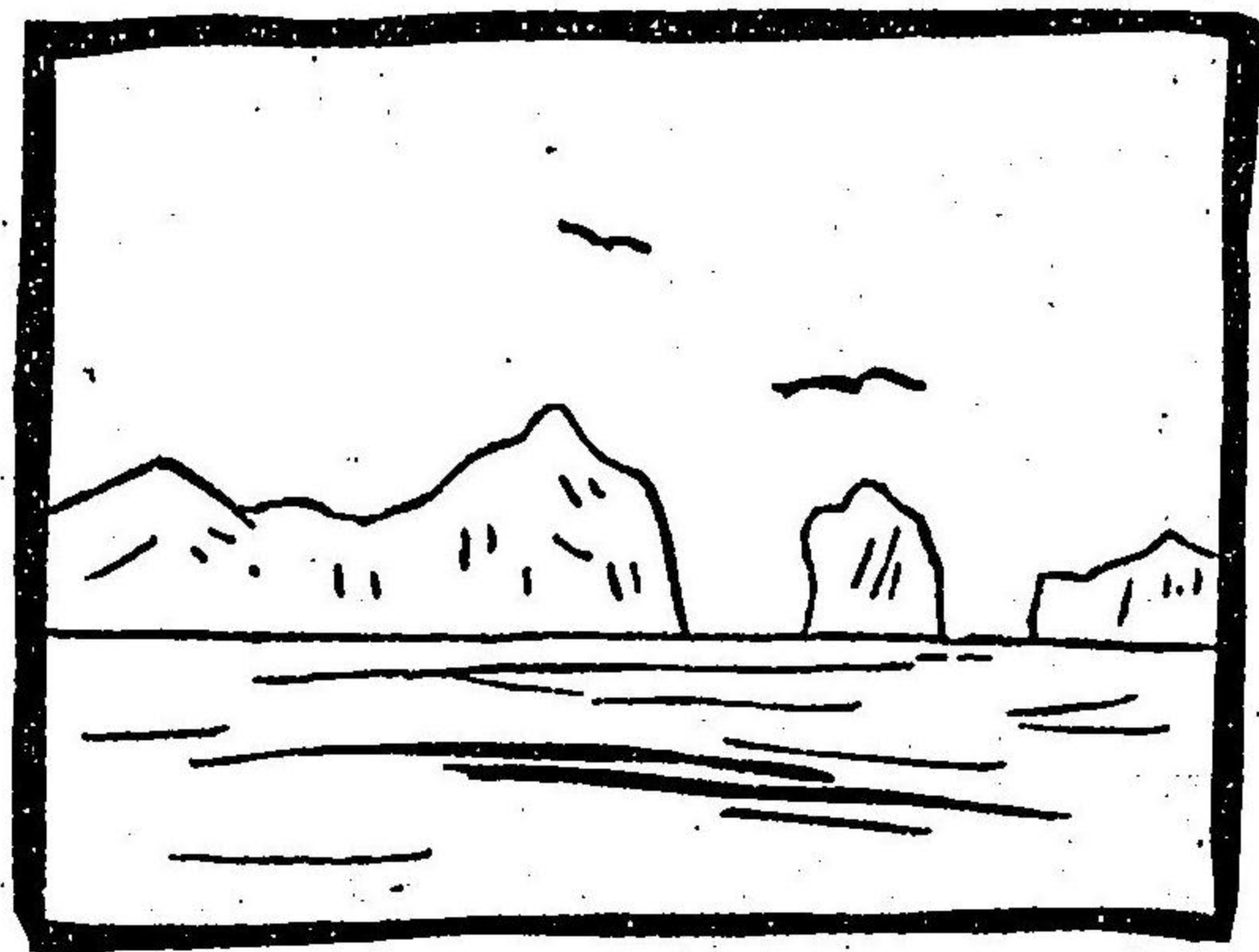
意氣既吞南極天

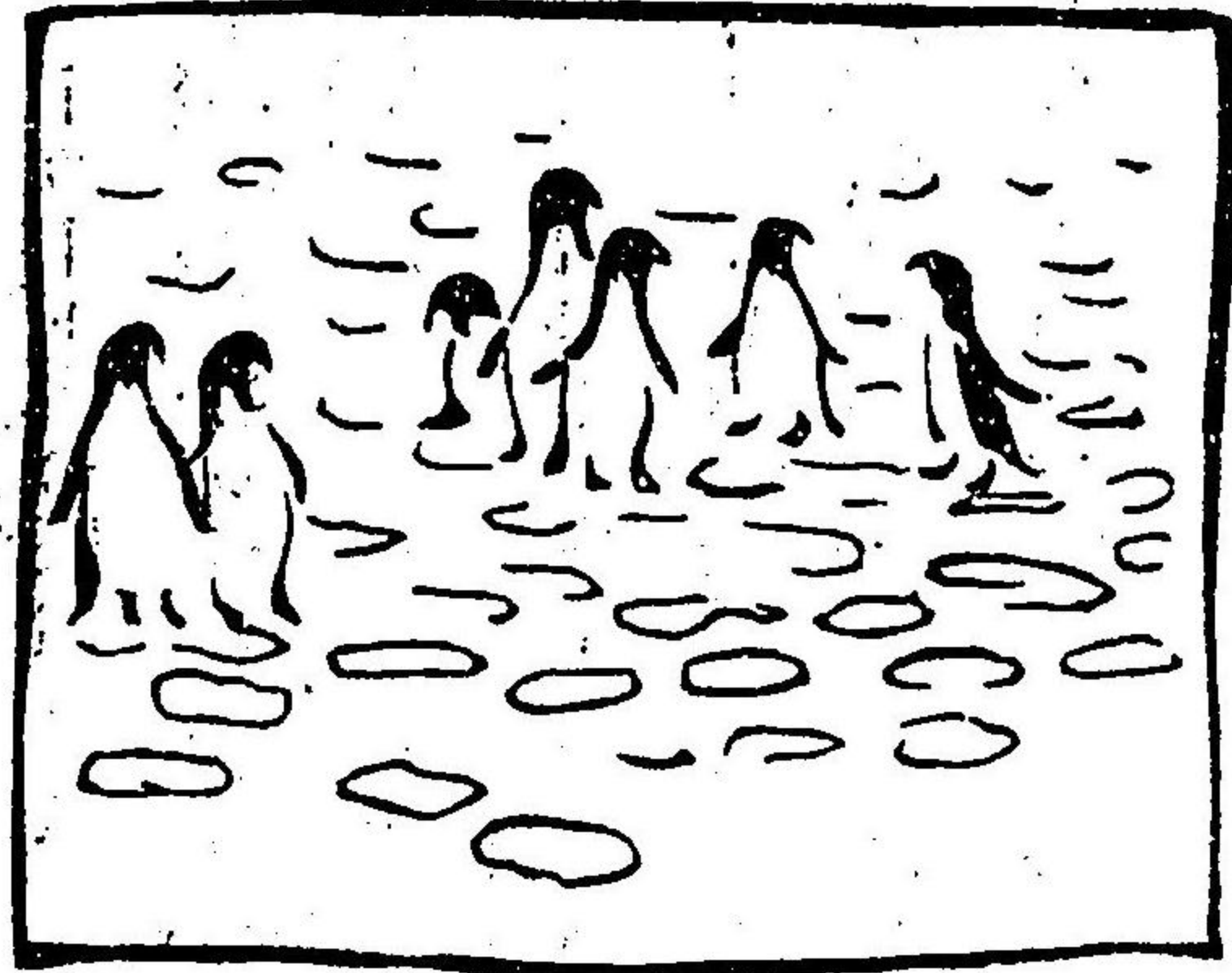
此時、此間、正に我一行が得意の絶頂たり。千古の英姿神々しき、南極洲サースピクトリヤの大陸、氷の山、雪の峯、嵯峨として天を摩せむとする處、誰か痛快を叫ばざるを得むや。萬歳々々の壯呼歡呼は、しばし南極圈内にひびき渡りぬ。(明治四十四年三月六日)

其十八 南極一隅

ハーカート山の脈續きに、ローセット島あり。島の形の、恰も氷山の如きもまた、南極の特色なるべし。無論氷雪もて包まれたる島故其遠望は氷山と異なるなし。

ハーカート山の脈は、山頂概して甲の頭の如し、ローセット頭も其頂尖れり、地質學者ならぬ予は、如何に説明の方法を知らず、たゞ一の奇現象なりと附言し置かんのみ。(明治四十四年三月廿八日)





其十九 片吟の行列

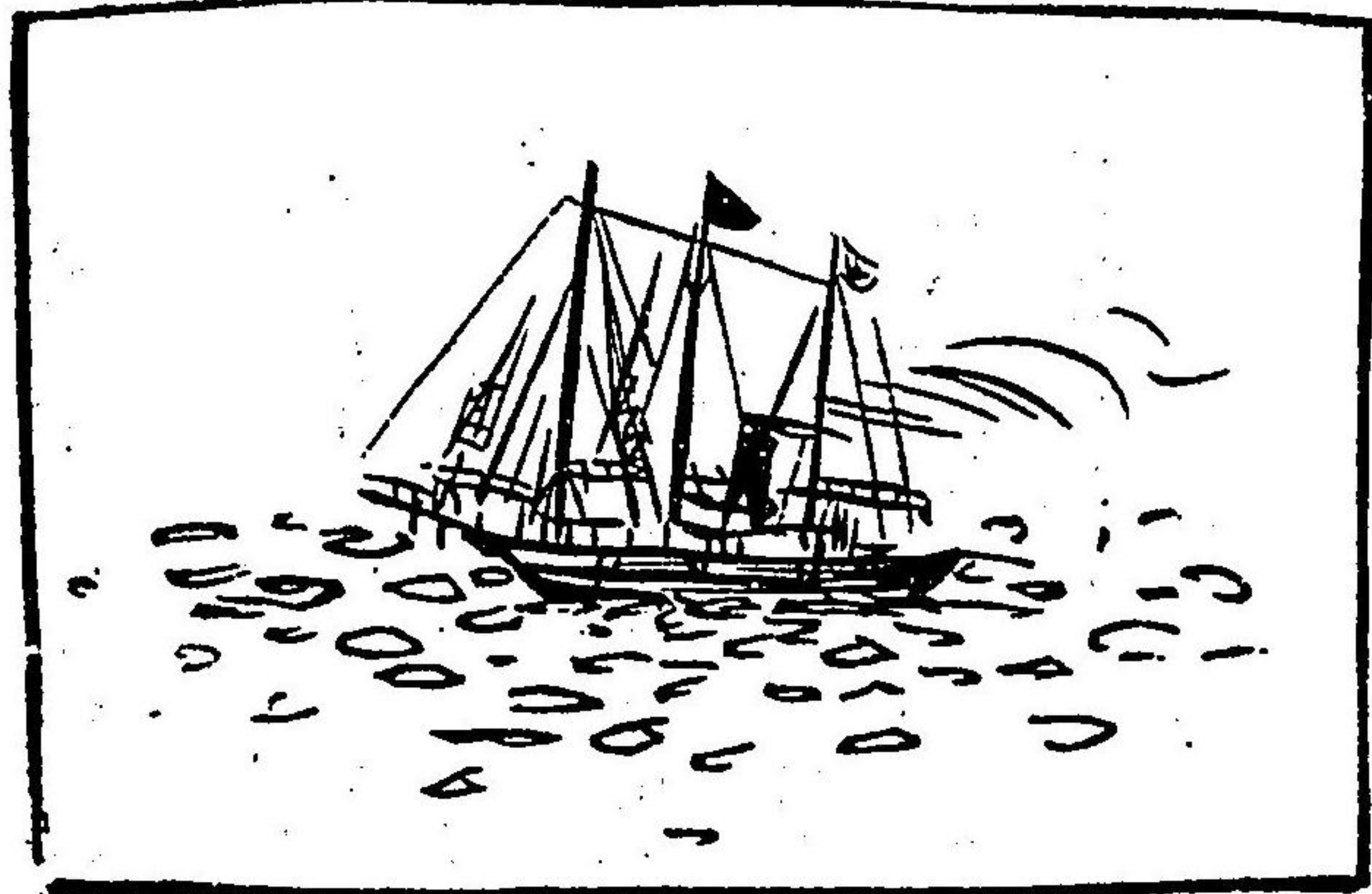
オヤ／＼何者なるぞ、我等の領土に侵入するものは
恰好は我等に似たるが少し大きい。
珍らしい氷山に乗つゝ来たものだ。ギヤア／＼、向
ふでも我等の國語を囀つて居る。これがいつか聞い
た事のある、人間といふ先生かしら……
氷盤上に、列作る片吟鳥の一群、二群我等の船を
望みて、相語りつゝある状は、又可隣の一種なり。

(明治四十四年三月十日)

其二十 海豹だ／＼

「ヤア海豹／＼」船首に居る三井所君は叫び
ぬ、予は突差自分の部屋に走つて、村田銃
を携へ來り、いで一發お見舞せんと、甲板
に出し一切那、無線電信にでも通告を受け
たように、氷盤の中に隠れて行衛不助。(明
治四十四年三月十日)





其二十一 氷盤中の開南丸

大なるは方一丈以上、厚二尺以上に達する大氷盤
 (氷盤の熟字は、予が去年歸朝せし時、佐々木照山
 氏と相談して拵へた新熟字なり。)の重圍に陥りし我
 開南丸は進退是究るの境遇とはなりぬ。出發の際か
 ら、時日の少し遅れたるを苦慮しつゝありしが、事
 實は遂に此非運の現出とはなりぬ。天の時と人の和
 と而して地の利なくては事は遂に成らず。(明治四十
 四年三月十日)

其二十一 嗚呼萬事休す

嗚呼萬事休せり、時は利あらずして船進み難し。
 引返さんは初志に反す、されど大氷盤は前路を遮り
 海は將に旦夕を以て凍結せんとす。
 百萬の強敵にも屈せざる日本男兒も、偉大なる自然
 の變化の前には、屈伏せざるを得ず。衆議爰に決し
 て退却の無止に到りぬ。窓外飛雪紛々として、帆を
 うならす風のものすごき計り。(明治四十四年三月十
 四日)



其二十三 鳥 獵



銃身は氣温と共に凍氣を帯びて、双手はちぎる、計り。橋上近く飛びかふ、黒信天翁を、一番射止めて呉れんと、寒風すこぎ甲板の上に停むこと一時間、飛びかう鳥を目がけて、ローリングする甲板上よりの立射「ズドン」甘く命中したと思ふと何たる事、獲物はひらくと、逆巻く浪の中へ。無益の殺生、俄に南無阿彌陀佛々々々々々。(明治四十四年四月二日)

治四十四年四月二日

其二十四 短艇遊臘

一葉の端艇は、渺たる南太平洋の波上に浮ぶ。

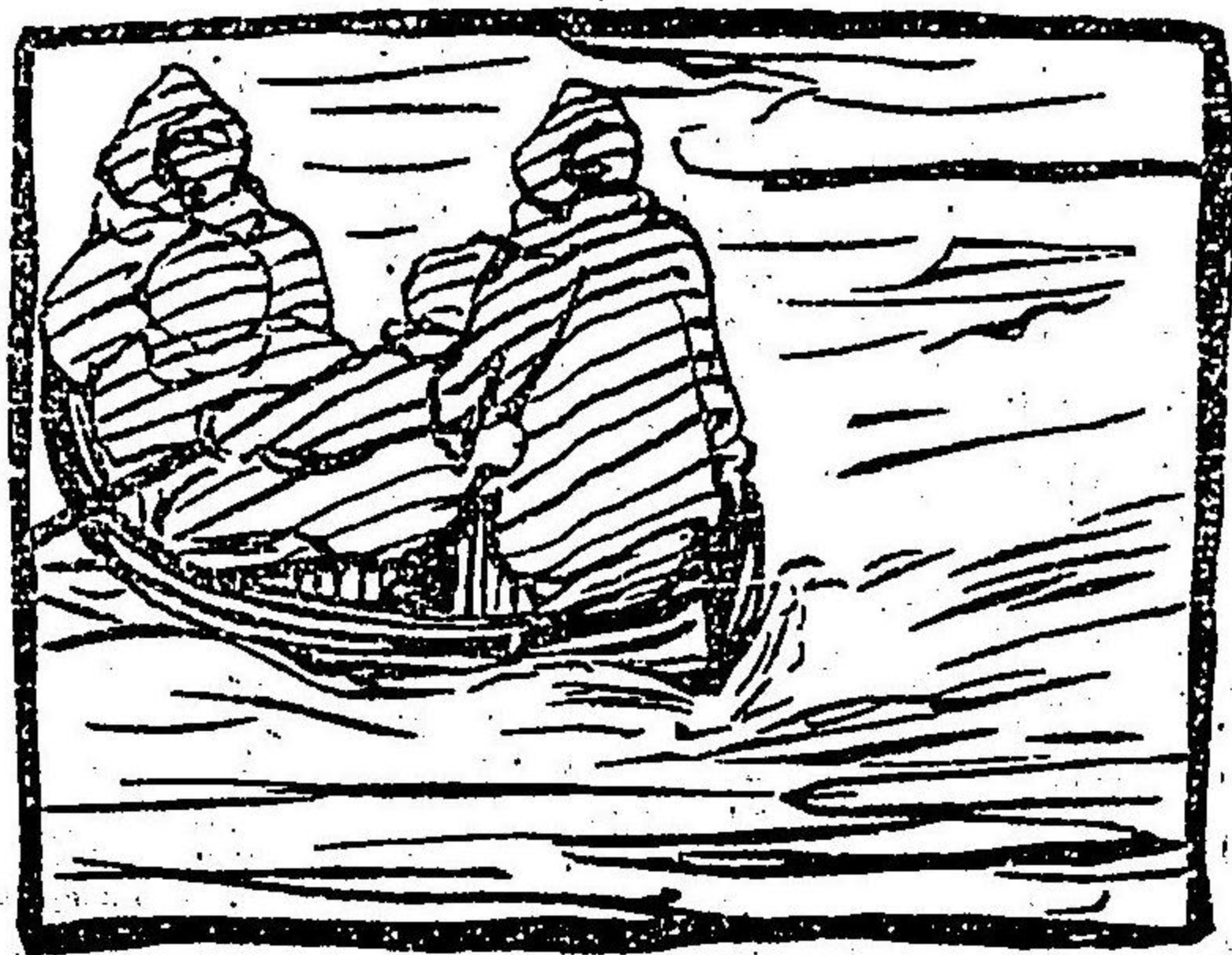
射手、捕手、構えたる散彈銃の筒先は、遠慮なく飛び交ふ海鳥の頭上に向ふ。三發に打落す三羽の鷗。

これを見し本船よりは、「出来したく」との賞讃の叫び起る。

獲物の皮は好標本、肉は早速夕食の好下物、加ふる

に這般の愉快絶。ア、これ海國男兒が絶好の遊び

ならずや。(明治四十四年四月六日)



其二十五 半年目の同胞と邂逅



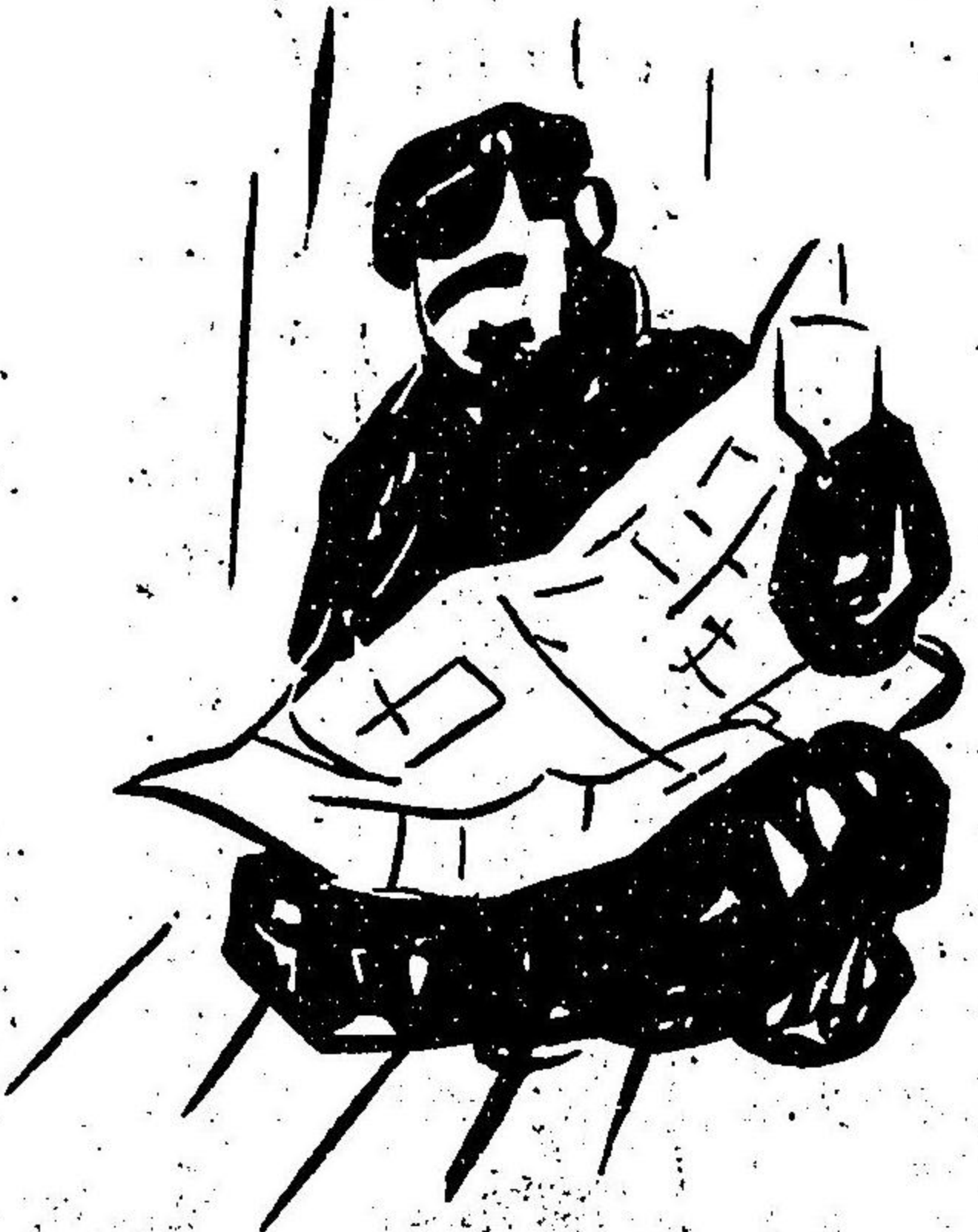
シドニー入港の夜、予はニツ／＼と日記の整理に
カめつゝありし午後十時頃、當直船員は來客なり
といふ。招じ入るれば、同胞の在留人なり。一は
竹内君一は廣戸君。廣戸君の予と郷を同じふする
も更に奇遇なり。
彼一語我一句、やがて寢て居た連中も置き出て談
話百出、中には始めて聞く奇聞珍談に更はいつし
か長けゆくなり。(明治四十四年五月一日)

其二十六 久しぶりの祖國の新聞

國を出で、より、半ケ年目に讀む祖國のニュース、故國の冬はいつの間にか去りて、
記事は麗な春色に満てり。

上野は何日が満開なり。墨堤は將に散
らんとす。心はいつしか櫻花の下にさ
まよふ。

解語の花もまた祖國のに優るものなし
どうしても日本は花の國なり。あはれ
この花をして、世界のいづれにも香ば
しからしめたや、立てよ櫻花國の快男
子。(明治四十四年五月二日)





第廿七 大公望

今日は船員全部の上陸日、隊員は皆留守居して船に在り。

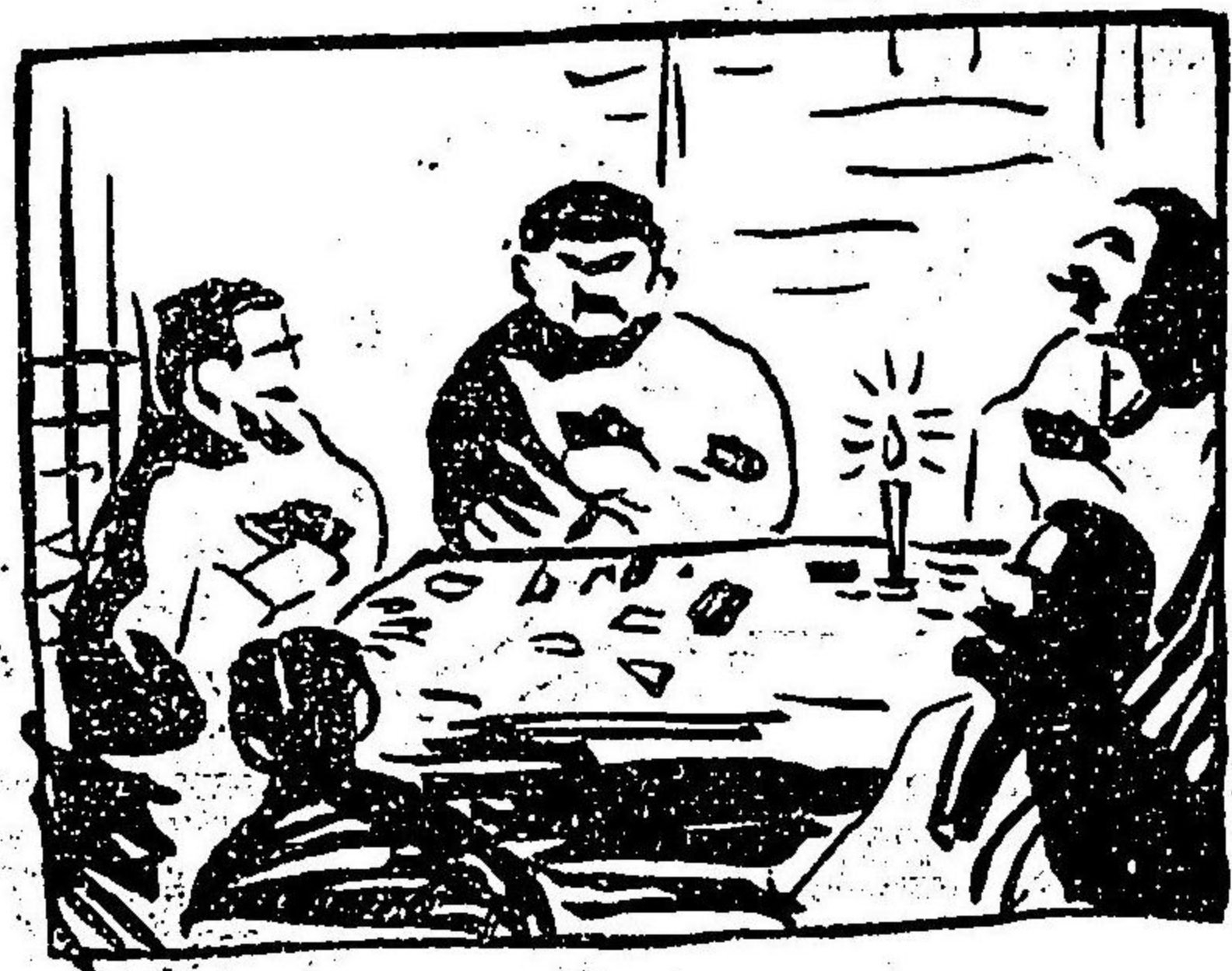
此間の無聊を醫せんとして、釣を垂る、忽ちにして糸端には潑刺として鮮魚跳る。忽ち顯る大公望數人。獲物中、鯖、鰹大多數を占む、晝食に於ける、鮫の材料には十分なり。(明治四十四年五月六日)

其二十八 鬚男の花合戦

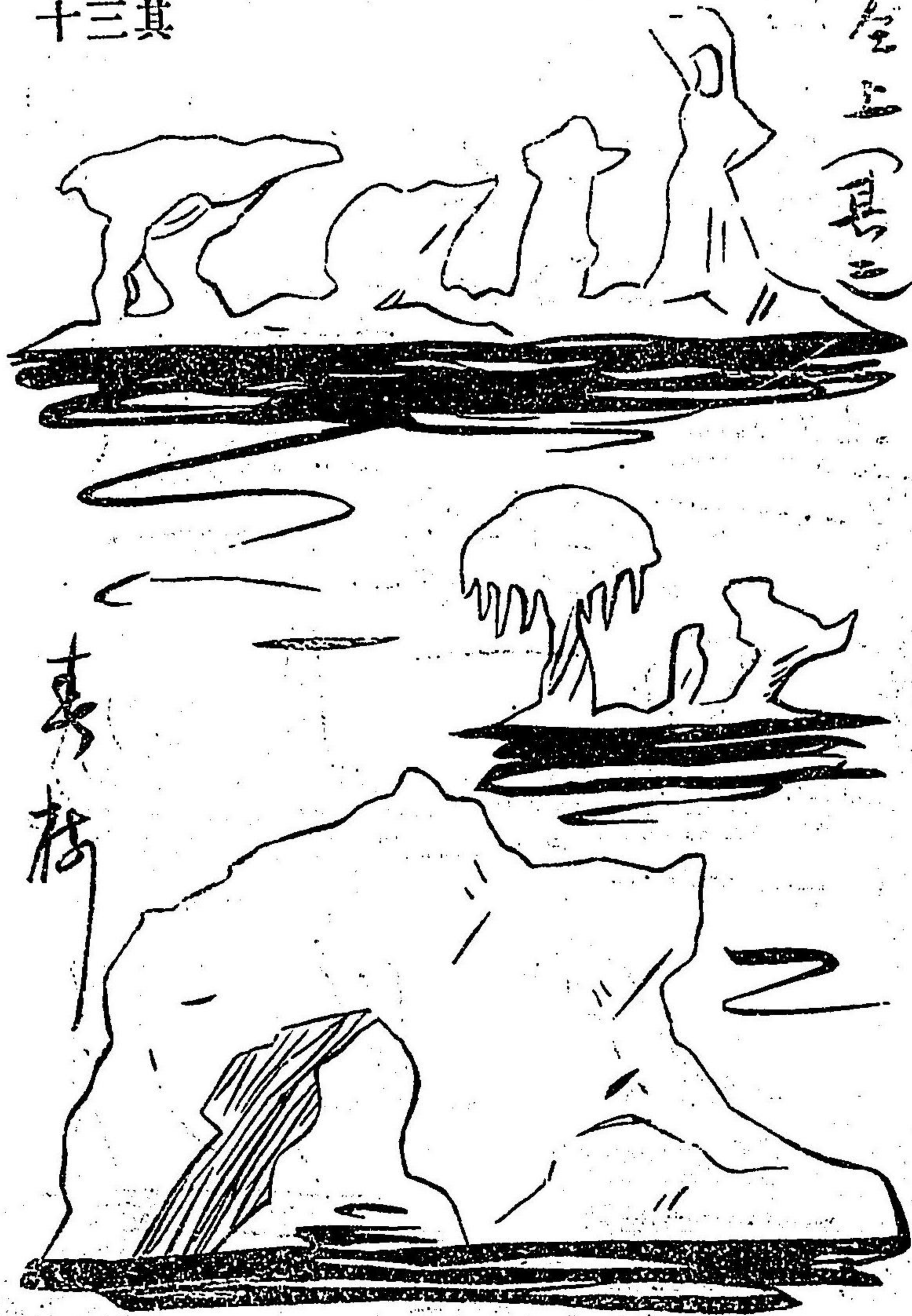
無人の境にては、最早不用と邪魔物にされたる名刺の紙を利用して、こゝに自製花がたるは出来上り。

荒くれの夷男や花がるた

戦機は熟して、燈火を圍む、八の字君、關羽君。こ
こが別目の青か赤か。互に眼を白黒にしつゝの血戦
數合、はしなく勝は新米のM君に奪はれて、寢耳に
水ならぬ雨入四光。青に無中のT君、赤に今一枚と
力むだN君は茫然自失。(明治四十五年十二月十日)



其十三



全上(其三)

其十三

其二十九



明治四十四年

十二月十二日

氷山の奇形

其一

其二十九

治四十四年十二月十四日

これより馬鹿釣り大に流行し出す。(明)

つられざらまし。

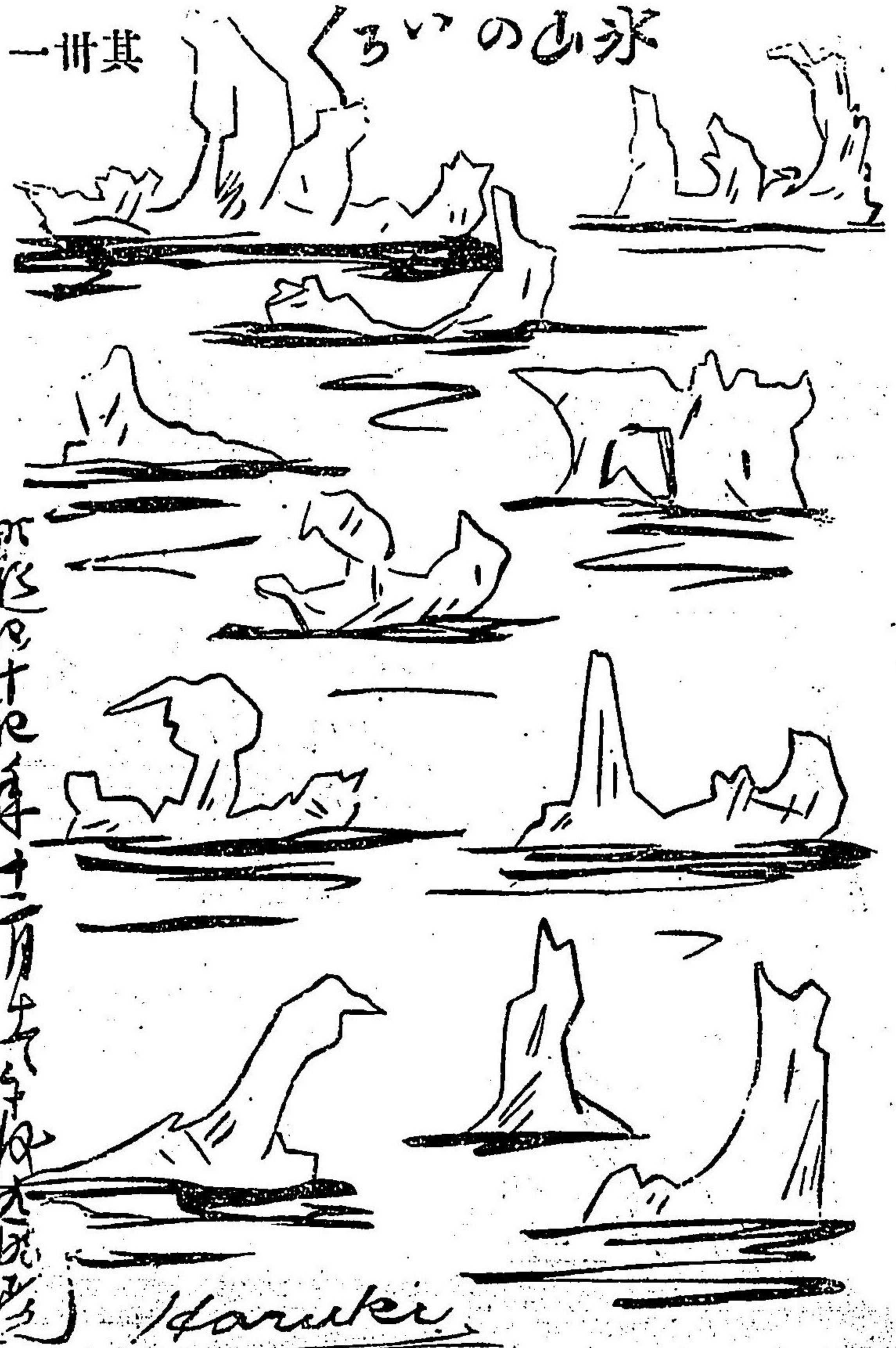
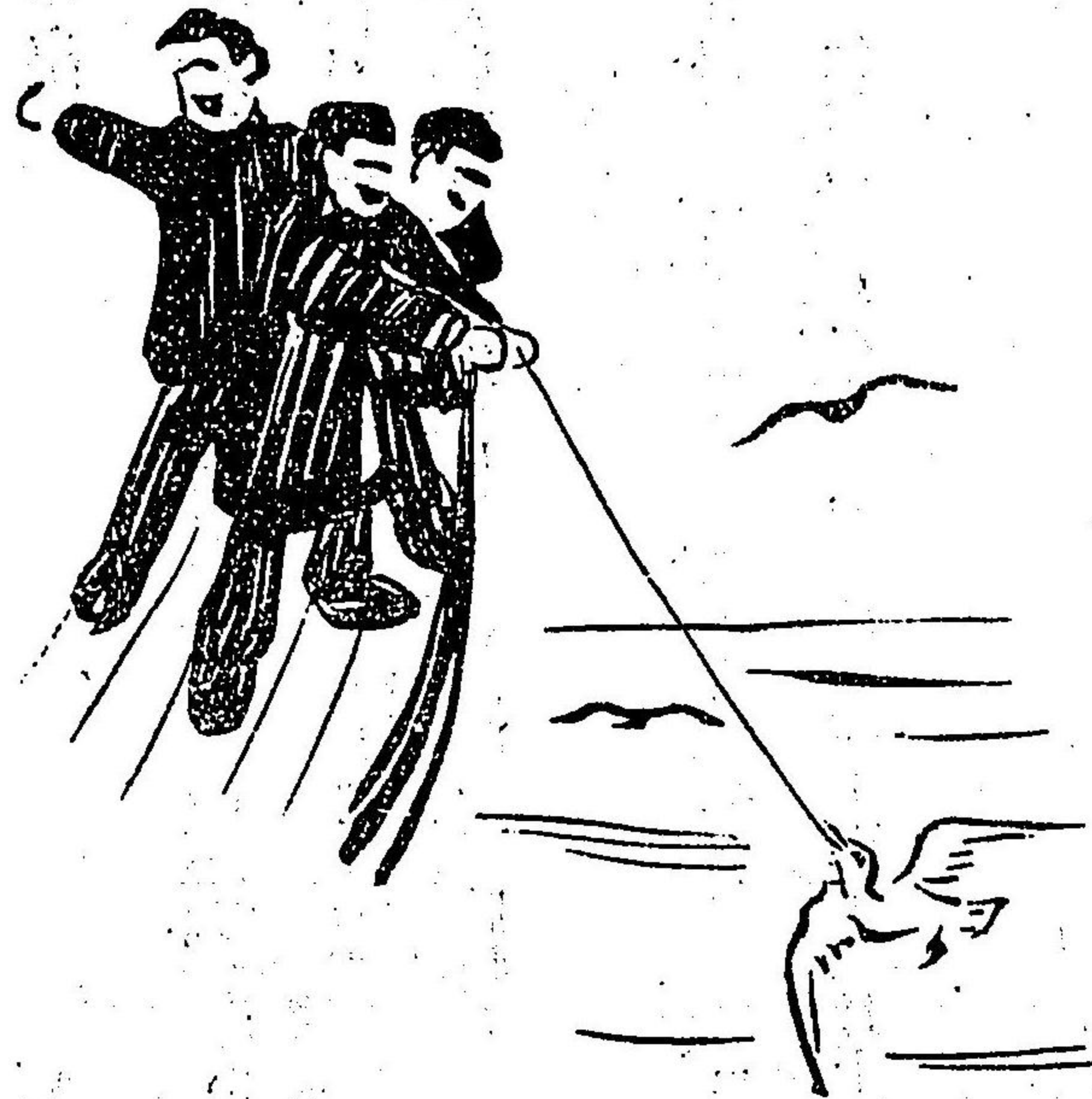
ばかしくも

三井所とかいらすば、

どれ味をためし

「釣つたりく」三井所君のハムの餌の
妙案功を奏して、信天翁の釣は成功。

其三十二 馬鹿釣騒ぎ



此は十四年十二月十四日

其三十三 氷海の日の出



午前二時東南の水平線上既に太陽は、其光彩まばゆ
く輝き出づ、海には氷山三々五々として浮ぶ。
旭光大氷山の半面を照して光彩陸離、双眸惚とし
て、爲めに眩せんとす。
氷海の日出は、活気に満ちて加之も趣味を帯ぶ。正
に是れ男性的の光景ならずや (明治四十五年三月十
五日)

其三十四 薪木拵へ

當直船員、用のない隊員、波も静かな今日を仕合せ
よしと、薪木拵へ。にはかに始まる木挽、薪割。

「木挽くと一升めし喰ふが」

お國なまりの木挽うたも、時に取りての一興ならず

や

T君のお國が

わかる木挽うた

(明治四十四年十二月廿四日)



其三十五 大時化



風さはぎをなみさかまく

荒海にやまと

男の子のをさげびの聲

怒濤狂瀾は、海國男子の友なり、大時化は好個の鍛練場なり。

大時化は單調無味なる航海に於ける、一服

の興奮劑なり。大時化は天が海員に與ふる、一撃の鞫なり。大時化を物ともせず、日本男兒の「エンヤラエンヤ」の掛聲を、南氷洋に聞くは何等の快ぞや(明治四十四年

十二月廿五日)

其三十六 南氷洋上の餅搗デー

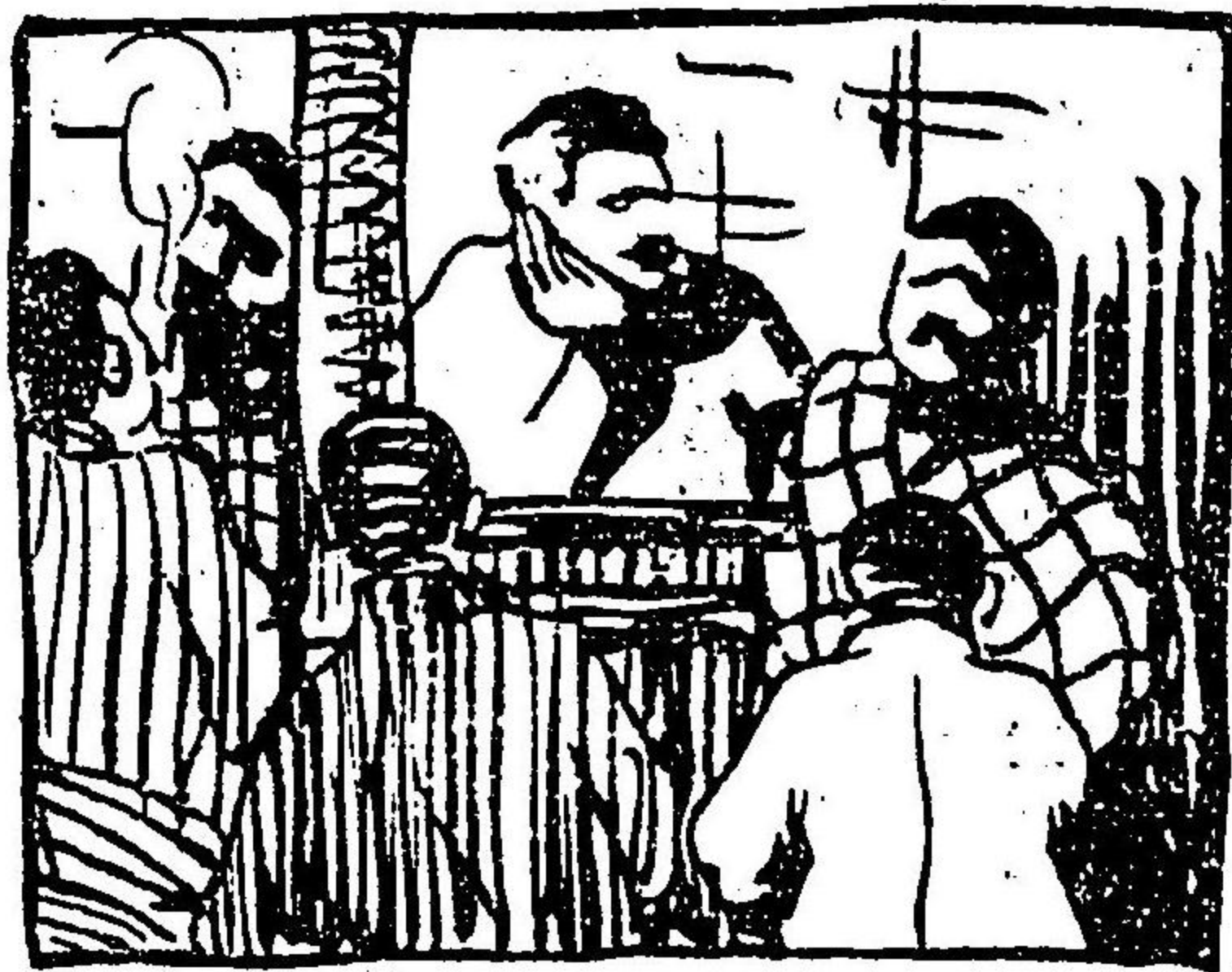
「トントンバタートンバター」折からの凜烈たる寒風に、蒸米が冷えては大變と、オーチニくの掛聲も勇ましく、振り上げては振り下ろす杵ぶりも、手際がよし。

鬚の蓬々たる杵取り先生も、他に見られざる光景なり。

今度は餅にありつけたと、子供のように喜ぶ三十男かく申す乃公も、餅好黨の二人なり、日頃は横着だが、此日に限つては大活動(明治四十四年十二月二十七日)



其三十七 ストープ夜話



十五年一月五日)

「石炭缺乏、當分の内ストープの使用を禁ず」零度以下
の航海に於ける、當直船員にこの命令は又酸の極
ならずや。

此折柄喜ぶべし、河豹の大獵、早速其脂肪を割いて、
暖爐の活復。ジリ、と音して少し臭氣は交はれど、
寒中に火ほど御馳走はなし。臥床に横たはつた先生
まで起き出て、ストープルームは忽ち満員、甲語り乙
話し、こゝに一花ストープ夜話の咲き盛り。(明治四

第三十八 萬里の友

「さてはフラム號なるぞ」我等の豫想は接近
するまゝに、明かに的中したることを知り
ぬ。

フラム號は、嘗てナンセン博士が北極探檢
に従事したる有名な探檢船なり。

今は我行に先つてツエルズ灣頭に浮べり、
彼船は極地に向ひしアムンドセンの歸途を
出迎ひに來りしなり。

萬里の天外、鬪らずして相見え彼我が感は、
豈に寸紙に盡すを得むや (明治四十五年一
月十六日)



其三十八 氷路を開鑿して氷壁の登攀



一刀兩斷の懸崖直下三百尺、仰ぐ計りの氷堤を開鑿して、一條の氷路を造す。

双靴にガンヂキを附して登攀して、氷堤上に達すれば、一望正に千里、白皚々として眼界又一點の塵埃なし。

清淨無垢の白銀世界、罪の子が蹈むには懼り多き極みならずや(明治四十五年一月十七日)

其四十 亞歷山々脈

標高一千四百五十呎、山甚だ高からずと雖も、蜿々たる氷堤の間に巖然と、エドワード七世洲の目標となつて、凍天に聳ゆ。又是の雄姿たるを失はず、ピスコ灣は其山下にあり。

我沿岸隊は此處に船を停めて、これより將に大踏査を試みむとす。(明治四十五年一月廿三日)



其四十一 片吟鳥の捕獲



帝王片吟は、片吟鳥中の尤物なり、身長四尺、體量拾貫餘、坊チャン以上のスタイル也。

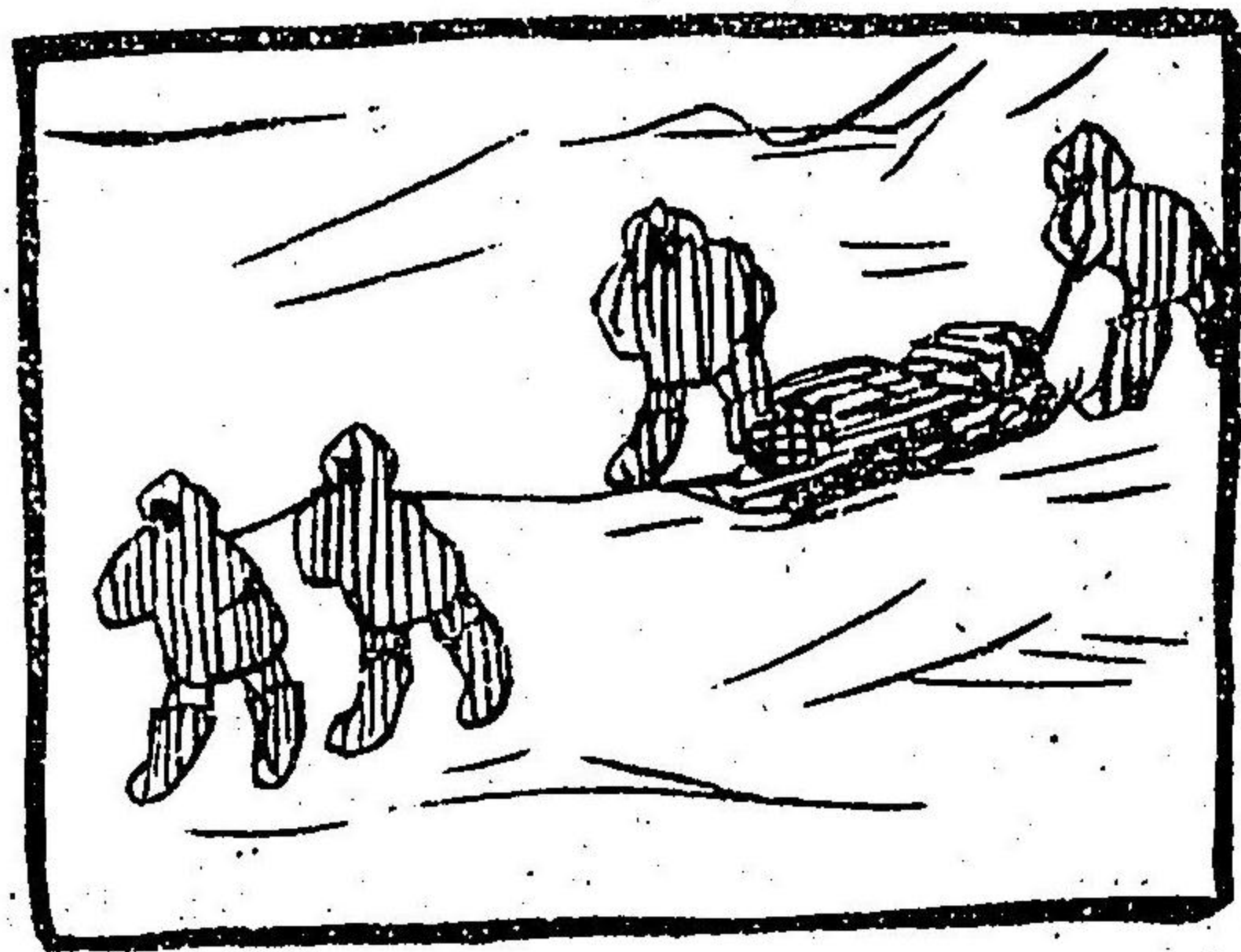
帝王片吟とは、英人が命名せし處なるが帝王の冠字ある丈に、我々日本人は、これを捕獲し、是を打撃するに憚り多く感ぜ

らる。寧ろ大片吟、中片吟、小片吟と簡單なる命名の方こそよけれ。先輩の歐米探檢隊長殿如何？(明治四十五年一月廿四日)

其四十二 氷野の橇旅行

こゝピスコ灣の沿岸氷上を、進みゆく我探檢隊の一行、橇一臺に四名が、り、積載したるは、一晝夜の糧食、寫真器械、標本採集具。何人も未だ嘗て汚さぬ氷野の上には、日本男子の橇のあとが一線を引き伸しつゝゆくなり。

目指すは、聳ゆる亞歷山頂、雪の進軍氷を蹈むで「嘗て、遼東の野に氷雪の苦を嘗めたる予も、極南の橇旅行ほどには感せざりき。」(明治四十五年一月廿五日)





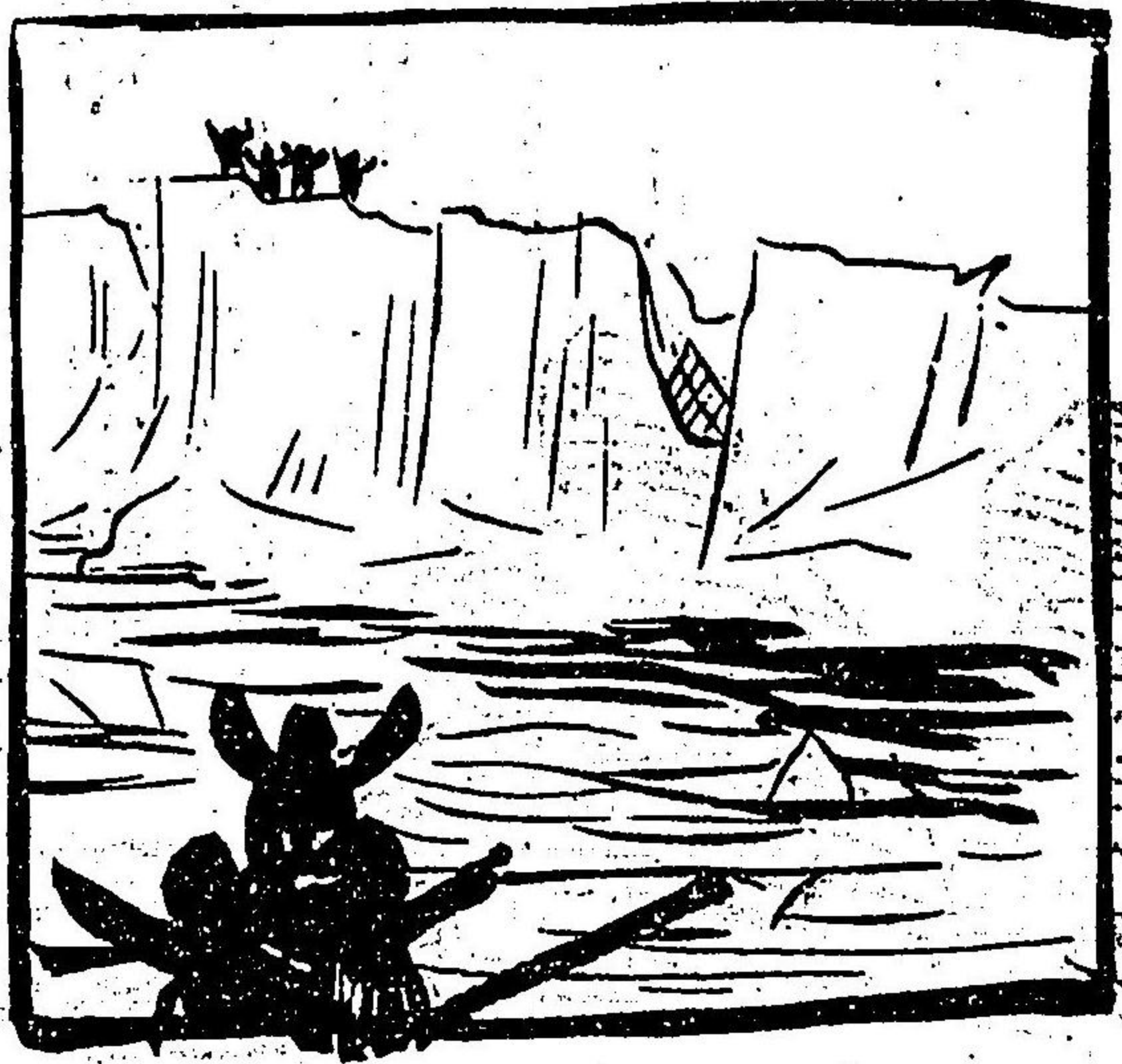
其四十三 したわし氷原

別働隊西川渡邊兩隊員は、亞歴山頂に向はんとせしが、時を經れども歸り來らず、我等は大に憂慮して、忽ち搜索隊を編成す。予は双眼鏡を持つて先頭に立ち、島事務長併に渡邊、柴田兩水夫補助となつて警戒の任に當る。崎嶇羊腸危険千萬なる、水路を進み、氷壁を攀ちて、亞歴山腹の高原に上らんとす。したわし氷原の名は、鳥のし、多田のた、渡邊のわ、柴田のし、を取りたる此時の命名なり(明治四十五年一月廿五日)

其四十四 兩隊の同志が邂逅

斷崖なす三百尺の氷堤の上「オーイ無事だつたか」氷盤漂ふ凍海の中「皆健全だ成功したか」向ふの氷壁からこの叫びがこたま(こうりたま?)となつてひびくこゝウエルス灣頭、故國を距る五千里外の會ふはうれしやの一幕。

突進隊萬歳、沿岸隊萬歳、俄かに黒くなつた、お互同志の雪やけの顔色には、無量の笑みがたゞえられて……(明治四十四年二月三日)



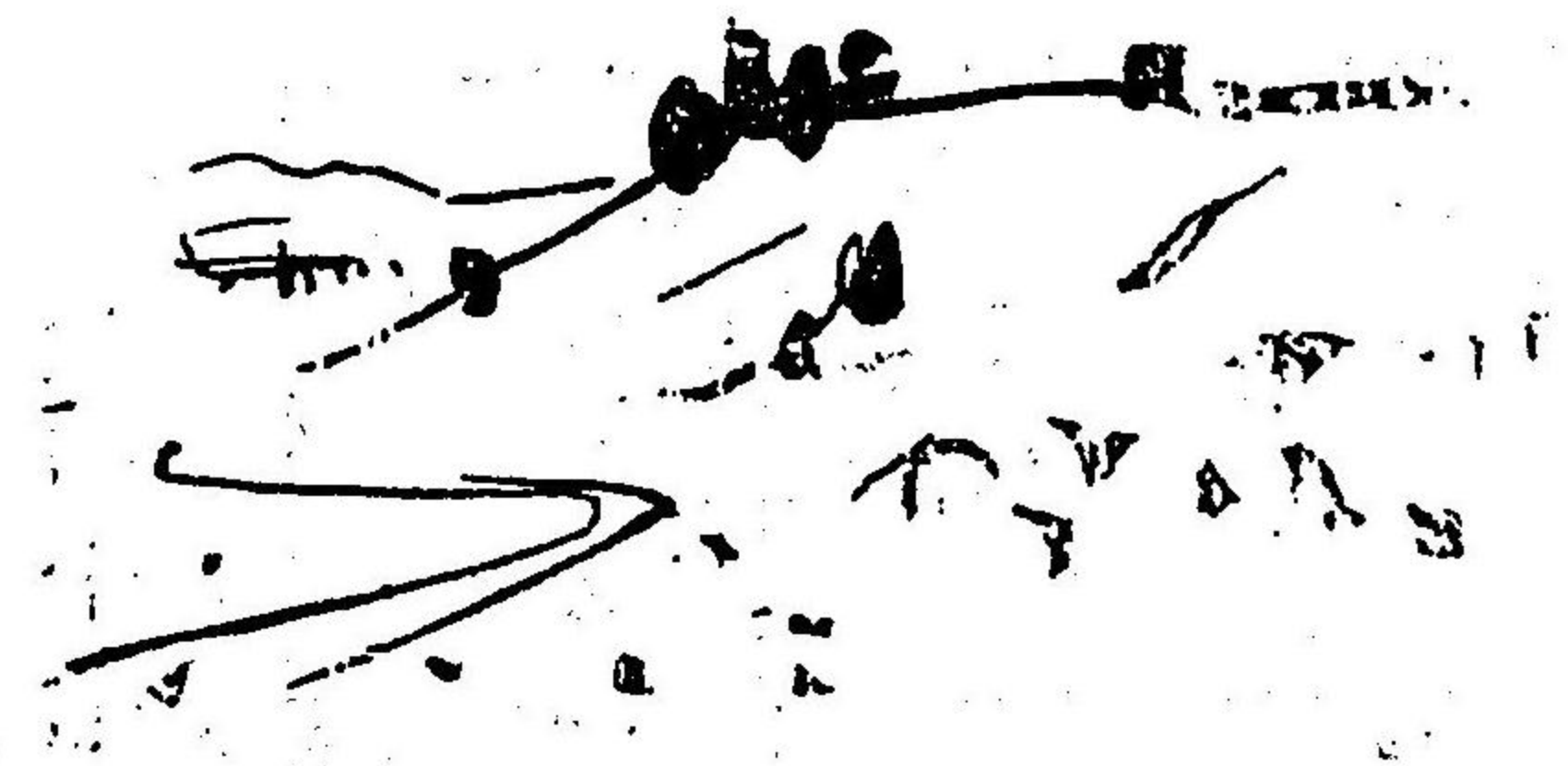


其四十五 犬の今俊寛

冷酷、無情、一將功成つて萬骨
枯る世の中とはいへ、織ぎ止め
得べき玉の緒貳

拾を、無快くと、食料もな
き氷野に棄つとは。ア、これ、
そも誰れが罪か。あはれ。

(明治四十五年二月四日)



其四十六 夢路の故園

夢路こそあやしくかつはうれしけれ

なきたらちねにあひつ話しつ。

夢より外はあふ

よしもなき、

雲外萬里の遊子

群。おれは昨夜

はこんな夢を見

たよ」と互に夢

自慢、夢物語り。

(明治四十五年二月廿日)



其四十七 ヘツドルウム



七日)

四苦八苦、人生の航路には、如何なる人でも苦といふものはあるべけれど、無人の境ゆく船路の無聊の苦ほど堪へがたきものはあらざるべし。娛樂時間後は、いやがおうでも、沈黙を守らなくてはならず。この間に於ては、お馴染の臥床に、横はるより外はなし。然し睡眠も度を過せば、なかく容易には險は出會せず、無止轉燭を點す、いざ讀みかけの栗栗毛でも讀まん哉。(明治四十五年二月廿

其四十八 再望文明地域

生還を期せざる身、瓦全再び永らえて、文明の地域を望む、何等の快ぞ!

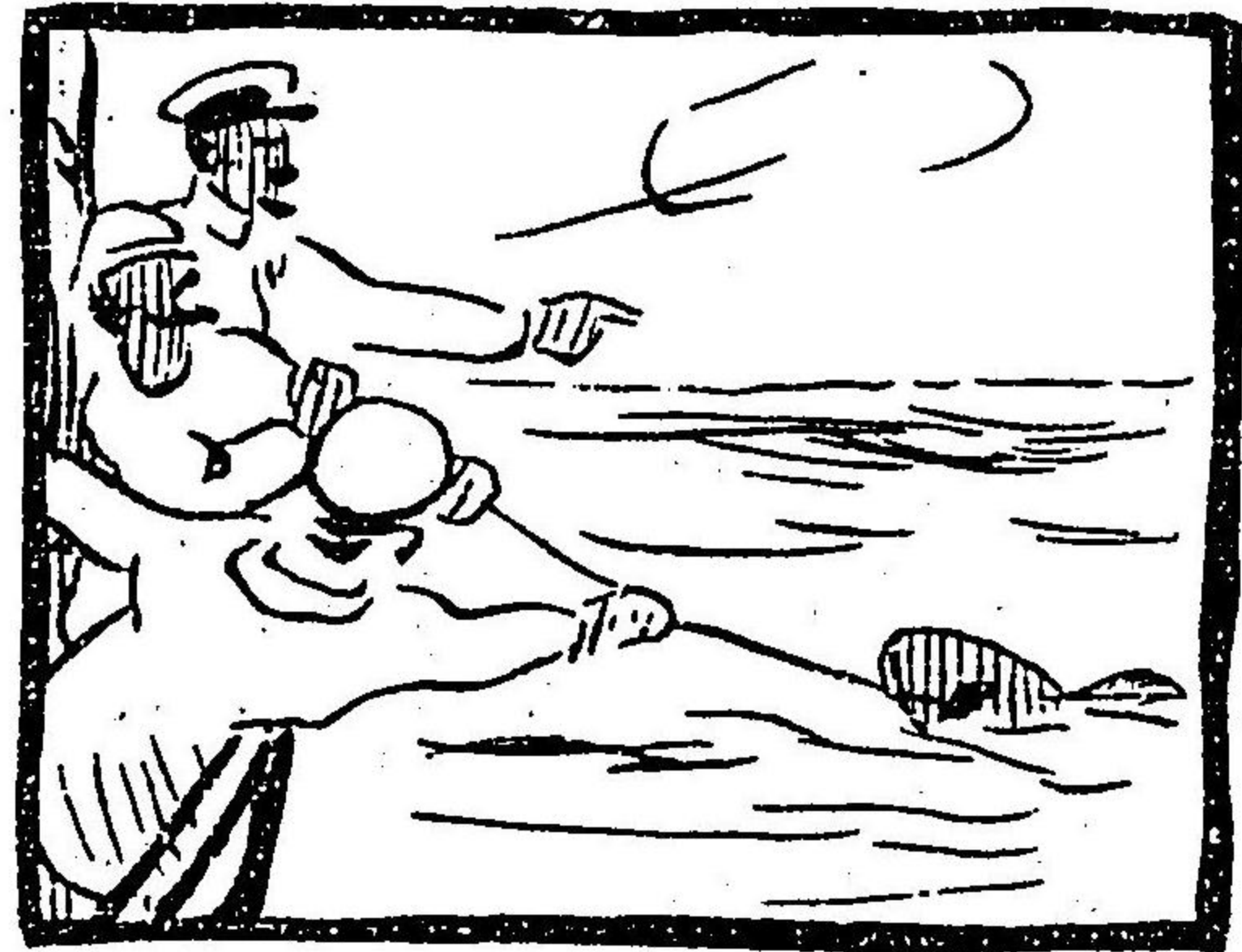
人世と離れたる別世界、而も滿目悉く、冷、又凍、人の心をして、又氷雪の如く冷却せしむ。

此時此身、突如として、青山緑野、炊煙棚引く、温かきホーム、造られたる樂境の限界に入る。冷えたる血は漸く熱し、凍えたる心は將に溶けむとす。人情といふものの、眞の蘊奥を極むるは正にこれこの時

(明治四十四年三月十七日)



其四十九 鱒退治



(明治四十五年五月廿日)

「ヤア、メたく、ソラ曳けーソラ曳けー」繩の端には、
 氣味のわるき大鱒、遁走せんと切にもだえつゝ、相近
 づく。
 南洋の熱潮を荒れまわしたる大鱒公も、日本男兒の
 奇策にかゝつて、甲板上に曳き揚げらるゝ間のわる
 さ。
 久しぶりの鱒料理の酔味増あへ、今宵は一杯夕食が
 過ごされるわい」もう誰やら喉をならしつゝあり。

其五十 なづかしや祖國の鳥影

ふるさとの鳥と見るだに

うれしきを父よ母よと

たが名付けしむ

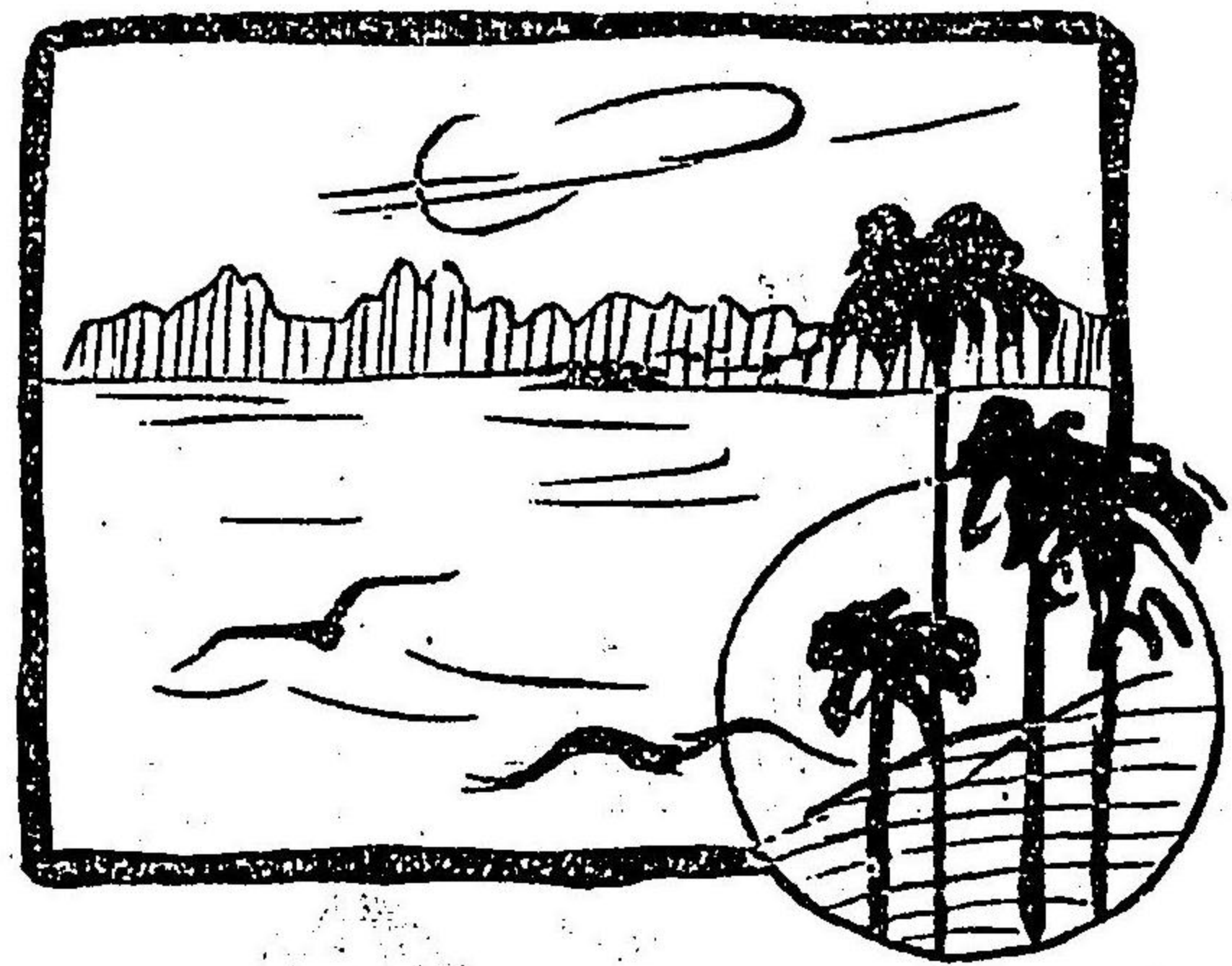
指をりかぞへて、鶴首待ちに待ちたる、小笠原群

島は、我等の眼界に其姿を顯しぬ。

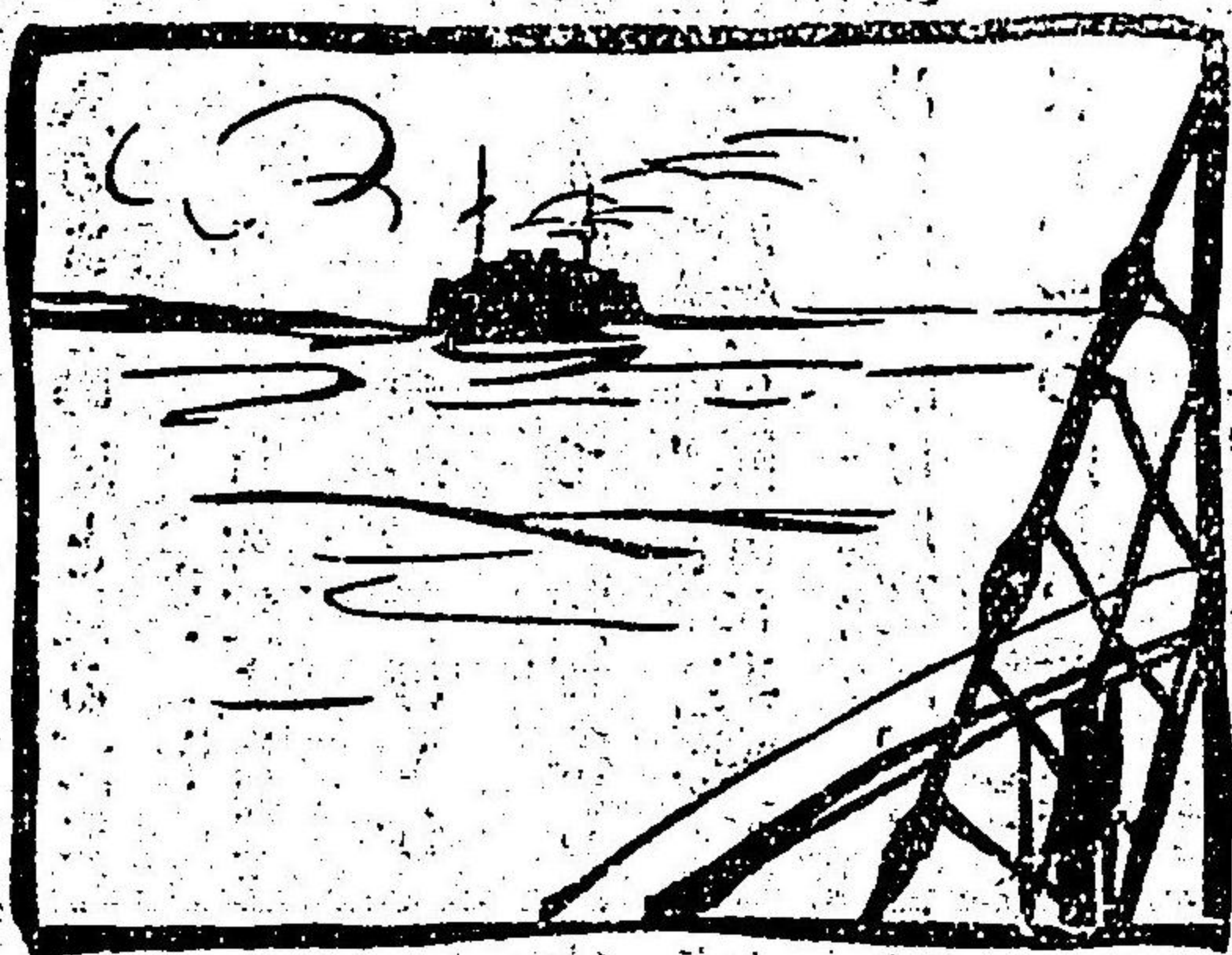
初め見たるは母島列島、尋で父島列島を顯れ出づ。

うれし、なづかし、萬感交々起る。ア、祖母の鳥

山よ(明治四十五年六月三日)



其五十一 堂々たる雄姿



船は館山を出で、横濱に向ひ將に觀音崎を廻らんとす。この時一隻の丸艦波を蹴つて近づく、こはこれ戦艦「くらま」なり。

一時想ひ此す一昨年の首途の夕横濱港外に軍艦津輕に壯快なる驢の辭を受けたるを。今日の歸航に再び雄鎮の歡呼に迎へらる、今昔の感更にく、深し。

(明治四十五年六月十九日)

「終日記終」

大氷山のあもかげ



後編

第一章 予が脱隊迄の経路

一 横濱着の予

明治四十五年六月十九日、三萬湮の航程を蹴破た、開南丸の横濱埠頭に着すると同時に、予は決然として、本船を降りた。

昨夜館山に泊した時から、無念の感想に打たれ、輕薄なる人情の、氷餅よりも尙脆きを悟つては、横濱埠頭、同情と偽善とを混亂して強呼された、折からの歡迎の叫びも、予の鼓膜には何等の印象をも與へぬ。吾人は須く現代に超絶せざるべからずと、真に然り、人間は超絶に限る。此時に於ける予の心裡に、清涼劑を服した時の口中と同様、光風霽月の感があつたのである。

此夜我等の一行は、後援會からの慰勞會を横濱西村旅館に於て開催され、打連れ
て列席したが、予丈は一人、丁未俱樂部の有志寺田、栗山、加藤、猪野毛、都筑
の五君から擁せられて、別に伊藤旅館に夕餐を認めただ。この慰勞會場で、後援
會の幹事諸氏に、直接意見を吐く事は出来なかつたが、前記の丁未俱樂部の諸兄を
通じて、予の意の存する處をば傳へたが、先ずれば人を制すとかや、時は既に遅し、
翌朝の各新聞紙を見ると、此の夜予は、探檢隊から除名せられたとか、排斥せられ
たとかいふ記事が、三四の紙上に掲載されてあつた。これは大變矛盾した事である。
丁未俱樂部諸子と予との間に、好意的に打合せた事とは、大なる相違した事實であ
る、けしからん事である。

始め丁未俱樂部の意見では、曩に予が、ウエリントンより、故國の同情者に向つ
て通信した一片が、不圖も、本年五月十三日の時事新報に轉載されたので（次の記

事参照の事）かくの如き予の意見では、予が歸朝して公會の席に出たならば、どん
な態度に出るかも知れぬ、といふので、さては倉卒で、予を横濱埠頭に擁したので
ある。そして予をして、道徳上の制裁によつて、一言半句なからしめんとしたので
ある。

南極探檢隊員に内訌あり

(明治四十五年五月十三日時事新報の記事)

南極探檢隊長白瀬氏以下数名が、十二日長崎に着したる事は、別項記載の如くなるが、開南丸は隊長
に連れて、四月二日ウエリントンを出發し、六月上旬には品川灣に入港する豫定にて、多田祕書も同
船に居残り居り、四月一日ウエリントン發にて同氏の書翰某所に送したるが、文中隊員が白瀬隊長に
對し快よしとせざるものがあるが如し。今ま多田氏書翰の全文を左に記すべし。

小生の卑見一斑

(一)探檢隊の行動 今回の行動は、一は武田氏の立案に候、生は諾威隊の上陸地附

近に上陸することは大に反對せし處に候、又武田氏の立案がデヒット教授の意見に従ふと云ふ事も反對の一人に候ひしも、隊長の盲従に無止如斯相成候。

(二)隊長は更に探檢事業に對し全然誠意なき事 (イ)糧問題、被服問題、に於ける計畫中に隊長の誠意無かりしは云はずもがな、今回の事を爰に證明なすに、初め突進隊は約一ヶ月間を往復の日數に使ふと豫定しながら、其實行は往復十二日間に止めたる事。(ロ)二月四日ウエルスベイを去るや、其期早きに失す事、此は武田氏等が此附近詳細の調査をせんと述べし事すら、採用せずして愴惶此灣を出でたる事。(ハ)ウエルスベイを去るに臨み、最早不用なりとて犬群二十餘頭を、生きながら殘留(而も何等食料もなき處に)したる事は、隊長が無情冷酷なる、平素の性格を證明するに足る事。(ニ)二月四日日本船に乗り移りて歸航するや、間も無く最早豫定したるアドレー岬附近に上陸し、動物礦物採集の目的を取消し(中

止か)尙一ヶ月に近き探檢の餘日あるにも不拘、斷然今期の探檢終了したる旨命令を下し、平素巧言令色阿諛を事とする者すら、尙其事に反對して諫言せしも拒んで納れず、其爰に出でたるは、ウエルスベイ頭に上陸し、氷雪上を突進の際、腰を抜したるか、將た一部の探檢に成功したるものと自惚れたる爲めか、兎に角非常識にして、且此事業に全然誠意なきものたる事明なり。(ホ)植林頼に歸京の節、後援會に打電するにも、隊長等が定期船に乗る爲めの金員を送られん爲め、心配する程には衰弱もせぬ隊員を衰弱したりと稱し、多額の送金を促したる事。(右は隊長自ら隊員に公言せり)且つ後援會より、尤もなる電命ありしも尙ほ十分の返電をも發せず、シドニーに往航をのみ急ぎて、徒らに不必要なる處に金員を浪費し、且つヤング領事が、一旦拒絕せられたるにも不拘、強ひて一千餘圓を借金したる事、此際我等は外國人よりの借金が悪しとて口を極めて諫めたり。(へ)

眞實の病氣にて送還さるゝ安田木工の如き、此地よりシドニー迄の定期船に、支那人労働者の便乗する、極下底の三等室に入れ、自分等は健康な身にて、一等や二等に悠々と乗り込みし事。是れは観るもの聞くもの悲憤せざるはなし。(ト)ウエリントンにて、石炭四十噸を購入すべき處を、僅かに二十噸に減じ、船員缺員の際、村松の如き海上殊に機關部に職を執りし經驗ある人物を、自分の勝手の爲めに伴ひ行きしは、全くアトは野となれ山となれ主義なりと思ふ。(チ)自分の伴ひ行くものは、多く同穴狐狸的人物自分に利益なるものゝみを以てせり、殘れる廿餘名の、悲憤せる一行は歸還の節黙せざるべし。(リ)隊長の歸還を發表して、隊員に命達したる時は、明かに後援會不信用に付、後援會と争ふつもり故に、歸朝が必要なりと云ひ、又歸る日には、隊員の室まで來りて、前言は取消すと云ふ、何かが何やら不得要領、我等は隊長の精神状態まで疑ふ處なり。

(三)池田氏の無能怠慢 生は隊長以外一行より、池田氏を伴ひ來りたりとて、大に不明を怨まれたる程、池田氏は何もなさず、熊野丸以來、池田氏の成したる事は、睡眠と飲食の外、恐らく池田氏自身の日誌すら、完全には記入して無し、氷上上陸の調査は素より、沿岸隊の行動中も、支隊長として船長と謀るにも、多く船長に勝手のみされ、一の定見もなく、爲めに決死事に當りし隊員の努力も、十分の光輝を發揮するに由なし、一言以て評すれば池田氏は、探検隊に名譽を賣る爲めに、月俸を食する無めにのみ、加入したるものと信ず、池田氏には學者の資格なく、隊員たる資格もなし、論より證據、池田氏の辯明を聞かれても明かならん、萬一池田氏にして、喋々する處あらば、そは決死事に當りし隊員補助に力めし船員の努力を盗むものと存する、無能學士の稱號を、或る隊員は池田氏に冠せるも、蓋し當然と思ふ處なり、以上の外、生等の不平を列記すれば、尙ほ數多の例證有

之候へ共、そは歸朝の際申上べく候、兎に角一度天下に叫號したる、生等の今後
の善後策は如何にして善きや苦む處に御座候。』

予は横濱に着くまで、前記予の手紙の内容が、時事新報に出て居る事は、知らな
かつたが、併し某氏から館山へ通信された略報で、後援會 側及、白瀬隊長等が、如
何に予を遇せんとするか位は、豫想してしまつたのであつた。

始め丁未俱樂部と會合した時も、彼等が口を切らぬ間に、予から「横濱着と共に
予は本隊から脱したい、今回の如きやり方では、予は歓迎など受くべき我々の立場
ではないと思ふ、又これから報告などするに當つても、徒らに大言壯語する人の仲
間に居りたくないから御免を被る、予はこれから直ちに、幽邃な處に遁れて、自ら
見聞した記録の完成に従事し、聊か秃筆を呵して出來上つた報告書を纏めて見たい。
予丈は徒らに、馬鹿騒ぎの幕に入るのは心苦しいから」と述べた。これは恰かも

先方に於ても、予に要求せんと欲した壺であつたらしい。そこで尙予に一步其態度
を進めて、縱令一度東京に歸つても、徳義上探檢隊が解散の運びに就く迄、不平の
公表をせずに、成るべく沈黙の徳義を守つて呉れとの事であつた。そして予にして、
沈黙するならば、後援會や隊からしても、予に對する非難の聲のないやうに盡すか
らといふ事であつた。予は此時には、六月十三日の萬朝報や毎日新聞に、「多田を放
逐した」とか「多田の妄狀」とかいふ記事の掲げられて、あつた事を知らなかつた
ので、先方に左程に平和的の行動を好むなら、予に於て獨り亂暴を以て挑むわけ
はない、よろしい予は東京に歸つても、一切來客は斷つといふ、暫く世と没交渉に
ならう。

悠々自適樂山川、近來學得竹林賢、滿身冷血如氷雪、方知名利似浮煙。

この詩は予が十年前に、感ずる所あつて作つた拙什だが、移して以て今日の予に

もこの詩を適用せんと、超然として脱俗した態度を、男らしく取るべく告げたのである。ソレで若し他から予の事を聞くものがあつたなら、予は着後同時病氣になつて、直ちに静養地に赴いたと、いふ事にしようとして譲歩したのである。後援會では餘程予を恐れたものらしい。白瀬中尉がこの日横濱迄出迎へなくてはならぬのに、來なかつたのも、一つは予を憚つたらしいのである。

この夜予が頗る調利的に出たのは、恐らく氣味が悪い位に後援會では、思ふた事であらう。

かくて予は約束を勵行すべく、翌朝未明一先づ本船に引返し、自分の手荷物を取り纏めて、午前八時いよ／＼久しく起き臥した、開南丸の臥床に最後の敬意を止めて、折から在船した、三井所、西川、渡邊、吉野、各隊員及酒井運轉士以下の各船員と別杯を交はして最後の握手を交換した。六百有餘の長日月、櫛風沐雨、辛酸と快樂

とを共にしたる一行と訣別するに當つては、流石の予も幾多の感想が湧出する。

されど翻然として、再び超脱したる予に歸つて、本船を辭し、獨端艇の客となつて、制期によりて、手荷物の検査を税關に受けた、無關係な税關吏某氏すら、予が飄然として距るのに就いては、一方ならず驚嘆をしたらしかつた。

かくて午前十時發の列車で横濱を辭し東京の人となつたのである。

二 脱隊の動機

なべて結果には原因がある。終末には動機がある。予は爰に予が脱隊したるに至つた、事情を詳述する事は敢て好まぬが、徒らに予を嫉視するの餘り、予をして浮ぶ瀬もない迄に、蹴落さんとする人あるに至つては、超然主義の予にも、何時迄も沈黙するわけに行かぬ。況んや年齒尙三十に満たざる予、前途未だ幾多の春秋に富

む、六尺の壯軀は聊か常人よりも秀でたるを看る我れ、ソツ無藏作に葬られてしまつては、肥満したる予の双腕が承知せぬ、鐵の如き予が一寸の膽玉が承知せぬ。

元來愚痴をこぼすことを好まぬ予も、こゝに、一筆を動かさなくてはならぬのである。がこの動機は、其根底が頗る深い、一朝一夕ではないのである。

全體最初白瀬中尉は、予と初對面の時、頼朝對義經の例まで引いて、喜悅したのであるが、事實予は白瀬中尉の期待以上に盡したつもりである。其創業より出發に至るの間、誠心誠意、白瀬中尉に盡した予の努力は、冷酷無情なる中尉もこれを否認する事は出来まいと思ふ。

出發迄の間に於ても、白瀬氏は、或は朝日新聞社と意見を衝突し、或は村上幹事と争ひ、部下を猥りに罰して多くの怨恨を買ひ、失態百出、幾多か事業の進歩を妨げた數度の苦境に處せる予の東奔西走は、幸にして其甲斐あつて芽出度出發の日を

得たのである。

この出發前にも、兩三度白瀬氏と衝突した事があつた。一は用船問題、一は被服問題、一は糧食の問題であつた。

白瀬氏は、最初の計畫が、甚だ縮少主義で且粗雑極つたもの故、經費の計上も四萬圓の少額であつたが、事實其精算をして見ると、五萬圓でも六萬圓でもなかつた。追付かぬ、約十萬圓なくては出帆は六ヶ敷いといふ事になつた。十幾ヶ年南極探檢に志したといふ人にしては、あまりに無謀なる豫算であつたのだ、それで用船の問題も、從て經費の點から縮少主義を取らなくてはならなくなつた。大隈伯邸の幹部會議で、予は用船は三百五十噸以上でなくては、完美せる準備は出来ぬといふ事を主張した。この時白瀬、村上兩氏は二百噸以内でよいといふ縮少主義の主張家であつた。如何様二百噸以内の船でも、南極へ往復出来ぬことはなかつた。併し船の小

さい爲めに及ばした不便は、延て成績上にも大打撃となつたのは事實である。此用船問題で討議の節にも予の吐た言が―隊長や後援會幹事を無視したといふ嘲を人傳に聞いた事がある。

被服問題に於ける衝突は、隊員服を製する時、予は今少し服地をよくしたいと主張し、白瀬氏は、例の安物買主義で、陸軍の古服でもよいとの説であつたが、これは折衷して、中等の被服が出来た。然るに學術部員側其他参考とすべき説によつて、寐囊(毛皮でこしらへた状袋みたような寐具)の必要を感じた。製造日時の関係から、予は白瀬氏が九州地方遊説で留守中、獨斷で注文してしまつた。そして必要のものだから、注文したといふ事を、九州から歸つて來た、白瀬氏に話すと、先生大の立腹で、「そんな越權な事をして貰つては困る、如何に必要なものでも、隊長を差置いての注文は以ての外だ、況んや北極圏内で越年した事のある予が、必要と認め

ぬものを、注文する必要はない、早速服屋に製造方を中止する」と大權幕で自ら服屋に製造方を斷はつたりなどしたのである、併しもう此時には、半分以上出來上つて居たので、予は後援會に泣き付いて、白瀬氏を説服して貰ひ、ヤットの事で寐囊を携行するようになった。これも先生の機嫌をそねた一原因だと思ふた、ところが、この寐囊の結果はどうであるか、これあつた爲めに突進隊が氷上の露營も存外樂に凌がれたのである、寐囊なくては、突進は出來ぬといふてもよい位なものである、冰山雪野を突進する探檢家に恐らく寐囊不必要を主張するものは一人もあるまいと思ふ、今度は先生も以前の偏見も忘れられしく、寐囊に限ると、大の寐囊依頼家となつたのも噴飯至極である。先生の寐囊奇談といふのもあるが、これはこれにて素破抜かぬ。

次の糧食問題、これは少しいふに憚る事情があるから予は詳言すまい、事人命問

題にかゝわる事だから、たゞ讀者の推察に任せる、たゞ、先生は自分さへよくば、他は顧みぬといふ本性をこの糧食問題に顯したといふに止めておく。隊長が多くの部下に信用を零にしたのは、この糧食問題に起因する事が多いらしい。これでも予は極力大に自説を主張した。白瀬氏が「多田君は隊の爲め隊の爲めといふても、隊長を無視しては、隊全體の爲めにならぬ」との小言が度々出たのも、必竟予が白瀬氏個人そのものに對し、利益なき態度に出たからであらう。

事實予は出發前には、後援會からよりも、隊員からよりも、隊長以上に信任されて居るかも知れぬ。これは自惚でも何でもないのである。

ところが出發後の予は如何、江戸の仇は長崎主義で、今迄隊長の意見に反對した事が、動機となつて、イジメられたの何のて、全くお話しにならぬ底のものであつた。

三 新西蘭迄の予

開南丸に乗船するに當り、隊員船員とも幹部室と、下級員室との區別があつた。そして各自夫れ々の部屋が決めてあつた。がどういふわけか予丈は部屋の割當てに預からなかつた。これは倉卒に準備したのにもよるならんが、これに付けても予を如何に遇せんとしたかゝわかる。

予は船尾の幹部室に、起臥する身とはなつたが、予には部屋といふものがない、そこで予は、止むを得ず、腰掛けの上に起臥することとなつた。白瀬氏は船長の方へ交渉して、部屋を急造することとなつたが、大將の冷淡の徴候がほのみえては、他の人も餘り厚遇して呉れぬ。明後日の紺屋的に延期されて、終には請求するにも張合がなくなつて、新西蘭迄着する七十日餘りの間、予は臥床なしに暮してしまつ

た。「居候梯子の下が居り場なり」とは川柳の名句であるが、予は全く屏南丸の居候扱にされて、丁度船尾室の梯子段の下の腰掛の上に、形ばかりの臥床に起臥して送つたのである。白瀬氏はそれでも一向平氣、ア、これ士を遇する道であらうか、もし予にして漢淮跨下の堪忍なかりせば、無事ではすまぬ仕向けであつたのだ。かくも不快な日を送つて居る内、更に予は一大迫害を受けた。それは愛猫玉太郎に起因することである、由來玉太郎尻くせがわるく度々舵機室に脱糞するので、船員からの受けがよくない。殊に船長は大の猫嫌ひである。白瀬氏は予が百方猫をかばうのは、徒に船員の怒りを買ふに止まると、遂に「夫れ程猫が可愛いくば、新西蘭から猫を連れて歸つて呉れ、これ無止涙を揮つて馬糞を切るのだ」とのことを一通の紙片に記して示し、武田君を介して予に下船を迫つて來た。實に馬鹿くしい話であるが、白瀬氏の考へでは、斯くの如き一些事を捉へて予と絶縁しようと思ひ

たのである。是れより先、白瀬氏は三井所君を秘書に任命して應ては予の秘書たるを辭せしめん策を取つたのである。予は固より秘書とか何とかいふ、腰巾着的名義は好まぬ、これは意に介せなかつたが、猫を連れて中途から下船せよとの冷酷なる宣言には、尠なからず憤慨したのである。これでは前途の事が案じられるから、予は命令通り下船する」といふ事を答へた處が、武田君や船長が中に這入つて、調和を試みて先づ双方の妥協が出来たが、予はこの事あつてから憤怒の餘、愛猫玉公を怒濤の中に抛棄して葬つてしまつた。日記に玉公が海中に落ちたとしてあるのは、この折の出来事であるのだ。

かく次第く予と白瀬氏の間には、一大隔壁が出来てしまつた。こうなつては予はたゞ幹部といふ名義計りである。

新西蘭迄の間でも、予はいろくの侮辱を受けた、予はこの以上白瀬氏の不徳を

記さないけれど、以て至班を推知されん事を望むのだ。

四 シドニー迄の船内不和

嘗て軍隊に在つた白瀬氏は、其習慣と見えて、命令を亂發することを好む癖がある。法律多くして國亂るとか、隊員の一舉手一投足にも、始終干渉を試みることに好きな、白瀬氏の爲め、部下の不平不満は、始終破裂しては、隊長對隊員間の調和が面白くない、予は此間に在つて始終油となつて、兩者の間を圓滿ならしめんことに力めた。自然白瀬氏に向つて苦言を呈し諫めることがある。良薬は口に苦く、諫言は耳に煩さい。左もなくても、好感情を持たれぬ予が、諫言だては、到底先生の肺腑を貫くことは出来ぬ。が正義はいつも敵はなく、頑迷な人も若干は、予の誠意が理解された事があつた。

かくて、面白からぬ航海にも、これも探検事業に従事するものゝうき勤めだと、自ら氣を勵まして、其日々を送つて居たが、今度は船長及丹野運轉士の、專横的行動に就て、我々隊員として、黙過出來の事が出來た。

元來丹野といふ男は、長らく米國船に乗つた事のある男で、馬鹿に權利義務を計り主張して、個人主義家である。従て部下及隊員間との折合ひがよくない。然るにこれを野村船長がよく制しきらぬ。白瀬氏もまた制す能はぬ處から、丹野先生馬鹿に威張る。益上下の軒輊が甚だしくなる。是に於て丹野の不徳は延いて船長の不徳となる。

遂にはしなくこゝに一騒動が持ち上つた。

それは、シドニー到着の際の事であつた。船長と丹野氏とのある手落ちから、隊員一同は大に憤慨して、遂に兩氏の排斥問題が持上つた。この時も、白瀬氏等の一

派からは、各隊員を予が煽動した如く、見込まるゝに至つた。が事實は十指の指す處、十目の見る處、其起因を同じくして、遂に排斥問題の決議とはなつたのである。隊員が一致して、事此に出たのと、白瀬氏も素より野村丹野兩氏に快からぬ事ありとて、却て兩氏排斥には同意した程であつた。尙隊長にも之より排斥の意見があつたと、明言した位であつた。

予が、俄かに野村船長と共に、歸朝することとなつたのも、一はこの問題を提げたからであつた。

然し豹變的の白瀬氏には、野村丹野兩氏排斥問題も、いつしか鋒先が一變して來た。更に再轉して、今度は予を絶対に排斥するといふ、反比例的の現象が生じたのである。

かういふような非常識の人にかゝつては、人道も何もあつたものではない。條理

井然などいふ事は藥にしたくも望まれぬわけである。

五 歸朝後の予が排斥さるゝ動機

野村船長と予とは、昨年六月中旬歸朝した、兩人の任務は、初航海報告、再舉準備といふことであつた。予だけは此外別に、前記の野村丹野排斥の問題を提げて歸つたのである。

ところが、歸朝後大隈伯邸で、幹事會議の際、大隈伯は、白瀬氏の報告書を見、又予の報告を聞いた上、目下如此所置をなすべき折でない、内証は斷然止めなくてはならぬ。と懇々他の幹事と共に説諭されて、遂に、野村船長も丹野連轉士も留任といふ事になつた。この頃から、後援會の連中は、予が徒に事を好む悪者のように、思ふ人も出來たらしい。其後予が主張する意見は、理あることも、十分採用されぬ

ようになつた。

又後援會幹事諸氏の内にも、多くは義侠的に此事に賛助する人々であるが、中には私利私慾の爲めに、裏面でよい汁を吸はふとする人もあつた。この人々と予と大に意見を異にした二三の問題があつた。これも予が不利の位置に立つ原因となつた。

又、予にも多少の缺點があつた。これは予の天性ともいふてよい習慣であるから致し方もないが、予は學生時代から品行が方正でない、従て酒色の方も十人並以上に慾が多いかも知らぬ、が予にも常識があるから、敢て探檢隊員たるの人格迄破るような行動はしなかつたつもりである。又歸朝の際も自己が盡すべき勤めは十分に盡して、其餘暇で命の洗濯を少々やつた位いで、萬朝や毎夕にあつたように、徒らに亂行をのみやりに、歸朝したように解せられては、たまつたものでない。

予は、後援會の方から忠告を受けた事があつたが、其時もこういふた。ソソナに品行々々と、やかましく言はれるが、我々一行の品行とか人格とかいふものに就きて、餘りやかましく云はれると、我々の一行は皆仙人君子計りではない、無論こんな冒険に行くものに、徒に世間の毀譽褒貶を氣にするような事では、到底加盟する事が出来るものではない。其段は、幾分か寛大に見て貰はねば困る」といふた事がある、事實そうである。そう一行の人格問題を細かに檢べる事となると、白瀬隊長その人、後援會員その人等にも、大きな口は利かれぬことと思ふ、人を非をいふものは己の非を顯す、予は此處へは、くたくしく同胞の耻になるような事は記さぬが、聞きたい人があらば、何時でも説明する。但しこれは、予が自分の事を悪くいわれたから腹立まされに、他を誣告するのではない。

予は將來、君子として世に立たうとは思はぬ。倫理學の教師には向かぬ予である。

品行不良で、予の名譽を傷けられたとて、品行方正なもの以上の、大功勳を國君に捧げれば、他日或は大成は細瑾を顧みずといふ項にはまるかも知れぬ。況んや目下の大臣宰相にも、酒色が嫌ひな人計りもあるまいと思ふ。

兎に角、予が磊落な性質で又酒色を好むといふ點は、比較的品行方正な、後援會諸氏から忌まれたらしい。又ある一部の人は、これを予に被らすべき好餌として、隊員の品位を汚したとか、風上に置けぬ奴であるとか、所謂あらをさがしては、予の排斥の種にしたのである。

是に於てか、最初源義經に比較された予は、其運命も義經同様の悲運とはなつた。西海に平氏を全滅して以來の義經は、もう頼朝に不用になつたと同様、白瀬氏にも後援會にも、漸次予の双腕に頼むものがなくなつたので、僅少な取るにも足らぬ事に大騒ぎして、シドニーの白瀬氏に打電送して、騒いだのであつた。人は八方

美人でないといふ九割の損があるものだ。

野村船長が、予より先だつ事一月、シドニーに向つたのも、予を排斥の準備であつた。野村氏がシドニーに到着した時には、予は池田田泉兩氏及補充犬と共に、祖國を出發して、長崎に寄港した時であつた。野村氏がシドニーの開南丸に歸つて、白瀬氏と面會するや、白瀬氏も今度は野村氏へ對して、予を歸隊させては、濟まぬと思ふたのか、又後援會から排斥の強制を受けたのか、野村氏着と同時に「多田隊員を免す」との飛電を大隈後援會長宛に打つた。これは轉じて長崎にある予に傳へられた。予はこの時も考へた「イツソこんな了見ならよしてしまふ、人を馬鹿にした次第である、南極探検は予の畢生の事業ではない。予の活歩する天地は幾何でもある」と一時は例のムカ腹を立て、見たが、又考へた、予が輕々しくこゝで歸京すると、又世間の物議を醸す、そうになると、予も黙して居るわけには行かず、いろく

内状を打明けると、またその緒にも着かぬ事業にケチを入れるようになる、それでは、國家の體面上甚だよくない。何隊長や船長が、如何に子を遇してもかまはぬ、予に一行の同士がある。今逡巡する場合ではない」と、決然として子は往航に決し不愉快な日を、熊野丸船上に送り暮して、シドニーに向つたのである。熊野丸にあつても、子は日々快々として樂します、其憂鬱煩悶を放つためには、時にウ井スキの一杯も過ごして、平然たる態度を粧ふた事もある、随分酔に乗じて外人の船客とダンスをした事もある。熊野丸上で予が失態を演じたとか、何とか新聞に出て居たのも畢竟こんな事を、針小棒大的に誣告したのと思はれる。

六 シドニー着後の大排斥

かくの如く、一方は白瀬隊長と野村船長とより悪まれ、一方は後援會より忌まれ

た予は、シドニーに着しても、白瀬氏から、一言の慰勞の言もなく、丸で仇敵の中に軍使に行つたよりもひどい扱ひ方であつた。然しかねて子の心裏を知悉して居る我一行は、何くれと予に同情して呉れるので、予は却て感涙にむせびつゝ、熊野丸から下船した。

到着の當日、義理人情を知つた人なら、一杯の勞をねぎらふ酒でも、配せらるゝものを、冷酷極まる、白瀬氏には、一片の同情もなく、即日予に、脱隊の勸告をしたのである、而も隊員一同團座の予が報告會の席ではある。これには、一行の同志も黙して居ず、いろ／＼予の辯護に力めて、中には身を以て予に代らんとまで、追つたものもあつた。其結果予は日本人會の幹事諸氏にも相談して、其取計ひによりどんな屈辱を受けても、初志通り南極の氷野を跋渉するといふ事になつて、予から予の兼て下げる事の嫌ひな頭を下げて、再び隊員となるといふ事になつた。もし此

時たつて白瀬氏が、予の同行を拒絶したなら、或は開南丸はシドニーからの出發が、後れるような事があつたかも知れぬ。そは予が下船すれば、共に一袂を拂ふといふた同志もあつたからだ、此處でも予が屈辱に甘じて、無事に出帆するようにしたのは、白瀬氏たるものも少しは願ひる處がなくてはならぬのだ。

併し、同行と極まつてからは、予は幹部といふ肩書は沒せられて、下級隊員の待遇を受けることとなつた。船室も、アイヌ等と枕を並べる所にやられた。予は始めから優遇をば期せぬ、困難は汝を玉にすとは、古人の箴言ではない事を感じて、自ら慰藉しつゝ、暮したのである。

兎に角、シドニーでも、白瀬氏の予の排斥は、其目的を達する能はず、予の他迄も南極行の素志を貫徹するゝようになつたのである。

丹野運轉士は、予が同行する事が、未決中に、病と稱して下船してしまつた。そ

れは萬一丹野氏にして、再征する事あらば、船員側で、由々しき大事が持上るからであつた。是に於いて、後援會側では、否認した丹野氏排斥問題も、事實上解決する事が出来て、船中の平和が保たれるに餘程都合よくなつたのである。

予が再征することになり、丹野氏が下船するようになったのも、畢竟此事業に至誠あるのと否とによつて、自然に天の解決を興へたものと思はれる。ア、天は自己を助くものを祐けるとか、宜なり〜。

七 極地探檢に關する予の反對意見

シドニー出帆後の、予の冷遇は、以上の記事に依て、讀者も推測せらるゝであらうが、併し予は却て幸福であつた、船尾士官室で、意氣投合せぬ人々と、互に相反目しつゝ、暮すよりは、船首の下級部員室で、何遠慮なく快談愉快、毎日〜吞氣に

日を送られるので、白瀬氏が執つた冷遇策も何の功もなかつた。殊に各隊員船員は、予の境遇に大に同情して、或は圍碁の相手となり、或は將棋、花がるた、或は尺八の合奏などに、朝夕慰藉して呉れる有がたさ、予は全くこの同情あるために、無事な軀を提げて歸國する事を得たといふてもいい位である。

閑話休題今回の探檢の行動方に就ても、予は可成的成功に近い行動を取りたいと、いろ／＼畫策する處があつたが、シドニー出帆以來、下級部員の席に貶せられた予としては、直接隊長に申出る事は出来ず、武田君などにいろ／＼忠告もして見たが、元來この事業に熱誠のない輩には、予等の誠意が貫徹すべくもない。諸威の隊が停船して居る附近に、投錨して上陸し、徒らに他隊が跋渉した跡を、探檢して何の價値があるか、其行動の如きも、不秩序不體裁極まる結果に終つたのは、返す／＼も遺憾千萬な所である。

若し予をして、此統率者たらしめば、短日月の探檢とせば、エドワード七世州以東の、前人未踏破地に突進し、沿岸隊突進隊共に、未發見の氷山雲野、海岸の探査を行ひ、以て海陸共に、二ヶ月を極力従事することにしたら、先づは國民に申譯的の報告も出来ることと思ふ。

今一歩進むれば、一ケ年の冬營である、予はその爲めに、防寒被服を準備し、副食物を用意して、シドニーに向つたのである、隊長側幹部の意見さえ一致せば、下級隊員連は、何れも決死勇敢の者共である、冬營すれば後援會の命令には背くかも知れぬが、死を賭してやる以上、萬一迎への船が来なくとも、初志通りやるのが、日本男兒の意氣である。又冬營して迄成功を期すといふ、覺悟を示さば、後援會も國民も、我等を見殺しにする事は出来ぬ、さうなると第一政府が責任があるようになる。これらが兵法に所謂背水の陣である。極端な事業には、極端な決心がなくては

は駄目だ、予の再舉二ヶ年説は、内後援會の持て餘す處となり、外隊長等の意見と合せず、大夏の將に倒れんとするや、一木の能く支ふる能はざると同様、我決死の事業が、初は脱兎の如く、終は處女に似たるものあるに至り、「山師だつた」と世間から嗤笑さるゝに終らんとするもの、此項を記すだも口惜しき至り、ア、これもかへらぬ線言だが、一人なりと、かゝる意見を持つて居つたと、探檢的素養のある異邦の人に知らしてやりたいのである。

八 新西蘭着前に予から脱隊を申込みし事實

本年二月四日、愴惶ウエルズ灣を遁げ出して後、豫定したアドレー岬附近へでも、寄航して、尙一ヶ月の餘裕を、奮闘努力したならば、十餘萬圓の徒費にもならず、幾多の標本が得られて、同情者の厚誼に報ゆる事の一端にもなるのだが、非常識な

る統率者は、斷然として探檢終了など、命令を嚴達し、矢鱈に成功したと、意張る處、正に本氣の沙汰にあらぬのである。

予はかゝる人物の部下たる事、かゝる人物の下に今後附屬するといふ事が、何だか恐ろしいような感じがして來たので、本船の新西蘭に到着する前日、予は、白瀬氏に向つて、植林屯入港と同時に、予が脱隊を許されんことを申し出でた。この時の予の意志は頗る強かつたが、一時遁辭にうまい、白瀬氏は、百方子を口説いて、從來の冷遇に出たのを予に謝し、且つ探檢誌の編輯には、大に予に待つ處があるから、今日より予を、日誌整理委員でふ名儀の下に、優遇するから、是非留隊して呉れるようにとの事で、武田、三井所兩君等も、口を極めて懇諭する處があつたから、一先づ新西蘭で脱隊する事だけは、思ひ止まつたのであるが、新西蘭着後の隊長の行動が、あまり傍若無人的であるのに、大に憤慨し、且つ我等の苦諫にも、

些の顧る處がないので、遂に一片の申告書を、隊長の植林屯出發後に認めて祖國の後援會及同情者に送付するに至つたのである。

予が脱隊に至る経路は、概説すれば以上の如くである。歴史は繰返す。義経が院宣を請ふて、兄に刃を向けるに至つたのは、豈一人義経を不悌の士として葬るわけに行くまい、況んや事は世界的事業である、競争場裡に立つた日本探検隊の全部が、山師的腰折的の者であると、歐米の人士から目せらるゝのがつらい爲めに、予はこの章以後に血涙を揮ひつゝも、自己の意見を記すのである。大の蟲を助ける爲めに小の蟲を殺すといふ。早晚世界から非難の聲を被るべき今回の日本探検隊を、庇ふのがよいか、この探検隊員にも一個熱誠を置めた、悲憤の者があつたといふ事を叫ぶのも、あながち探検隊の不名譽になるまいと思ふ。況んや國家の體面に於ても、

予のこの叫びをなすのが不當ではあるまいと思ふ。否か？

第二章 南極探検の結果發表

六月二十二日後援會は、都下各新聞記者、通信社員等を集め、南極探検の結果報告を公表した。當日學術上の發表としては、學術部長たる武田輝太郎君の責任的報告があつた。

其翌日から東京朝日新聞を始め、其他全國各新聞は、其報告演説の速記録を逐日掲載することとなつた、今予は参考の爲め次に其全文を掲載することとした。

學術上の南極

南極探検 學術部長 武田輝太郎氏談

巖に白瀬中尉と共に歸期した武田學術部長は、其後大隈伯の注意に依り、全然學術部を獨立せしめ、

早稲田大學理工科の一室を研究室に宛て、徳永博士監督の下に研究中であるが、其結果を特に本紙に於て發表される事となつた。

▲研究したる科目 今回の南極探検中、學術部の研究した重なる項目は、主として南極の天測、地理、地質、礦物、氣象、磁氣、潮流、潮汐、雨水比重、同溫度、同重量、同鹽分、動物、測量に關する事項で、夫に關する諸般の設備を整へ、準備に於て萬一の疎漏なきを期したが、第一回の探検は御承知の如く失敗に終つて、南極に上陸するを得ず、第二回の探検に於て十一月十九日シドニーを發し、一月十六日初めて南緯七十八度半なるウエルズ灣に到着したのである。然るに出發前、後援會からの命令では、遅くとも二月廿日迄には再び開南丸へ乗船、歸國せよと云ふ事なので、其間僅に四十日足らずの短日月に過ぎない、當初吾々が南極に於ける學術

▲研究の二大目的 は目下各國探検隊、並に學者間の問題となつてゐる、南ビクトリア陸地と、キングエドワード第七世州が果して接續してゐる物であるか、何うか、又大氷塊生成の原理は如何と云ふ、此二問題を研究解決するにあつた。然し到底短日月の間に、一隊のみで漸次に研究する譯には行かないので、己むなく學術部を二分し、自分は村松、三井所と共に、ウエルズ灣から東南に向ひ、池田農學士は多田、四川、渡邊と共に、エドワード第七世州の山に登り、地質、土地の高さ、岩石、礦物採集及岩床の傾斜、走

向等を調査する事とした。此二隊の研究を終つて、後更に時間の餘裕があつたならば、南緯七十一度のアラ岬に立ち寄つて、スコット地理隊の屯在地附近に上陸し、三箇所から研究する豫定であつたが、不幸にして其處には寄港する事が出来なかつた。探検の日数は斯く僅々此卅餘日に過なかつたが、吾々の考へでは十分當初の目的を貫徹し得たと信じてゐる。即ち此

▲二大陸は接續せず と云ふ断案を發見し、其他諸般の研空を終つたので、ニキージーランドに歸ると、シドニー滞在中多大の援助と注意を與へられて居た、シドニー大學のデビッド教授に、其旨を報告した、然るに計らずも是より先に歸港したアムンドセン氏は、之と正反對の意見を發表して居たので、遂にローヤルソサイエティーに於て、同會會長を始め、デビッド教授、四印度水道局技師長等立會の上、此陸續きに非ざる事を諸般の方面から研究報告し、デビッド教授も種々質問し、約六時間に亘つて説明の後、デ氏は遂にア氏の説に比し、

▲日本探検隊の勝利 を宣し、直に其旨を倫敦の協會に打電された。此事は吾々に取つて非常に光榮とする所で、尙一々研究の結果は、ケンブリッヂ大學に報告し、各國探検隊の報告と比較研究を乞ふ筈となつてゐる。

南ビクトリア陸地、キングエドワード第七世州が接續して居ないと云ふ、我探検隊の發見が、何れ程重

大な價值があるかと云ふに、今や此接續と非接續の問題と、大氷堤生成の原理は南極の研究に關し、

▲世界學者の論戰 となつて居るのである、シヤックルトン南極探檢隊の學術部長デビッド博士は、濠洲の南極探檢隊長モーション氏の學術顧問となり、其の爲めに南極の地質圖を作り懸けた、廣く世界の學者の説を綜合して、其地圖に着手すると、此二大陸の接續せるか否か、疑問になつて來て、結局各學者の間に地質學上の種種の異論が生じて、結局何等の解決を下す能はず。其儘疑問として殘されて終つた。先般日本の探檢隊がシドニーに滞在中、デ博士も教授と自分の三人が一堂に會した時にも、矢張此問題に關して議論が起つた、其の時

▲デビット氏の演説 では何うも接續して居る様に思はれと云ふ話で、モウソン氏は其間には何等の山もなく、又陸地も續いて居ない様に思はれると云ひ、此時も其説が二派に分れて、何れとも決定せず、君の意見は何うだと云はれたが、自分は未だ何等實地に研究しないから、確な意見を述べる事は出来ないといひ、結局我が探檢隊が實地踏査の結果、何れとも其報告をする筈で、デ博士からも依頼されて、其研究を行つたのである。然るに前回にも述べたる如く、吾々の非接續説は遂にデ博士の承認する所となつたので、

▲學界の疑問を解決 地質學上に一の記録を作つたのである。今一つパヨマの生成に關しては、

トルガルスキー、フランス、ノルデンゲョルト、デビッド氏等、何れも種々な議論をしたが、是も未だ決定して居なかつたので、吾々が出發に際し、デ博士は自分に向つて今日氷の研究に關して、最も信用するに足るものはグリーンランド及アインランドの氷河の調査である、尤も是は二つとも北方の氷で、

▲氷は兩極で違ふ から十分に比較研究をする様にと注意され、特に其書物迄貸し與へられ、其變化特色をも顯微鏡的研究の上結果を報告して呉れる様にと云ふ事であつた、此問題は只其生成の解決を下すのみでなく、例へば北方の海流が年々違つて、漁業其他に重大な關係を及ぼすと同じく、南極に於ける此問題は又同時に人文に關係があるので、實に重要な問題なのである、探檢の結果は斯く二つの重要問題に解決を下すを得たので、學術探檢として先づ當初の目的を達し得たと信じて居る、されば種々なる學理上の問題から、此二點の説明を次に試みることにす。

▲大氷堤生成の原理

今回吾一行が発見した大アイスマリア生成の原理を述べるに先つて、先づ海氷の生成に就いて一言する

▲海水の生成に三種 ある、即ち淡水氷、氷河水、野氷で、淡水氷は大なる河が海に流れ込む處に張る處の氷で、西伯利亞のエニセイ、レナ等の河口附近に張るのなどが其一例で、氷の質は非常に緻密

に出来てゐるが、其代り極めて碎れ易い。氷河水は年々陸上に堆積してゐた氷が、七リ落ちて来たものである。第三は野氷で、此は南極に於けるアイスバリアの研究に關して、非常に必要な氷である。此野氷が水面上七寸以下の時には、非常に柔かく、恰も氷盤と同じ位の硬度で、其色も全然白色を呈して居ないのが、其特色の一つである。其上に年々氷が堆積すると、

▲遂に大氷壁を作るのである、御存知の如く北極地方には陸地も多く、島も澤山散在して居る。

爲め、従つて大氷堤は出来ないが、南極地方は非常に島や陸が少いから、容易に大氷堤が出来るので、今日では高きは水面三百尺以上に達し、其延長千二三百哩に及ぶさへある。即ち是等の大氷堤は野氷が基礎となつて、其上に年々氷が堆積する、然るに冬は雪が澤山降るので其厚さも多いが、夏は冬に比して積雪の重が少く蒸發が盛んなので、従つて其堆積量が少く且氷の質が緻密になるので、自然に層が出来ると、

▲從來からの學說に依ると、氷壁の上部の方は其層が厚く、下の方は壓力の爲めに其層が非常に薄くなると云つて居た、然るに吾が探検隊は上陸に際し、三百尺の大氷堤を切り開いて、道をつけた爲に、此層を非常によく實驗する事を得た、自分は是を年層と命名したが、研究の結果此年層は從來の學說に相違して、殆ど

▲平均じたる輪廓を現はして居た、即ち各層の間は約二寸五分から三寸五分位、夏季の氷積量

は約五分乃至二寸内外で、可成整然としてゐる事を發見した、さうして此大氷堤生成の原理に就いてドナルスキ―は氷塊より出来たと云ひ、デビット博士は、奥の山の方から氷河を押し流して来たものだと推説をなし、ホルテンザホルトは雪が降り積つたものらしいとの説を立て居たので、諸説紛々として居るので、左に此

▲研究の結果を報告した處が、デビット博士の如きはさうすれば、此層によつて氷の出来た年を知る事が出来る、其結果は凡て新しい年月しか経て居ないではないかと云ふ理由で、反駁されたが、是は誠に理由のない事で、是は氷の壓力と氣温と氷水の浮力とで説明する事が出来る、即ち此大氷壁の底の方は氷の壓力と水温と海水の浮力との關係からして、段々に溶解して行く、爲め其大氷堤が幾年を経過して居るか云ふ事は到底知る事を得ないのである、又大氷堤は非常に高低の度が烈しく、忽ち

▲峩々として三百尺以上もあるかと思ふと、直ぐ其隣の方は僅に二十尺に足らぬ處もある。是は即ち四方の陸から壓力を蒙る結果、始めは平面であつたものが、遂に褶皺を生ずるに至つたので、實に得易い道理なのであるが、從來の探險家は常に此方面に上陸せず、従つて研究をする機会がなかつた爲めに、其理を發見し得なかつたのである。

▲三大陸非接續説

そして此大なる氷塊は常にエラ／＼と動いて居る、是は即ち是等が氷水に浮んで居ると云ふ唯一の證據であつて、我々は南緯八十二度の地點に達した、其附近の雪原を以て大和氷原と命名したが、其地點に至る迄何等の陸地と稱すべき特長のある點を發見せず、常にウエルス灣附近の大氷塊と同一である事を知つたのである、彼のアマンドセン氏の説によると、南極から東西に渡る大山脈を發見し、是れ恐らくエドワード七世洲の山脈に接續するものであらうと報告せられたらしいが、是は只一の推定に外ならぬ事と思つて居る。但し吾々が到達した最後の地點が、凡そ何の位の高さに達してゐるか云ふ事は、十分器械の誤差を研究した後に非ざれば、確に發表する事は出来ないものである、今一つ南極に於て利めて知り得たのは

▲氷盤に関する研究 である、氷盤は彼のアイスバークと稱するもので、周圍が高く中央部が凹んで、恰も盆の形をなして居る氷であるが、是は從來は氷の張る際に生ずるもので、是が見え出すと追々氷が多くなると信じられて居た、それが爲めに第一回の航海に是を見て、中途から引返した次第であるが、第二回極地に上陸し、氷の研究を行ふに及んで、初めの考へは全然反對の現象である事を知つたのである、即ち大きな氷の破片を氷に投げ込むと忽ちにして形を變じて、斯う云ふアイスバークが出来る、再三再四實驗したが、悉く其結果を得て、始めて氷盤は氷の出来る初めのものに非ずして、融ける時に出来るものなる事を發見し、今更の如く第二回航海の失敗を悔いた事である。夫から又極地に於ける氷山には、大概

大きな洞穴があいて居て、中には

▲緑門の様な大氷山 も度々見受けた、其原理に就いて、ある人は氷塊の破片が水に落ちる際に當つて、空氣が其一部に包まれる爲、漸次に溶解するのであると云ふ説をも立てられたが、自分の目撃した處によると、大氷塊の下部に既に大きな洞穴があつて、ホートの如きも往々にして吸ひ込まれる位の大きさのものがある、而かも其洞は氷塊上部の高低に比例して、居る處を見ると、恐らく襪袋を生ずる際に生じ、其襪袋の一部が碎けて流失したるもので、既に斯の如き洞穴を生じて居たものであらうと云ふ説を述べた、デビット博士の如きも首肯され有様である。

アマンドセン氏の報告した二州の接續説に就て、今一つ不審に思はれるのは氏の實見によると、南極から東西に當つて一つの大山脈があつたと云ふが、東西に連る山脈が北方のエドワード七世洲と連續すると云ふ事は、實に根據なき事である。さらばエドワード七世洲は何うであるかと云ふに、吾々の想像に依ると

▲餘り大きくない島 であらうと思はれる、と云ふのは今回の探檢に際して、我々の一行はエドワード七世洲と南ビクトリア陸との間を、約百五十哩許り探檢して、其間の連絡なき事を知つたと同時に、別働隊の四川、渡邊二人はエドワード七世洲のアレキサンダー山に登つた、是は凡そ千五百尺の小山で是

を探検の結果其山の背後には何等の山もなき事を発見し、野村船長は船を以て七世州の東部を調査したが、其アレキサンダー山脈は僅に千二三百哩、この不得要領也で絶えて居る事をも発見したのである。さればこのアムントセン氏の云ふが如く、此兩大陸の山脈が互に接續してゐるとすれば、四川一行が探検した時、或は船長の探検に際して、遠くに此山影を認めなければならぬ筈であるが、兩方の報告とも

▲何等の連絡なき事、事を断言して居るを見れば、此七世洲は周圍二三百里の小島と見るのが至當であらう、假令一步を譲つて兩島が接續してゐるとしても我々の探検の結果から推せば、非常に大迂回をして居なければならぬが是は殆んど有り得べからざる事である、勿論七世州の東部に就ては十分なる探検研究をして居ないから全然孤立してゐると、断言する事は不可能であるが、若し接續してゐる場合にはサウスビクトリアに接續せずして、七世州から直線に西半球の州に接續してゐると想像するのが至當で、目下南極の地質圖を作れば、

▲南極を氷堤で縦断 して一はエドワード七世州地方一は南ヴィクトリア陸と云ふ風に分ち、其間に大なる氷堤の部分があるものと想像する。恰も日本の中國と四國との間に瀬戸内海が横たはるが如くに、この大海が横たはつて、夫に野氷が張り年々堆積して、遂に今日のアイスバリアが出来上つたものと解釋する事が出来る。尤もそれには尙種々の點から研究の餘地は澤山あるので、デピット博士は近々南極

に於ける鑽石を寄附される筈になつてゐるから、吾々が採集し歸つた諸所の鑽石の比較研究は、勿論氷の結晶に關する研究的の分析、其他尙澤山の手續と研究を要するのである、廿四の早稲田に於ける發表會の席上で、専門の學者から種々の御質問を受けたが、何分にも未だ此種の分析、其他が間に合はないので、追々十分なる御批評を仰ぎ度いと思つてゐる。

以上が、正々堂々東都知名の學者、新聞記者を集めて發表した、武田君の責任報告である、最後に於て、武田君は、研究修了後に發表することがあるとの一言を添へてあるが、それはそれとして、以上の報告をするにも、今少し慎重な態度を以てして貰はなくてはならぬ。

事は世界的である。比較的探検事業に頭の少ない、日本人に示すのには、拘はぬかも知れぬが、世界から注目されつゝある、我隊の發表はこの發表を以て、世界全體に發表したと思はねばならぬ。

然らば其報告は、事實的でなければならぬ、公明正大でなければならぬ。事實は

何處までも、事實として發表せなければならぬ。此際私情を以て事實を隠蔽し、或は曲解をほどこすなどは、小にしては、我探檢隊の名譽の爲めに、大にしては我國家の爲めに、看過すべからざる問題だと思ふ。

次に予は章を改めて、予が見たる南極上の警見を披瀝しようと思ふ。

第三章 探檢の結果發表に對する予が意見

一 二大陸問題

武田君は、前記の報告の如く、サースビクトリヤと、キングエドワード七世州が接續して居ないとの斷案を下し、大に得々然たる、有様であるが、こはあまりに早計ではあるまいか。突進隊が、ウエルス灣に上陸して、根據地を定め、其東南に

向つて突進の行を起したのは明治四十五年一月廿日であつたと思ふ、そして歸着したのは二月二日であつた、此間往復ヤツト十二三日の事であるから、此方面の探査は實に僅少の時日である。のみならず、沿岸隊の方も、エドワード七世洲に一寸上陸して、亞歷山頂に達したとはいへ専門的の學歴もない西川、渡邊兩隊員が何等の學術器械も提げずに山頂に達して歸つた丈であるので、これを公然とこの發表の證明にするのは探檢以上の冒険ではあるまいか。全體亞歷山へは、予も登攀した一人である。この事を發表しないのは、予が脱隊したといふわけであるだらうが、加何に予を憎むとして、歴史的事實を隠蔽するとは、

この事業の體面上如何なるものであらう。事實予も登山したに相違はない。この事は拙著南極探檢日記に、委細を書いてあるが、予は、西川、渡邊兩隊員の歸着が遅いので、島事務長及渡邊、柴田兩船員の助力の下に、亞歴山頂から二哩程前方の山腹まで達して、スケッチもする、又携ふる處の双眼鏡によりて、附近の地形を探查研究したのである。

その予等の意見を、さし置いてこんな發表をするからが、學者のやる立場でない。問題が間違つて來るのだ。

西川、渡邊の二人は、事實双眼鏡も持たない、たゞ、日本男兒の一徹この山頂へ、沿岸隊上陸記念の標木（この標木も予が

自ら秃筆を揮つて書したのである) を建てるといふのが一大目的で行つたのである。寫真器械は兩人共携行したが、根が素人だからこれも、十分の成功はしなかつた。結局たゞ山に達したといふ勇奮邁進のレコードを造つたのみに止まつたのであつた。予が亞歴山に就いての探查した一班の事は次の項に記すが、これまでに出來た(シヤツクルトン氏探檢後に出版)海圖には、亞歴山系は西南から東北に當つて一條の山脈を記してある丈であるが、これは、從來の探檢隊が、エドワード七世洲に上陸困難であつたから、上陸しても踏査が十分になかつた爲め、海上から認知した部分の地圖だけだからだと思ふ。

予は、亞歷山の山脈から、双眼鏡で熟視して、この山脈以外に一條の東南に向つて走つて居る山脈を、遙かに望見した。極地では唇氣樓もよく見えるのであるが、これは慥に一條の山脈であるといふことを望見した。諾威の隊長アムンドセン氏は別働の一隊を其根據地ウエルス灣(我突進隊上陸地點)からエドワード七世洲に向はしめ、諸種の踏査をしつゝあることであるが、其報告には、二大陸接續説を主張して居る。彼隊は我に比して、十分の調査日時を持ち疑つて、十分の踏査をして居るわけである。この隊の報告を反駁し或は否認するには、今少しの精査を試みなくてはならぬことと思ふ。

探檢とは、その文字に示してある通り、よく探りよく檢しての上の事である。今度のようなヒヤカシ的の見地から、世界の疑問を輕々しく、斷定することは、少し輕舉たるに流れはすまいか。南米と北米との兩大陸を、喉首より細いメキシコの陸地で連結されてある。又大陸續きには半島もある。サースビクトリヤにはエレバスの火山がある予は亞歷山も一の火山系だと思ふ節がある。(次項參照) 是に於てか二大陸接續否接續の問題は、今一段の詳細なる踏査の上ならでは斷定することは出来ぬ。

武田君の説中、野村船長が七世州の東部を調査した云々の記事は全く事實無根である。(予の探檢日記参照の事)

ア、公明正大なるこの事業に向て、かゝる詐欺的行爲を敢てするに至ては、具眼の人は果して如何に、我等の行爲を目するであらうか。

少なくとも學術部長てふ肩書を有する、この人の口から、かう妄言を出すに至つては、これ所謂一時をてらふ虚榮心の罪か、そも其人に良心がないのであるか。

武田君は成る程秀才であつたそうである。しかし淺くて廣いといふのは武田君の學識に關する世評である。

予は不幸ながら今回の武田君の發表に就て、この世評の當然たるを首肯したのである。淺くて廣い人が堂々こんな大問題を解決するわけには行かぬ。

一世の英傑、有数の大學の統率者たる人にして、斯の如き妄説を黙過さるるのは、少し、不謹慎ではあるまいか。

予は次にこの参考の爲め、亞歷山所見の一二を記さん。

二 亞歷山の所見に就て

亞歷山は、ビスコ灣(開南丸碇泊所より)の東南にあり。山頂までの直徑は約七哩計であるが、直線上にはごうしても登攀することが出来なかつた。

我等は迂回路を取つて進んだのであるが迂回路は、直南から氷壁の難路を登攀して、高氷原上に達し、緩勾配の山腹を進まなくてはならぬ。此迂回路は三十哩もある。

船から七哩の眼前に見ゆる亞歷山(海拔千四百五十呎)の小山に三十哩の道を行かねばならぬので、普通なら、二泊行軍位で往復せねばならぬのである、これを西川渡邊兩隊員は約廿五時間、予等の四人は、卅時間かゝつて、往復したわけである。

予が亞歷山を、火山脈ならんと、推定したのは、亞歷山の山麓たる邊は、非常に大陥落をして居るのである。これは普通の龜裂でない。氷河の出来る原因でもない、この山に熱があるた

めに、其熱に因て、かく大龜裂が出来て、幾百千年で出来た氷壁が丁度地震後に地面が崩壊した様になるのであらうと思ふ。

今一つの現象は、丁度亞歷山の山腹から三十米突計りの山腹に、一大龜裂が生じて、其龜裂の上部には、大雪崩の部が出来て、山の脈が點々顯れて居ることである。予等の目撃する處によると、其顯れた山の脈には、處々に岩石が見える計りである。そして予が火山系であらうと思ふたのは、その大龜裂から始終雪が瓦斯に變じて出来るように朦氣(?)が顯れて出ることである。これは西川渡邊も目撃したと予に話して居たのであつた。これは一時的の現象でなく、始終かゝる状態が續いて居るらし

い、故に山脈が顯れる計りに、大雪崩がするのであると思ふ。
 我等はこの顯れて居た、岩石や土砂が採集したかつたが、これを實行するには、尙幾多の時日を要し、相當の準備をせねばならぬので、遂に實行するを得なかつたのは遺憾千萬であつた。
 我沿岸隊が、大小の石塊六十餘個を採集したのも、この山脈の續きなる、西方高氷原の下であつた。
 その時に、石塊の氷山に附屬して居た状態を察するに、これも雲崩の爲めに、陸上の石塊が轉落して、附着したものと思はる。故にこの附近にも陸地があることは慥である。
 要するに亞歷山山脈は、其延長が中々長い。従てエドワード

七世洲は、随分大きい陸地である。

そして亞歷山山脈が、予が見た通り、果して丁字形でありとすれば、この陸地の、單に東西に、細長く延びて居る計りでない事が分る。隨而其幅員もどの位あるか、探檢の必要がある。

然して、後に其接續非接續が、始めて分るのであらう。

亞歷山山系を傳ふて、東し、南し、其畫くる處、續くる處を極むるのは、又一部の南極探檢である。面白い事業であると思ふ。予にして、再び南極に往く目がありとすれば、この解決に従事したいものである。

又エドワード七世洲なるものが、ホンの一寸の探検を経た計りであるから、此方面の探検には、少なからぬ発見を有す事があるだらうと思ふ。

兎に角、亞歷山頂に、一寸到達した計りで、其山の地層が、如何に走つて居るか、地質は果して何うであるか、山系は如何になつて居るかを、確實に調査せずして、一個の推定に因て、輕々しく斷論するといふ事は、この事業に忠實なるもの、誠意あるもの、なすべき事ではないと思ふ、否か。

三 氷 盤 論

武田君は又、氷盤に就ての自論を發表して居る。(前章参照)

そして曰く、氷盤は氷の融ける時に出来るものだとの新説を出して居る。

予はこれは、全然武田君の偏見論だと思ふ。何となれば、予は昨年第一航海でロス海に這入つた時と、本年二月ウエルス灣を距るに當つて、この氷盤の第一期時代即氷餅と釋してよい時代の發生現狀を目撃して、氷盤は頗る秩序的に漸次其形狀が大になることを慥め得るのである。

其始めは、誠に薄弱な、丁度薄い焼餅を浮べたやうなものであるが、ソレが、氣溜の降下するに従つて、漸次凝結し來り、餅のようになり次に盆のようになつて、最後に疊大以上になる

のであるが、これは頗る秩序的なると共に、最も迅速なものである。

本年ウエルス灣を距る折なごは、ウエルス灣頭を出ると、俄然天候が一變して、夫れ迄はうららかな日和が、風雪荒むようになつて来て、同時に氣温は俄然降下した。この時に當つて、夫れ迄は、折々氷塊が點在する丈の海面に、突然氷餅が出来た、同時に漸次強大になつて氷盤が発生したのである。氷盤上には降下する飛雪が其儘積るので、忽ちにして、大氷盤が形造られる。

併し船が沖に出てからは、潮流の關係、この現象は見えない

くなつた

武田君の説の如く、氷の破片を投げ込むでも、或は氷盤の發生が始まるかも知れぬが、予の想ふには、それは、氷盤を投入した爲め、一時其附近の海水が、冷却して、爰に氷餅を生ずる作用が起るからだと思ふ。

尤も今年ウエルス灣頭で、経験した氷盤は、一時的のものであると思ふ。時は尙未だ凍海期でないから。この時出来た氷盤は、再び融けてしまふであらうが、昨年三月にロース海で出會した大氷盤は、これはいよく海上が氷結する第一期であつたことが明瞭である、これに對する武田君の見解は、頗る當を失

しては居まいか。

而もこの説なごをも、得々然と従來の經驗家の説迄も打破して、自家の偏見を主張せんとするは、一時の虚名を博せんとする、一の奇僻ではあるまいか。

彼のデツビット氏は、無論有數な探検家には相違ないが、たゞ同氏との一茶話位なことを、立證にして、宛然世界の學界から、認められたように吹聴するのは、如何はしい次第ではなからうか、本邦にも極地探検の經驗家はないかも知れぬが、尙其道の大家は澤山在る。何もデビット氏の鼻息を伺ふにも及ばぬことと思ふ。予は始めから武田君が、デビット氏デビット氏と、一

も十も同氏を頼りにして、我探検隊の行動に關しても、同志の一行の意向をも没却して、同氏の指揮下にでもあるが如き行爲に出るのは、或は同氏と何等かの默契があるかも知れぬが、一私情に驅られて、國民的大事業を左右するのは甚だ心得ぬことである。

こは問題外ながら、ツイ憤慨に打たれて附言しただけである。

四 氷堤と氷河

氷堤に於ても武田君は、例に依つて喋々と奇説を吐いて居るが、これとてホンの一夜造りの論據では駄目である。

従來かゝる問題に關しては歐米の探検家は多く冬營して精確

なる實地調査を経た上の學説を發表して居るのである。まぐれあたりには、馱法騾的の説を構へたのでは、眞の學術的探検ではない。

武田君は、未だ氷堤と氷河の區別さへ、判明出来ぬではないかと思ふ。

そは、武田君歸朝當時の談話中、四人氷河云々の記事が新聞に出て居た。この四人氷河と武田君のいふ處などは、氷河でも何でも無い。此附近は、諾威隊も十分の調査をした處と思ふ、よし成さずとも、氷河などは、そう年々變るものでないから、早晚誰れかが否認するに違いない。そこで、予は先以つて、こ

ゝに其否認説を出して置くのであるが、この四人氷河と稱した處などは、氷堤の一部分上の積雪が、暖かい氣温で融解して氷堤上を流れてあとが少しあるのを、棒大的に氷河と稱し、加之これに四人氷河の命名をしたなごゝ、大袈裟な報告をしたのである。

こんな事が、外人にでも知れたら、大笑の種とせられて、他の事實的の發表まで、信用せられなくなるに到らんと思ふ。

鳥なき里の蝙蝠で、自分計りの意見を無暗に發表し、若干は理解力を有するものを、私情の爲めに没却して、出鱈目的愚説を吹聴し、一時を塗沫せんと欲する、淺間しき心裏に到つては、

寧ろ憫然の感が催さるゝのである。

五 乍併働いた武田君

以上は武田君の説を駁した、予の主張であるが、予は武田君の成績を全然没却せんとするものではない。同君は事實淺くて廣い多角形の男であるから、各種標本の保存法などは、大に武田君の力が與つて居る、又同君は本人自ら嘗て、教育用器械類の販賣をやつたといふ丈、器械類の使用方は巧者なるものである。自記器械諸種を携行して、其使用方法などには、随分同君は努力して居る。此點に於て予は同君の仕事は、却て他日の精密なる分析上の功に俟つものが多いと思ふのである。予は同君が今

少し慎重な態度を以て、學者らしく發表をせなかつたのを頗る遺憾とし、且同君の爲めに惜しむ處である。予は同君とは、よく喧嘩もした代り、又一番の知己である。同君も予の心事は十分知つて居る筈だが、遂に今回のように相反目するに到り、從て意思の疏通を缺き、重大なる報告問題まで及ぶようになったのは、返すくも遺憾の極である。

因にいふ、予が曩に無能學士だといふ事を報告した人及野村船長などには、別に新発見の學説もないことと思ふ、他日發表あらば、予は其可否を自分の見地上から論ずる考へがある。

六 予の發見

予は淺識薄學ながら、武田君が發表した事項以外に、エドワ
 ード洲にて、氷壁の奇形なる鱗氷壁とも名づくべきもの、及眞
 の氷河、氷田などの事に付ても踏査する處があつた。その詳細
 なる當時の行動及狀況は、拙著探檢日記中に、記述したからこ
 ゝには、其重複を避けて掲載せぬから、参考にされんと欲する
 方は、この日記の方を一讀されんことを望むのである。

何しろ今回の我隊の行動は、あまりに兒戲に等しい事で、武
 田君は三十日間の探檢をしたといふて居るが、事實突進隊の氷
 上生活が約二週間と、沿岸隊が氷上の三日間ほど活動したのみ

であるから、幾多の學術的調査も、計畫の十分の一も研究する
 ことが出来なかつたのである。これ果して誰れの責任であるか、
 我等は始めから決死この事業に従ふたのであるのに、サリトハ
 自らの不徳からこの結果に至つたのかしらあ。

第四章 我等の善後策

白瀬中尉は、得意然と定期船に乗じて、歸朝した當時、各新聞記者に公表するに、
 自ら學術界に功奏した、豫定通りの成功を収めたと傲語し、且つ、この結末を着け
 たら自分は、陸軍から貰つて居る恩給で喰つて行けるから、悠然山間に遁れて餘生
 を過す覺悟だと、實に呑氣なことを、告白して居るのである。

この人が一昨年、全國に叫號して、決死極南の中心に旭日旗を翻すとか、業若し

成らずんば、骨を氷野に埋めんとすと大言壯語した、その人であるかと思ふと、人間の精神もかうも激變するものかと、實になさけなくなつて来る。

予は先日ある人の白瀬氏の生立ちを悉知して居る人から、何白瀬は初めから、山でかゝつたので、それを眞面目に受けた、連中の氣がわからぬと思ふて居たが、果して今日に顯れて來た。白瀬氏がエキヌモ一部落に入つたなど、いふ事は、事實無根の作り言である、論より證據、白瀬はエキヌモ一部落の事は何にも知らぬ聞いて見給へ。周囲の人がよかつた爲め、其お蔭で出發はしたが、由來定見も膽力もない人だから、迎も成功出来るわけがない」といろく白瀬氏の欠點を列舉して居たのであつたが、或は白瀬氏には、虚言も方便だ（これは白瀬氏が時々我等に向つてもよく使ふ言葉であるからしばらく借用する）といふ考へで、羊頭を掲げて、狗肉を賣らんとしたのであるまいかと思ふ。又今日では、そう思はれた處が仕方がない。

先日ある人は（後援會側の）予に向つて、「君が今後東京殿下の下賜品まで頂いた白瀬氏に關し、彼是ケチを付けるのと不敬になる」と云々と、忠告された事がある。併し予は一時を彌縫して、畏こきあたりの御目をくらすすが如き行爲をした人の方が、何ぼう不敬になりはしまいかと思ふ、而も大臣たり宰相たりし人が、其後見に當つて居ながら、恬として知らぬ顔で居るとは、世も澆季ならずやと思ふ。

人は知らず、予はそんな腐敗漢ではない其出發の首途に臨み、恭しく皇城を拜して成功を言明して、鞆轂の下を辭した一人である。生命の在るかぎり精神の存する以上、一度倒れて七度起きなくてはならぬ。南極の探檢は、其中心こそ、他人に依て究められ、先鞭を着けられたれ、尙幾多探査の餘地がある。我等は方面を變じても、最初の「大言壯語に恥ぢぬ、効果を修めなくてはならぬ」。

予は先日大隈伯に拜眉の節も、「まだ私の南極探檢は濟みませぬから、今回の歡迎

會の席にも出ませなかつたが、私は假令一人になつても、將來を期し素志の貫徹に竭す考であります、今日から一つ錢儲にありついて蓄財し、自ら再擧の資を作り、堂々前耻を雪ぐべく、旗を擧げる決心です」と約した。成る成らぬは、未知の問題であるが、予の精神はこうである。

不肖惠一當年取つてこゝに二十有九歳、未だ玉碎の好機なく、全軀壯康瓦全今日に及び尙無窮の聖恩に浴して居るのである。冀くは皇天皇土予の素志の未だ些の挫折するなきを感察あれよかし。

拔山豪氣忍千辛、且傲壯康六尺身、蓋世剛腸堪萬苦、常期社稷一忠臣

こはこれ予が十二年前に述懐として作れる拙詩なり、一昔後の今日尙昔志の萬一も果す能はず、ア、予が他年この詩を見て破顔笑を流ふるの日ありやなしや。

因に記す、出發に臨み、決死血をすゝりて誓約したる同志の中、今も尙予と意

氣を同ふするものがあるのである。頃日度々予の許に來つて、等しく善後の策苦心して居るのである。澆季の世とはいへ、尙未だこの掬すべき正氣の存するあるは、國家の爲め喜びとすべきところ、予は衷心一人の喜びとのみにせぬのである。

第五章 次期の計畫

予は爰に一先づ、此編を終るのであるが、此機に臨み、予は自己の立場から、南極探檢不終結を告白するのである。

予は彼是、次期の計畫を遂行する爲めには、自分の本意ではないが、専心營利の奴となつて、若干の黄白を蓄積し、後援會とか、同情者とかなくとも、自己の獨力に依つて、一部隊を編成し、堂々天地神明に誓約した、素志の貫徹に力める都合で

ある。然らば次期の計畫は予が任意に出来る、誰れの干渉も受ける必要がない。予は爰に自己の備忘の爲め、從來に於て得たる我が經驗上よりの知識に因て、其理想的計畫を立案して置くのも、敢て徒事にもあるまいと思ふ。是に於て乎、この一章を附記したのである。

以下暫く予をして、其理想とする處を語らせて貰いたいのである。

イ、探検の目的

南極探検の流行する今日、其探検の區域も漸次縮少されつゝあるが、尙幾多の餘地は残つて居る。而し予が實行に着手する迄にはいろいろ變遷する處があるから、爰には其目的はまづ未決の問題とすることにしよう。が學術的方面の諸研究は、出來得る丈け精密に詳細に探査することは勿論である。又要するに前人未踏の地域を

選ぶで活動するといふことは、其大目的である。

ロ、探検期間

探検期間は、第一期を滿二ケ年とする事然して、探検部隊は、必ず一ケ年の極地冬營を爲し、極地冬營期間に於ける諸種の學術的研究に力むる事。

ハ、探検部隊組織

探検部隊は、これを分つて三つとする。一は陸上部隊、二は停止觀測部隊、三は海上部隊である。

これを細別すれば、

- 天文學專攻理學士 一名
- 氣象學同 一名
- 博物學同 一名

海上部隊 總員卅七名

鍛工	木工	給仕	厨夫	水夫	事務長	水夫長	機關士	機關長	運轉士(同上)	副船長 <small>(可成海軍出身者)</small>
一	一	一	一	十二	一	一	一	一	二	一
名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名

陸上部隊 總員九名

文學士	測量師	寫真師兼畫師	醫學士	各員助手	內一名は厨夫とす	氣象學專攻學士	天文學專攻會	統計學者	助手(厨夫兼)	船長 <small>(索要深き海軍醫備佐官)</small>
一	一	一	一	二		一	一	一	一	一
名	名	名	名	名		名	名	名	名	名